The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	等位構造の形態統語論的研究
Author(s)	依田, 悠介
Citation	大阪大学, 2013, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/26166
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

等位構造の形態統語論的研究

大阪大学大学院
言語社会研究科言語社会専攻
博士学位請求論文
依田　悠介

2013 年 6 月

ABSTRACT

by
Yusuke Yoda

In this dissertation, I investigate several aspects of Coordination in Japanese within the theory of Generative Grammar. This dissertation is divided into two parts. The first focuses on the mechanisms to derive two specific verbal conjugation forms, namely *Renyoo-form* (contuitive form) and *te-form*. The latter half focuses on the structure of Coordination in Japanese. The detail of each chapter is as follows:

Introduction (*Jyo*)

Introductory Chapter (*jyo)*: In this chapter, I provide the aim of this dissertation and the theoretical framework which I assume throughout this dissertation. In this dissertation, morphology and syntax will not be distinguished. Thus I adopt the theory of Distributed Morphology to provide adequate explanations to morpho-syntactic phenomena which relate to form Coordination.

Part I:

Chapter 1: In chapter 1, I present an analysis of the semantic distinction between *Renyoo-form* and *te-form*. The distinction has been widely discussed among both traditional and theoretical perspective. However, their discussion is mostly intuitive. Thus, I give a theoretical explanation to distinguish these two forms.

Chapter 2: In chapter 2, I present an analysis of the derivation of *Renyoo-kei* of verbs. Verbs are realized as *Renyoo-form* under the environments where; two sentences are connected; (ii) The relation between verbal *Root* and T is disconnected due to an intervening item, such as particle or other verbs; (iii) Verbs are nominalized. A careful consideration of these environments reveals the fact that *Renyoo-form* is the realization of the minimal structure of a verb. Concerning this, I discuss what the "minimal structure" exactly means.

Chapter 3: In chapter 3, I present an analysis of the derivation of *te-form* of verbs. Based on the argument provided in chapter 2, I claim that *te-form* involves T, Fin and, moreover, & projection within its domain.

Part II

Chapter 1: In chapter 1, I propose the structure of Coordination, based on the morpho-syntactic properties of verbs provided in the previous chapters. The careful observation of the Coordination brings us the findings such as difference between Coordination and Subordination despite surface similarities between them, and the structure of Coordination.

Chapter 2: In chapter 2, I further argue for the structure of Coordination. I propose that the mechanisms of "merge", which is assumed to be the most primitive operation of human language, can make a distinction between Coordination and Subordination.

Conclusion and Further Issues

Conclusion: In the concluding chapter, I provide the summary of this dissertation and future issues.

等位構造の形態統語論的分析

依田　悠介

要旨

本論文では，日本語の等位構造を生成文法理論 (GENERATIVE GRAMMAR) とくに，極小主義理論 (Minimalist Program: Chomsky 1995, 2000, 2001,2004, 2008, 2012) の枠組み，そして，分散形態論 (DISTRIBUTED MORPHOLOGY: Halle and Marantz 1993, 1994, Harley and Noyer 1999, Embick and Noyer 2001, 2008, Sidiqqi 2006, Bobaljik 2012) の枠組みから分析した．

本論文の目的を (1) に示す．

(1) 日本語の等位構造，特に，連用形，テ形によって接続される複文を生成文法理論に基づいて分析し，生成文法理論の様々なメカニズムに対して経験的な証拠を提出する．

(1) で述べられる生成文法理論とは，極小主義理論，そして，極小主義理論を形態統語論へ応用した，分散形態論の両者を含む広い意味での理論を意味する．

本論文は三つの部分から構成される．この構成には理由がある．日本語の等位構造は，述語の活用と大きく関わる現象であり，統語論のみからの分析では不十分であり，形態的な考察を要する．しかし，等位構造という複文を構成するメカニズムは，明らかに，統語論のレベルの問題である．よって，少なくとも日本語においては，等位構造は形態論の問題であり同時に，統語論の問題でもあると言えよう．更に，等位構造には，表層的に等位接続の形式を持っているにも関わらず，意味的には従属接続をなしているような例が散見され，述語の意味と関わる．よって，意味論の問題へとも広がっていく．つまり，多くの問題が絡まりあったカオスを形成しているのである．そのそれぞれの部分を紐解くためには，形態論のみからのアプローチでは，当然，統語論や，意味論において無理が生じ，統語論の分析のみでは，形態論，意味論に無理が生じることとなろう．もちろん，意味論のみで分析可能なものでもない．よって，それぞれの部分を詳細に検討し，更に全体を通して俯瞰的な理解を得るように本論文は構成されている．

以下では，そのそれぞれの部分に関する大まかな内容を提示する．

(2) a. 序：研究の意義・枠組み
本論文が持つ問題の出発点を提示する．そして，何が問題であるかについて記述した．更に，第 I 部以降の議論で用いられる基本的な理論的枠組みを説明した．
b. 第 I 部 X^0: の意味論と統語構造
第 1 章，第 2 章，第 3 章からなり，意味論と形態論を中心とする議論を展開した．
c. 第 II 部 XP: 等位構造の統語的研究
第 1 章，第 2 章からなり，統語論に関わる議論を展開した．

各章の要旨は以下の通りである．

序では，本論文の意義および，本論文が依拠する理論的枠組みに関して説明を行った．特に，伝統的な国語学において述べられる，「連用形とテ形が相互交替可能な場合があり，一見同様の振る舞いを示すように見えるが，その詳細は典型的には，連用形が従位，等位の両者を示し得ることに対し，テ形が従位を示すことが多い」 (言語学研究会 1989, 他) というこれまでの分析を振り返った．続いて，本論文が依拠する理論的枠組みの，極小主義理論における幾つかの理論的仮定，そして，分散形態論での，表示のレベルを導く理論的仮定を提示した．

(3) 極小主義理論 (MINIMALIST PROGRAM)
a. 素性 (FEATURE)
b. 派生と領域 (DOMAIN)
c. 併合 (MERGE)

(4) 分散形態論 (DISTRIBUTED MORPHOLOGY)
a. 語彙挿入 (VOCABULARY INSERTION)
b. ルート仮説 (ROOT HYPOTHESIS) と語の定義 (Definition of “WORD(S)”)
c. 線形化 (LINEARIZATION) と連鎖構築 (CONCATENATION)
d. スペルアウト (SPELL-OUT) 後の操作

特に，分散形態論は形態統語論の理論としては比較的新しい理論であり，かつ，日本では学習者向けの本を出版されていないという背景を考え，現行の理論をもれなく解説するということも念頭においた．

以下で第 I 部の構成を述べる．第 1 章では，連用形接続とテ形接続の時制を形式意味論の枠組みを用いて分析した．連用形とテ形に関わる問題は，先に述べたように，伝統的国語学においても，また，生成文法でも，問題意識をもって取り組まれている現象である．しかし，これまでの多くの研究は以下に示される久野 (1976) の例文判断の，(5b) は「太郎はよく遊んだ後でよく勉強する」一方，「太郎は遊びも勉強もともに良くする」の意味が無いという判断を受け入れ，連用形，テ形の間の相違点に踏み込んだ分析は多くない．

(5) a. 太郎はよく遊び，よく勉強する．
b. 太郎はよく遊んで，よく勉強する．

(久野 1976: 122)

しかしながら、このような違いが生じない並列解釈が存在するのも事実である．

(6) 体育館には男子生徒が{居/居て}，校庭には女子生徒が居る．

第 1 章では，Ogihara (1996, 1998), Nakatani (2004) で採用される相対時制理論 (RELATIVE TENSE THEORY) と，Predicate Modification (Heim and Krazer 1996) という理論的仮定を用いることにより，時制辞とは関係なく，連用形とテ形の両者で並列解釈を生じるメカニズムを明らかにした．

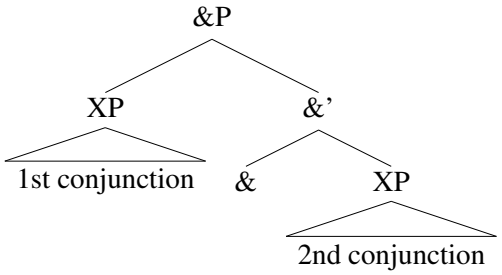
第 2 章では，田川 (2009, 2012) で整理された連用形の出現環境についての記述的整理から出発し，これまで理論的には明らかにされていなかった，連用形節が時制辞 T に関わらずに生じ得ることを「時間副詞，主格付与のメカニズム，かき混ぜ」の点から確認し，連用形が Root-*v* 複合主要部 (Root-*v* AMALGAM) の音韻的具現化であることを示した．更に，T が存在し得ない連用形名詞句の議論を通して，日本語の態 (VOICE) 要素が，必ずしも，独立した動詞的な要素である訳ではない可能性を指摘した．更に，その結果，日本語の連用形名詞が結果名詞句および，過程名詞句として機能する際の統語構造を明らかにし，その構造は日本語において特有な現象ではなく，トルコ語の等位構造で見られる Suspended Affixation をも説明しうることを示した．

第 3 章では，Hasegawa (1996), Nakatani (2004) の分析を踏襲し，更に改訂を加えた Yoda (2012, 2013) の分析を基盤として，動詞テ形における「テ」が&P という投射を含む T-Fin-&複合主要部 (T-Fin-& AMALGAM) であることを示した．更に，テ形の「テ」名詞接続の「ト」，時制辞が以下のような語彙挿入の規則により導くことができることを示した．

(7) a. Past form $T_{[+Past]} \leftrightarrow$ ta / ____$Fin_{[+Fin]}$
b. Non past form $T_{[-Past]} \leftrightarrow$ (r)u / _____$Fin_{[+Fin]}$
c. & $\leftrightarrow$ to / $X_{[+N]}$_____
d. & $\leftrightarrow$ te / _____ (elsewhere)

第Ⅱ部の構成は以下の通りである．第 1 章では，連用形節とテ形節が表層では等位構造を持っているように思われる例を詳細に検討した．具体的には，Ross (1967) で一般化される等位構造制約を用いることで，等位構造と付加構造の間で曖昧であることを示し，その詳細な統語構造を検討した．第 5 章は特に，日本語の等位構造を検討し，連用形節およびテ形節が階層構造において高い振る舞いを示すことを検証した．その結果，主要部後置型言語の日本語も，英語等の主要部前置型言語と同様に，(8)の統語構造を持つことを主張した．

(8)



しかし，(8) の構造そのままでは，日本語の第一等位項が，&主要部と音韻的に構成素を形成できないため，序で紹介した，スペルアウト後の操作により，第一等位項が&主要部と構成素を構築することが可能であることも示した．

第 2 章では，人間の言語計算機項が Huser, Chomsky and Fitch (2002) で述べられるように，「狭義言語機構 (FACULTY OF LANGUAGE IN NARROW SENSE)」と「広義言語機構 (FACULTY OF LANGUAGE IN BROAD SENSE)」から成立し，かつ，言語の演算機構として併合のみが存在するという， (9) の仮定に従い，等位構造と付加構造を併合のメカニズムによる分析を提案した．

(9) Interfaces + Merge = Language (Chomsky 2010: 52)

(9) に従えば，併合によってのみ言語は構造を構築することが可能となる．よって，等位構造は項を構築する併合と付加部を構築する併合との差異で，連用形/テ形接続の等位構造，付加構造は峻別されることになる．更に，第 2 章では，*v*P に付加される要素は抜き出しが許されるという Boeckx (2008), Trusell (2007a, b), Narita (2012) 等の分析を踏まえ，日本語の付加詞が *v*P 付加詞であると議論した．さらに，付加詞からの抜き出しを許す日本語の連用形節，テ形節と文終止節と文終止節の構造的関係性を分析した．

本論文では全体の議論を通して，以下のことを明らかにした．

(10)
a. 連用形は Root-*v* 連用形節が *v*P 構造あるいは *n*P 構造を持ち T レベルを持たない
b. テ形は *v*P レベル以上の要素が関係する構造を持つ．
c. 連用形接続/テ形接続はともに等位構造，付加構造の間で構造的に曖昧である．
d. 主要部後置型言語の日本語でも，等位構造は，主要部前置型と同様の構造をもつ．
e. 付加詞は，等位構造と同様の構造を持ち，併合のタイプにより等位構造から区別される．

謝辞

本論文の大部分の分析には多くの問題を内包し，かつ未整理のアイディアが多く含まれているだろう．また，本論文はレトリックに富み，読み易く，読み手をドキドキワクワクさせながら，言語学の世界に引き込むような論文には決して仕上がっていない．これは一重に筆者の未熟さからであり，読者の皆様に多大な努力を強いているだろう．本論文を手にとり，辛抱強くお読みくださった全ての皆様に感謝申し上げる．

続いて，筆者の主指導教員である．大阪大学大学院言語文化研究科言語社会専攻教授の三原健一先生に多大な感謝を申し上げたい．三原先生には，筆者が日本大学を卒業し，シンタクスの「シ」の字も知らない頃から，忍耐強く指導をして頂いた．三原先生は，不勉強な筆者の為に忍耐強く(学生時代はほぼ毎月！) アポイントメントの時間を取って下さり，未整理なアイディアでも熱心に耳を傾けて下さった．

また，三原先生は，常に「新しいデータを見つけないといけません」，「依田くんのこの話のどこに新しいデータがあるの？」と，新たな理論ばかりに傾倒し言語事実を無視し理論のみを見る傾向にあった筆者に，常にデータの大切さを教えて下さった．本論文で筆者が本来の意味で「新しいデータ」の発見ができたかは定かではない (十分にはできていないかもしれない...) が三原先生のご指導により，少なくとも「データの大切さ」を学んで本論文を執筆しているつもりである．三原先生のご指導に対し，ここに記して多大な感謝を申し上げたい．

続いて，筆者の副指導教員の小矢野哲夫先生，堀川智也先生，杉本孝司先生，越智正男先生にも感謝を申し上げる．特に大阪大学言語文化研究科の小矢野先生，堀川先生，杉本孝司先生には，分析の方法が大きくかけ離れている筆者の論文を忍耐強く読んで頂けたことに感謝申し上げる．

話は大学学部時代に戻り，筆者が日本大学文理学部英文学科の塚本聡先生にもこの場を借り感謝申し上げたい．塚本先生には，筆者が大学一年生の頃に「英語学概論」の授業を通して言語学の面白さを教えて頂き，そして，科学的な言語分析の世界の一端を見

せて頂いた．この経験が現在に繋がっていると思っている．この場を借りて感謝申し上げたい．

更に，本論文を執筆に関して多大な助言を頂いた学外の方々，そして言語学の面白さに目を向けさせて頂いた方々に対して感謝申し上げたい．まず，北原博雄先生に言及しない訳にはいかないだろう．北原先生には，日本大学の英文学科に所属していた筆者に「日本語学」の世界を紹介し，更には筆者を日本語の世界導いて頂いた．北原先生との出会いがなければ，筆者は日本語の研究に足を踏み入れていなかっただろう．続いて，筑波大学の田川拓海さんにも感謝申し上げたい．田川さんには，筆者を分散形態論の世界に誘い，かつ，研究仲間として，そして，一歩先を行く先輩として，多くのことを教えて頂いた．また，青柳宏先生には，毎回，毎回，筆者がとんちんかんな話題を持って話を持っていくにも関わらず，常に真剣で，そして，暖かい助言をして頂いた．この御三方にも感謝したい．

更に，更に，筆者が2010-2011年に研究留学を行った University of Pennsylvania (UPenn) の David Embick教授, Julie Ann Legate准教授 および、2012年の春に研究を行った，University of Connecticut (UConn) の Jonathan D, Bobaljik 教授, Stefan Kaufmann 客員教授にも感謝申し上げる．UPennで研究中，Daveには非常に多忙な中，(本当に毎週！) アポイントの時間を作って下さり，筆者の未整理な分析に耳を傾けて頂き，更には (三原先生に続きまた！) データの見方を説いて頂いた．また、Julieにも，筆者がSyntaxの分析で悩んだ時には、いつでも常に話を聞いて下さった。更には、UConn滞在中には、Jonathanに、理論的分析そして、(ここでもまた！) データについて助言を頂いた。Daveと、Jonathanに言われた以下の一言「言語を一般化するためには、様々な言語を見る必要がある」は、現在の自身の研究に強く影響している。

更に，更に、更に...博士論文執筆中に学内／学外でお世話になった下記の方々に，ここで記して御礼を申し上げる (アルファベット順，敬称略).

Chris Ahern，秋田 喜美，青柳 宏，浅野 真也， Željko Boskovič，Chris Davis，Aviad Eilam， 藤田 耕司，福原 香織，福島 一彦，船越 (後藤) さやか，船越 健志，後藤 亘，Stephen Harding， Heidi Harley，早瀬 尚子，平岩 健，廣津 公子，保坂 道雄，飯田 泰弘，今西 祐介，井本 亮，井上 加寿子，石田 尊，石塚 智子，石川 弓子，Jungmin Kang，加藤 正治，加藤 孝臣，川原 功司，吉良 文孝，岸本 秀樹，小町 将之，近藤 真，小谷 早稚江，工藤 和也，Yong-Cheol Lee，松原 文典，松岡 和美，三宅 知宏，宮本 陽一，睦 宗均，宗像 孝，中村 浩一郎，中西 公子，中尾 千鶴，中谷 健太郎，南部 智史，成田 広樹，那須 昭夫，那須 紀夫，西山 國雄，越智 正男，小田 健司，於保 篤，大滝 宏一，岡 あゆみ，大川 祐也，小野 創，大関 洋平，坂本 勇太，佐野 まさき，佐野 慎一郎，澤田 治，柴田 義行，嶋村 貢志，Florian Shwartz，Antonio Smith，杉本 孝司，鈴木 幸平，田川 拓海，高峰 香織，高野 祐二，竹内 肇，竹沢 幸一，瀧田 健介，玉木 晋太，田村 直之，田中 秀治，田中 裕幸，田中 竹史，辰巳 雄太，冨岡 諭，塚本 聡，浦 啓之，浦木 貴和，漆原 朗子，臼田 泰之，渡辺 明，渡辺 拓人，John Whitman, Susi Wurnbrand，山田 政寛，吉村 大樹，吉永 尚， Yongsuk You，于 一楽，由本 陽子.

また，博士課程＋αの研究生活を豊かにしてくれた以下の方々にも，御礼申し上げたい．彼らの暖かい支援そして，ビールの誘惑があったからこそ (?) ，博士論文を最後まで書くことができたと言っても過言ではないだろう (アルファベット順，敬称略).
Igor Dodevsky, Frank Hoffman, Mac Kelly, 齋藤 暢是，Jero Segovia, 清水 毅，John Washington.

最後に私的ではあるが，博士課程までの進学，そして，海外留学，関西の滞在を精神的に，そして，金銭的にも多大な援助をしてくれた，両親，依田尚己，依田美恵子
に心から感謝を申し上げたい．

本論文を両親，依田尚己，依田美恵子に捧げる．

目次

ABSTRACT i

要旨 iv

謝辞 viii

目次 xii

序：本研究の意義・枠組み 1

等位構造の形態統語論的研究 3

1. 活用と等位構造 *3*

1.1. 活用形に関するこれまでの分析 5

1.1.1. 連用形とテ形とは 5

1.1.2. 活用に関する議論 6

1.1.3. 連用形とテ形 8

1.2. 本論文の構成と各章の目的 8

2. 形態統語論理論 (THEORY OF MORPHO-SYNTAX) *11*

2.1. 極小主義理論 (MINIMALIST PROGRAM) 11

2.1.1. 極小主義のモデル: 素性 (FEATURE)， 派生 (DERIVATION) と領域 (DOMAIN) 11

2.1.2. 併合 (MERGE) 14

2.2. 分散形態論 (Distributed Morphology) 15

2.2.1. DM の派生モデル 16

2.2.2. 語彙挿入 (VOCABULARY INSERTION) 16

2.2.3. ルート仮説 (ROOT-HYPTHESIS) と語の定義 19

2.2.4. 線形化 (LINEARIZATION) と連鎖構築 (CONCATENATION) 21

2.2.5. スペルアウト後の操作: 22

下降 (LOWERING) と 局所性による素性の順序変換 (LOCAL DISLOCATION) 22

3. 序のまとめ *27*

第 I 部： X^0 **29**

第 1 章 連用形節接続とテ形接続の相関 31

1. 二文の接続の形式 *31*

2. 連用形接続とテ形接続 *32*

2.1. 連用形接続 32

2.2. テ形接続 36

2.3. 連用形接続とテ形接続の対照 37

3. テ形接続の形式意味論的アプローチ *38*

3.1. 日本語の時制指定(Ogihara 1996, 1999) 39

3.2. テ形のテンス解釈 (Nakatani 2004) 40

4. 連用形のテンス：連用形節の接続構造とテンス指定 *44*

5. テ形節のパズル-並列解釈を求めて- *48*

6. 連用形接続とテ形接続とは *52*

第 2 章 連用形節と最小句構造 53

1. 連用形節の統語構造 *53*

2. 連用形の出現環境 *54*

2.1. 連用形の出現環境に関する考察 55

2.1.1. 動詞の直後に取り立て詞が介在する場合 55

2.1.2. 一部のいわゆる助動詞や接続形式に前接する形態として現れる場合 56

2.1.3. 「X＋連用形＋する」の場合 56

2.1.4. 動詞句や動詞そのものに付加し，範疇を変化させる接尾辞の前の環境および，複合語の V_1 要素として出現する場合 57
2.1.5. 連用形がそのまま名詞句として使用される場合 58
2.2. 時制を持つ連用形節？ 59
2.2.1. 時間副詞の介在 59
2.2.2. 主格付与と拡大投射原理 65
2.2.3. 連用形節内でのかき混ぜ 69
3. 最小句構造としての連用形 72
3.1. 語彙挿入 (VOCABULARY INSERTION) と再調整規則 (RE-ADJUSTMENT RULE) 72
3.2. 連用形の派生 74
4. 名詞化された連用形 77
4.1. 範疇変化と循環領域 79
4.2. 日本語の動詞転換名詞 84
4.3. 連用形の統語構造 88
4.4. 結果名詞句と過程名詞句: トルコ語の Suspended Affixation から 89
5. 連用形の構造と音声的具現化 92
第 3 章 テ形接続と等位構造: &主要部の音韻的交替現象 93
1. はじめに 93
2. テの機能を巡って 94
2.1. テ形接続の機能と時制 94
2.1.1. テ: 意味的に空な接続形式とする分析とその問題点 95
2.1.2. Non-incidental 分析 (Hasegawa 1996) 96
2.1.3. 時制形態素としてのテ (Nakatani 2004) 97
2.1.4. CP 領域に関わる諸問題 99
2.2. & 主要部の交替現象 102
3. 形態統語論的時制辞と&主要部の交替現象 105
3.1. 主要部の音韻的具現化の交替: 過去形と非過去形 105
3.2. 主要部の音韻的具現化の交替: &主要部の音韻的具現化 107
4. &主要部の交替現象 111
第Ⅱ部：XP 113
第 1 章 二節の接続 115
連用形/テ形接続の等位構造と付加構造 115
1. 問題の所在 115
2. それは本当に等位構造？ 115
2.1. 等位構造の並列性 116
2.2. 等位構造の非並列性 117
3. 等位接続と付加：連用形 120
3.1. 連用形接続の類型 120
3.2. 連用形の統語構造 120
3.3. 連用形接続: 等位/付加 121
4. 等位接続と付加: テ形接続 124
4.1. テ形接続の類型 124
4.2. テ形の統語構造 125
4.3. テ形接続: 等位/付加 126
5. 更に日本語の等位構造と付加構造 128
6. 等位接続を導く構造 129
6.1. 何と/で何を接続するのか 130
6.2. 日本語の等位構造 133
6.3. 主要部後置型言語の等位構造 136
7. 語順を導く形態規則 142
7.1. 英語の等位接続詞と要素間の形態音韻的関係 142

7.2.　日本語の要素間の形態音韻的関係のパズル　142
7.3.　局所性の再分析と形態統語的移動操作　144
7.4.　ケーススタディ　146
7.4.1.　連用形接続の等位構造　146
7.4.2.　テ形の等位構造　147
8.　連用形とテ形節の等位構造/付加構造　149
第 2 章　併合/ラベル/ドメイン　151
1.　統語演算規則としての併合　151
2.　併合とラベルと投射　152
2.1.　二つの併合操作　153
2.2.　ラベルのアルゴリズムと移動現象　154
2.3.　ラベルの計算と付加構造　157
3.　付加詞の併合と抜き出し　158
3.1.　束縛条件と付加構造　159
3.2.　付加詞からの抜き出し再考　160
4.　日本語の付加構造　161
4.1.　連用形接続の等位構造: 再考　162
4.2.　連用形の付加構造　163
4.3.　テ形の等位構造:再考　165
4.4.　テ形の付加構造　166
5.　併合/付加/ラベルと抜き出し:等位構造と付加　168
結論と展望　170
結論と展望　171
1.　結論　171
2.　今後の課題と展望　172
参考文献　175

序：本研究の意義・枠組み

等位構造の形態統語論的研究

1. 活用と等位構造

通例，節と節を接続する際は，接続形式によって接続される二節の間の意味関係を示す．日本語では，二つ以上の節を接続する際に，その二つの節の意味関係を示すため，様々な接続形式を用いる．

(1) 【付帯状況】
a. 彼はテレビを見ながら，食事をする．
b. 膝を抱えて，泣いた．

(2) 【時間関係】
a. 夫が帰って来たとき，妻はもう寝ていた．
b. 弟が歯を磨く前に，僕が歯を磨いた．

(3) 【因果】
a. 風邪を引いてしまったので，今日は学校を休もうと思う．
b. 今日は疲れたから，もう寝よう．

(4) 【目的】
学校へ行くために，バスに乗った．

(5) 【条件】
大学に行けば，友達に会える．

(1) − (5) ではそれぞれ，接続形式を介して二つの節が接続されており，接続される二つの節の意味関係は明確である．また，同時に(1) − (5) は，接続詞によって導かれる節が，文を終止する節に対して副詞的に従属接続されている．

しかし，(6a–e) は，接続される二つの節の関係は，(1) − (5) ほどは明確ではない．(6a) は，動詞連用形によって導かれる節 (以降，連用形節)，(6b) は，動詞テ形によって導かれる節 (テ形節)，(6c) は，動詞終止形 +「そして」(6d) は，動詞終止形 +「が」，(6e) は終止形 ＋ 「ばかり」で一つ目の節がまとめられている．このそれぞれの節と，後続する文を終止する節 (文終止節: TERMINAL CLAUSE) の関係は，統語的な側面から考えた場合に (i) 「時制辞の欠落」や，(ii)「て，そして，が，ばかり」等の接続詞の介在等から，副詞的な従属節であると結論づけられそうである．しかし，意味的な関係を考えた場合に，接続される二つの節の関係は，ある種並行的な関係性を保って接続されており，二つの節の意味的な軽重関係がなさそうである．よって，それぞれの節と文終止節との関係は，主節と従属節の関係と簡単には言い切れないように思われる．

(6)
a. おじいさんが山へ芝刈りに行き…
b. おじいさんが山へ芝刈りに行って…
c. おじいさんが山へ芝刈りに行った，そして…
d. おじいさんが山へ芝刈りに行ったが…
e. おじいさんが山へ芝刈りに行ったばかりか…
おばあさんが川へ洗濯に行った．

本論文では (6) で提示する二つの節の接続関係を詳細に検討することを目的とする．

ただし，(6) のタイプの接続関係は決して一枚岩ではない．まず，文を終止しない方の節の動詞の形態を見ると，連用形節，テ形節，終止形+「接続詞」の形式をとる．(6) に示される接続形式を検討するためにはそれぞれの動詞の活用形が接続関係に対してどのような形態論的な特性を持つのかということを詳細に検討する必要がある．

特に (6a, b) に関しては，よく知られるように，「付帯状況」，「時間的/因果的継起関係」，「並列関係」の解釈が相補分布的に存在している．これらの，連用形接続および，テ形接続での従属節的な振る舞いと非従属的振る舞い，換言すれば，等位接続としての振る舞いに関して詳細に検討する必要があるだろう．

よって，本論文では，連用形及びテ形による節の接続関係を明らかにするために，(i) 連用形とテ形の形態統語論的特徴および，その派生について，(ii) 形態統語論的な分析により導かれた連用形および，テ形の統語論的な振る舞いの二点を検討する．

1.1. 活用形に関するこれまでの分析

1.1 節では，これまでに提出された国語学的な動詞活用に関してまとめる．現在に至るまで，動詞の活用と統語理論との関わりに関して統一的に分析した研究は決して多くない．それでも，近年では三原・仁田 (2012) 等の刊行により，統語理論と活用形式の相関関係が注目されていることが見てとれる．しかしながら，これまでの理論的なアプローチをとる活用研究の多くは，活用形式の表示を得るための統語的な構造を追求するにとどまり，生成文法理論 (GNERATIVE GRAMMAR: Chomsky 1957, 1970, 1980, 1982, 1986, 1995, 2000, 2001, 2004, 2008, 2012) でいうところの主要部レベル ($= X^0$ レベル) を対象としたものが大半を占める．本論文では，その X^0 レベルの分析に加え，活用研究の範疇を XP レベルの句構造そして，その句構造に関わる操作へ拡張した議論を展開する．また，本論文は一貫して生成文法理論からの分析を提示するが，その分析は，これまでの国語学で提出されている分析からの知見を多く得ている．

1.1.2 節では，伝統的な国語学において提出された活用形に関する議論を振り返る．ただし，本論文で中心的に議論するのは連用形とテ形であるため，それに関係する議論をのみを取り上げる．

1.1.1. 連用形とテ形とは

本論文で扱う連用形とは (7) のように「ます」の前の環境に現れる動詞の一形態に関するカバータームである．

(7) 「ます」に続く形: kak-i-masu / yom-i-masu/ uta(w)-i-masu/ ki-masu…
連用形 連用形 連用形 連用形

また，本論文での「テ形」とは，連用形に「テ」が後接したものであると考える．

(8) 連用形にテが続く形: ka(k)i-te/ yon -de/utat -te / ki -te…
連用形-テ 連用形-テ 連用形-テ 連用形–テ

1.1.2. 活用に関する議論

佐久間 (1936)， Bloch (1946a, b)，芳賀 (1962)，渡辺 (1971) 等の国語学での活用に関する議論の歴史は，寺村 (1984) が詳しくまとめているので，立ち入った紹介を行うことは避けるが，寺村の活用に関する分析にはここで触れておく．ここで，寺村を紹介する大きな理由は，寺村の活用に対する見方が，今日の日本語の活用研究に対し「活用語尾を形態論とシンタクスとのいわば相互乗り入れの領域と考えることによる」という部分 (=(9c)) で，近年の活用研究に多大な影響を与えているためである．寺村の指摘する統語論と形態論との相互関係は，本論文では形態統語論という統語的なメカニズムを用い，動詞の活用形という形態に関する分析を行うという点と基本精神を共有していると考えられる．

それでは，寺村の活用に対する見方を振り返る．寺村は活用に関して以下の様な立場を取る．

(9) a. 活用語尾は単一の形態素である．
b. 活用語尾たる形態素には，それでその発話が言い切りになるか否かは別として，それに固有の描叙類型的意味が認められる．
c. 形態的に同一である活用語尾は，構文的機能は違っても，同一の活用語尾とする．逆に，構文的機能は同一，又は似通っていても，形態的に異なるものは別の活用語尾とし，呼び名の上でも区別する．

(寺村 1984:42)

ただし，注意したい点として，本論文で分析する連用形とテ形に関しては直接関係しないが，寺村の活用に対する見方は一部，三原 (2007, 2010, 2011a, b, 2012) らの提示す

る生成文法の観点からの活用形分析と齟齬をきたす可能性がある．特に，(9c) の「形態的に同一である活用語尾は，構文機能は違っても同一の活用語尾とする (下線部は筆者) 」に関する部分についてが問題となりうる．寺村の見方では，終止形と呼ばれる形態，つまり，動詞の過去形/非過去形と連体形の区別を行わない立場をとる．本論文では過去あるいは非過去の時制形態素を伴った動詞の形態に関して立ち入った分析を行わないが，形容詞節を構成する節の動詞の形態 (=連体形) と，時制節を形成し，文を終始する動詞の形態 (=終止形) を (たとえ，表示が同一の形態を持っているとしても) 同一の動詞形態として扱って良いのかに関しては議論の余地があると思われる．

寺村の連用形とテ形の分析に立ち返ると，寺村では動詞の形態を「基本語尾」と「タ形語尾」の二つに分け，連用形は基本語尾に該当し，テ形はタ形語尾に分類されている．また，連用形とテ形はともに「ムードを保留し，後の文のムードにゆだねる」ムード (=陳述度: DEGREE OF MODALITY) を持つという (寺村 1984: 61)．端的にまとめると，寺村の観察は (10) の二つに集約できるだろう．

(10) a. 連用形/テ形とも，「後の文のムードに依存する」ムードを持つ．
b. 連用形/テ形はそれぞれル形/タ形に該当する．

寺村の観察の要点は，連用形とテ形の接続に関し，文終止節に陳述度では依存するという類似性を認めながらも，二つの活用形式の間に非過去形と過去形の対立のようなものを見出している部分であると言えよう．

続いて，言語学研究会による連用形とテ形の区別を見る．言語学研究会の分析では連用形を「第一なかどめ」，テ形を「第二なかどめ」と呼称し，その二つは「なかどめ」という文法的に類似した単一グループを形成すると主張する．言語学研究会の採用する「なかどめ」とは，概略，連用形やテ形に導かれる節が一つの文としてまとまりを形成している場合の呼称と解釈してよいだろう．また，この「なかどめ」という特性を共有する連用形とテ形は，第一なかどめ，第二なかどめという用語によって区別されることから明らかなように，異なる振る舞いを持つと主張している．言語学研究会による第一なかどめと第二なかどめの区分は以下の通りである．

(11) …第一なかどめが「非従属」と「従属」との，二つの関係を未分化のままに表現していたとすれば，そのうちの「従属」の関係のみを表現するために，マークされた第二なかどめが派生することによって，二つのなかどめ形はそれぞれがことなる意味を表現するようになった…
(言語学研究会・構文論グループ 1989a: 14 一部改変，下線部は筆者)

更に，言語学研究会はこの二つのなかどめの間の関係を意味的に同義なもので，単に「ふるさ・あたらしさ」あるいは，使用の範囲において区分する分析は，それは「限られた範囲においてのみ有効性を保っている」(言語学研究会・構文論グループ 1989: 14) としている．

1.1.3. 連用形とテ形

寺村 (1984) や，言語学研究会の一連の論考 (言語学研究会 1989a, b, 1990) に代表される日本語の活用研究を紐解くと，連用形とテ形の間の類似性は多くの研究において指摘されており，二つの活用形式は多くの点で重なりあう特徴を有していることが示されている．しかし，その反面，連用形とテ形が完全に同一の性質を有している訳ではなく，異なる性質を持つことが指摘されていることが分かる．

本論文では，これまでに提出された分析を踏襲し，理論的な側面から連用形とテ形に関するより，詳細な検討を通して，連用形およびテ形のどのような部分が類似性を生み出すのか，そして，同時になぜ，二つの形態の間に意味的・形態統語論的な違いが生じているのかということを詳細に検討していく．

1.2. 本論文の構成と各章の目的

1.2 節では，本論文に収録されるそれぞれの章の構成と，その目的を解説する．まず，本論文の目的を以下に示す．

(12) 日本語の連用形/テ形により導かれる複文を分析し，生成文法理論の種々のメカニズムに経験的な証拠を提示すること．

本論文は理論的枠組みによる「単なる日本語の記述」を意図している訳ではないことに注意されたい．生成文法理論を用いた日本語研究が多くの場合に生成文法理論を用いて日本語の統語構造を明らかにすることを意図してきたものが多く，日本語という個別言語の体系のみに注意が払われ，生成文法という道具を用いた日本語の構文の分析であることが多かった．

しかしながら，本論文では，「生成文法理論を用いて，日本語の特定構文に対する説明を与えること」を目的としている訳ではないことに注意されたい．本論文の大きな目的とすることは，日本語が多くの言語で検証されてきた人間言語の持つメカニズムを共有しており，生成文法理論が仮定する普遍文法 (UNIVERSAL GRAMMAR) から導かれる自然言語のメカニズムに合致する言語であることを示し，これまで提案された理論的メカニズムの経験的証拠を日本語の分析を通して提出することである．

続いて，本論文の構成について紹介する．本論文は大きく三つの部分からなる．序は，本章で構成される導入であり，研究の背景，現行の理論の大まかなまとめを提示する．

第 I 部は形態論 (と意味論) に関する議論から構成され，第 1 章，第 2 章，第 3 章が含まれる．第 I 部の議論では，形態統語理論による，X^0 レベルの表示 (REPRESENTATION) がどのように導かれるかが議論の対象となっている．同時に，第 I 部で日本語の活用形の表示は形態統語理論により過不足なく説明されることを示す．よって，動詞の活用が論点となる．

第 II 部では，句レベル，つまり XP レベルが議論の中心となり，第 1 章，第 2 章からなる．第 II 部の議論では，句と句を接続する際の構造を併合 (MERGE) のメカニズムから導くことを主眼点とする．近年，人間言語のメカニズムを明らかにする理論としての生成文法理論は経験的妥当性 (DESCRIPTIVE ADEQUACY) を超えた説明的妥当性 (EXPLANATORY ADEQUACY) を念頭においた理論の構築が求められており，その説明的に妥当である議論は，それを超えた妥当性 (BEYOND EXPLANATORY ADEQUACY) を満たす必要があると言われる．第 II 部はこの説明的妥当性を超えた妥当性，つまり，言語の生物学的な基盤を検証することも同時に目的とする．具体的には，我々が言語を産出するにあたり，必須の操作である併合を用いて日本語の等位接続に対して説明を与える．

それでは，各章の詳細に移ろう．本章では，本論文の目的そして，理論的な立場について説明する．既に述べているように，本論文は生成文法理論を基盤とした日本語の等位構造の研究を行う．本章 1 節で紹介したように，日本語の等位構造 (=統語構造により構築される産物) は動詞の活用形式 (＝形態論により構築される産物) と強く関わりを持っているようである．よって，本論文では，形態論と統語論を区別せず，両者に対して統一的な枠組みで分析する．理論的な枠組みとして，極小主義理論とその形態論への応用である，分散形態論を用い，形態論と統語論に統一的な説明を与える．よって 1 章では，その準備として，極小主義理論および，分散形態論の枠組みを提示する．

第 I 部第 1 章では，等位構造を構築する活用形である「連用形」と「テ形」に対して形式意味論の観点からの考察を行う．これまで多くの文献において，連用形とテ形に関する分析と，その類似性が提案されたものの，二つの活用形式について，理論的，特に意味論的な側面からは明示的に比較対照さた分析は管見の限り見当たらない．このような背景から，連用形とテ形の間の意味的な類似点と相違点に着目し，形式意味論の枠組みから連用形が時制を持たない構造である一方で，テ形が時制辞を含んだ構造であることを示す.

第 I 部第 2 章では，連用形が *v*P 構造をもつという田川 (2009, 2012) から出発し，連用形の構造をより詳細に検討する．第 2 章で得られる帰結は，連用形節が TP 構造を持たない最小句構造 (=*v*P) の Root-*v* の複合主要部 (Root-*v* AMALGAM) の表示形式であることを示す．また，*v*P 構造を仮定する段階で問題となる態 (VOICE) の統語的な位置に着目し，連用形で表示される動詞派生名詞句の構造を提案し，その構造が日本語の動詞派生名詞句および，トルコ語の SUSPENDED AFFIXATION に対しても重要な示唆をもたらすことを示す.

第 I 部第 3 章では，テ形の形式的な研究である，Hasegawa (1996)，Nakatani (2004) から出発し，テ形によって導かれる節が，文終止節よりも先行して生じた事態を示すことが第一義的であることを確認し，更に，テ形の統語構造は FinP が&によって接続された形式であることを示す．更に，これまでの伝統的国語学で示されてきたテ形が「連用形+テ」であるという直感は正鵠を得ていることを理論的な分析から示す.

第Ⅱ部第 1 章では，テ形と連用形の統語構造とその構造から導かれる等位構造と付加構造の分析を提出する．特にこれまで問題となってきた，日本語という完全主要部後置型言語での等位構造について，日本語の等位構造は英語を始めとした主要部前置型言語と同様の構造を持つことを主張し，その主張は経験的な証拠により支持されることを示す．

第Ⅱ部第 2 章では，テ形と連用形が導く等位構造と付加構造に関し併合そして，ラベル付けという，極小主義理論の根本的な原理から分析を提案することを目的とする．

2. 形態統語論理論 (THEORY OF MORPHO-SYNTAX)

連用形節/テ形節に対する形態統語論的分析を提示するにあたり，2 節では本論文の依拠する極小主義理論 (MINIMALIST PROGRAM) 及び，分散形態論 (DISTRIBUTED MORPHOLOGY) の理論的な仮定および，それらの背景について振り返る．

2.1. 極小主義理論 (MINIMALIST PROGRAM)

以下 2.1.1 節と 2.1.2 節では，極小主義理論で一般的に仮定される操作のうち，本論文で中心的に言及する理論的仮定についてまとめる．

2.1.1. 極小主義のモデル: 素性 (FEATURE)， 派生 (DERIVATION) と領域 (DOMAIN)

極小主義理論では，我々の「こころ」に存在する概念を伝達する「言語」を「レキシコンと呼ばれる心的辞書に存在する『語』に対して統語演算を回帰的に適用し，『意味』と『音声』を扱う部門に対して読み取り可能な表示を提供するメカニズム」であると仮定する．ここでいう「意味」，「音声」とは，統語演算に関わる「意味」や，「音声」であり，統語的な側面から外れる文の意味の解釈 (CONCEPTUAL-INTENTIONAL SYSTEM: CI) や，文の音声産出 (SENSORIMOTOR SYSTEM: SM) は統語論の外に位置すると考える．

それでは統語演算と，意味解釈および，音声産出について見よう．統語演算に関わり「意味」を構築する部門が LF であり， LF は意味部門 (CI) へのインターフェイス

(INTERFACE) を構築する．同様に，統語演算に関わり「音声」表示を構築する部分は PF であり，PF は様々な音韻現象が生じる音韻部門 (SM) とのインターフェイスであると考えられている．

更に，統語演算の対象は，レキシコン (LEXICON) に貯蔵されている「語」を対象に行われる．ただし，生成文法理論では，「語」がそのまま我々が一般的に考える「単語」や “word” 等と同一の概念を示す訳ではない．そこで，極小主義理論の「語」に関する近年の動向について解説する必要があるだろう．初期の極小主義理論では，「語彙主義者の仮説 (LEXICALIST HYPOTHESIS)」 の立場に立ち，「語」は，既に音形が決定した状態で統語構造の構築に組み込まれると仮定されていた．しかし，Chomsky (2004, 2008) 以降の極小主義理論では，「語 (LEXICAL ITEM: LI) 」とはレキシコンから数えあげ (NUMERATION) が適用され，抽象的な音韻情報と意味情報を持つ要素であると考えられている．実質的な音声に関しては，統語演算において用いられることがないとされ，統語演算に関わる派生 (DERIVATION) の途中段階では，LI は「統語素性 (FORMAL FEATURE) 」,「音韻素性 (PHONOLOGICAL FEATURE) 」および「意味素性 (SEMANTIC FEATURE) 」からなる素性の束であると考えられている．この素性の束を語彙要素 (LEXICAL ITEM)とよぶ (= (13)).

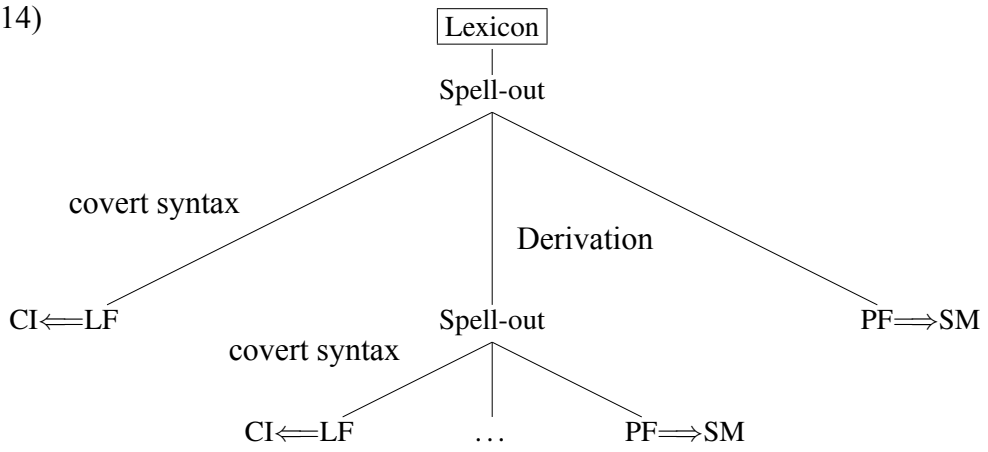
(13) Properties of Lexical items (LI)

$$\left.\begin{array}{l}\text{a. Phonological feature}\\ \text{b. Semantic feature}\\ \text{c. Formal feature}\end{array}\right\}\text{Lexical Item}$$

(Gallego 2007: 7)

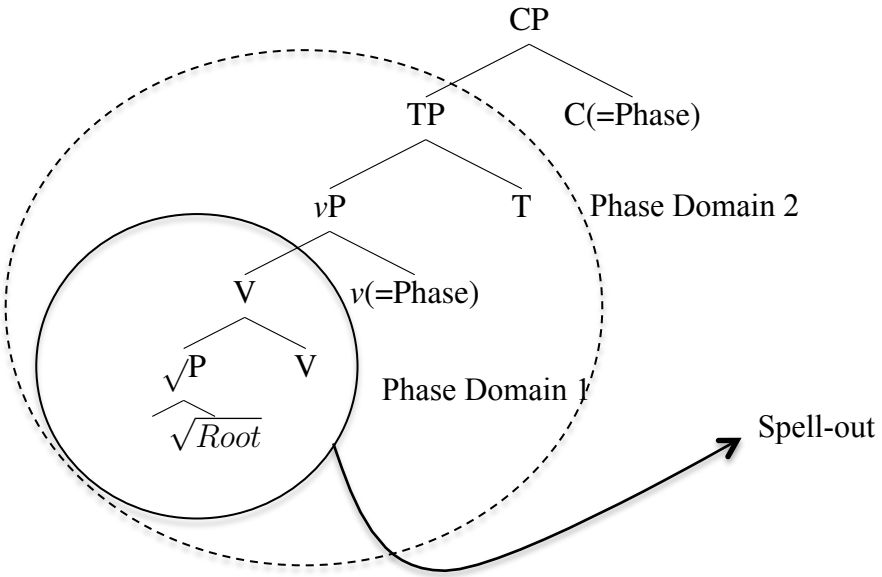
レキシコンから数え上げられた LI は，狭義の統語論 (NARROW SYNTAX) に送られ統語演算の対象となる (派生: DERIVATION) ．ここで，統語演算は再帰的に各 LI に対して適用される．統語演算が完了した LI に含まれる素性はそれぞれ前述の PF，LF に書き出し，あるいは移送 (TRANSFER/ SPELL-OUT 以下，SO あるいは SPELL-OUT で統一する) されるが，この際の PF/LF への必要な素性の移送とは統率・束縛理論 (Government and Binding Theory: Chomsky 1981, 1982, 1986) とは異なり，特定の単位毎に適用される． (14) で，文法のモデルを示す.

(14)



SO が適用される特定の単位を位相 (PHASE) とよび *v*P，CP の主要部の統語構造への導入が位相を構築すると仮定する．この位相の SO に関する仮定として， *v* によって形成される *v*P 領域は，位相領域 (PHASE DOMAIN) を形成するが，その位相領域 (*v*P: Phase Domain 1) は，次の位相を形成しうる主要部，つまり， 以下の (15) では C の統語構造への導入と同時に，それぞれ LF，PF に SO される．その際に，SO の対象となるのは，*v* の主要部および，周縁部 (EDGE) を除いた要素である．具体的には (15) で C が統語構造に導入された段階で，実線の丸部分で囲まれた Phase Domain 1 のみを，LF/PF に SO する．

(15)



2.1.2. 併合 (MERGE)

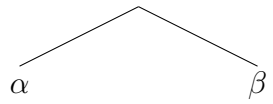
極小主義理論では，LI は併合 (MERGE) によって統合され結果，集合を形成する．

(16) Merge Assumption
Merge only operates with LI, not features.
(Gallego 2007: 10)

併合は (16) が示すように，LI を対象とする．併合のメカニズムに関しては第 II 部第 2 章で詳細に検討するが，言語には，概略二つのタイプの併合が存在するという．それぞれの併合を，外的併合 (EXTERNAL MERGE: EM) と内的併合 (INTERNAL MERGE: IM) と呼ぶ．

EM は，二つの LI を組み合わせる操作で一つの統語要素 (SYNTACTIC OBJECT: SO) を形成する操作である．以下では，α と β が EM した場合を例とする．

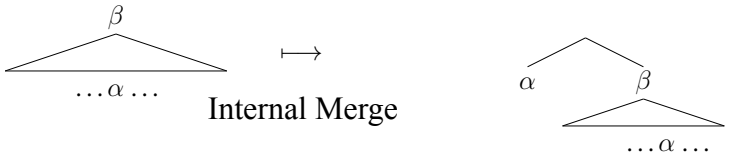
(17) α β $\longmapsto$ External Merge



この EM 操作により，$\{\alpha, \beta\}$ の集合が形成される．

IM では EM とは異なり，併合される LI は α，β のうちどちらかに含まれている LI が対象となり，再び併合する．つまり，併合によりつくられた集合には，α，β のうち片方の LI のコピーが二つ存在することになる．(18) では α のコピーが二つ存在する場合を示している．

(18) $[_\beta \ldots \alpha \ldots] \longmapsto \{\, \alpha_i \, [_\beta \ldots \alpha \ldots] \,\}$



更に，二つの併合操作に加えて，付加構造 (ADJUNCT STRUCTURE) を構築する付加 (ADJUNCTION) という操作が存在するが，その詳細は、第Ⅱ部第 2 章で検討する．

また，EM，IM は自由に行えるが，そこには幾つかの制限がある．まず，包括性条件 (INCLUSIVENESS CONDITION) という制限についてみる．包括性条件とは (19) で定義され，派生の中途での要素の導入を禁じる条件である．つまり，派生に存在していない，統率束縛理論の仮定，同一指示のための指標 (INDICES) や，X バー理論 (X-BAR THEORY) でのバーレベル (BAR-LEVEL) 等の理論的な構築物の存在を否定する．

(19) Inclusiveness condition
Any structure formed by the computation is constituted of elements already present in the lexical items selected for N[umeration]; no new objects are added in the course of computation, apart from rearrangement of lexical properties (in particular, no indices, bar levels in the sense of X-bar theory, etc.)
(Chomsky 1995: 228)

更に，併合による統語構造の構築は，Chomsky (1995) における「拡大条件 (EXTENSION CONDITION)」あるいは，Chomsky (2008) での「不干渉条件 (NO TAMPERING CONDITION)」の適応を受け，ある LI が併合され，SO となった後に，その当該領域に再び何かしらの統語操作の適用をすることが禁じられている．

(20) No Tampering Condition
Merge of X and Y leaves the two SOs unchanged […] Merge cannot break up X or Y, or add new features to them. Merge is invariably “ to the edge”.
(Chomsky 2008: 5)

2.2. 分散形態論 (Distributed Morphology)

続いて 2.2 節では極小主義理論の形態論への応用である分散形態論 (DISTRIBUTED MORPHOLOGY：Halle and Marantz 1993, 1994, Harley and Noyer 1999, Embick and Noyer 2001, 2008, Sidiqqi 2006, Bobaljik 2012，以下 DM) の枠組みを導入する．

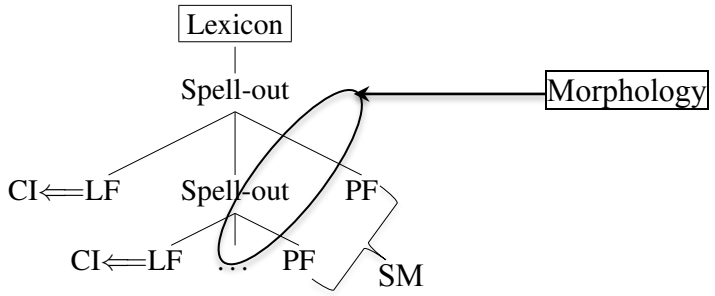
DM では，Chomsky (1970) 以降，多くの研究 (Chomsky 1995, 2000, 2001, 2004, 2008, 2012，他) において仮定されてきた統語的な演算が，語よりも小さなレベルに対しても適用可能であるという仮説に立つ．よって，全ての複雑な内部構造をもつ要素は統語論

における操作，言い換えれば，併合によって構築されると仮定する (SINGLE GENERATIVE SYSTEM)．つまり，これまで形態論の操作であり，統語論とは別個に捉えられていた，形態素と形態素の併合に関しても，統語的な併合の結果生じると考える．その意味で，今後は特に議論に混乱の生じない範囲で，「語」と「形態素」を同様に扱い特に区別しない．

2.2.1. DM の派生モデル

DM が一般的な極小主義理論と異なる点は，形態的な操作を SO の後の部門として仮定することにある．DM では，形態的な操作に関して，統語論で構築した要素に対して形態的操作を加えることが可能であると考える．また，レキシコンは，極小主義と同様に素性を貯蔵していると仮定する．

(21)



2.2.2. 語彙挿入 (VOCABULARY INSERTION)

既に，(21) において提示されたように，形態部門 (MORPHOLOGICAL COMPONENT) が統語論 (NARROW SYNTAX) の後におかれることが，DM のモデルに特徴的な仮定の一つである．ただし，DM での，「形態部門」はこれまでの形態部門と同様ではないことには注意されたい．

形態的な操作の適用段階を幾つかの部門に分けること自体は，目新しい分析ではない．例えば，影山 (1993) 等では，モジュール形態論を提案し，形態的操作がレキシコンと統語論の両者で行われているというモデルを提示している．

しかし，DM とこれまでのアプローチとの大きな違いは，これまでのモデルが「形態論」と「統語論」で異なる操作の適用がなされていると考え，二つ以上のレベルを仮定する一方，DM では，併合が「何かと何かをくっつける」ための唯一の「統語的な」操作であると仮定する点である．

また，これまでの分析の形態部門とは異なり，DM での「形態部門」とは．統語論で構築された素性の束に対して，実際の語に対する音形を挿入する部分であり，表示 (REPRESENTATION) のレベルに関わる操作を行う部門である．つまり，DM では，統語構造が構築された後に，語彙挿入 (VOCABULARY INSERTION: 以下 VI), や，「音形 (PHONOLOGICAL EXPONENT(S))」が挿入される素性の束を適切な順序に並べ替える種々の音韻論的操作 (OPERATIONS AFTER SYNTAX: Embick and Noyer 2001, 2008 他)」の適用を設定する．個々の操作に関しては 2.2.4 節 2.2.5 節で述べるが下降 (LOWERING), や局所的な素性の位置関係の変更 (LOCAL DISLOCATION: 以下 LD)，挿入された語彙に対する再調整規則 (RE-ADJUSTMENT RULE) の適用，等が形態部門で生じる．

2.2.2 節では，VI について紹介する．VI とは，Halle and Marantz (1993, 1994)では，後期語彙挿入 (LATE-INSERTION) と呼ばれた操作である．語彙挿入は，統語論で構築された素性に対して音形を与える操作であり， (22) に定義される．

(22) Vocabulary Insertion
Vocabulary Insertion supplies phonological features to the abstract […] morpheme…
(Embick and Noyer 2008: 298)

ここではアサバスカン (Athapaskan) 系言語のフーパ語 (Hupa) の例を用いて，VI のメカニズムを示す (以下の例は Golla 1970 による).

フーパ語では，人称/数の接頭辞が目的語と主語に観察される．

(23) Subject and Object Markers

	Subject	Object
1st /SG	W-	Wɨ-
2nd /SG	n-	nɨ-
1st/PL	dɨ-	noh-
2nd/PL	oh-	noh-

(23) に記述される複数形の音形を検討すると， 主語位置では，一人称と二人称が“dɨ-” と “oh-” により区別されている．しかし，目的語には同様の区別が見られず，一人称，二人称共に “noh-” として音声的に具現化している．

この音形が統語的に構築された素性の束に対して VI を受けるとすると，それぞれの素性の束は以下のように記述できる．

(24) Feature bundles

a. $\begin{bmatrix} +1 \\ +PL \\ +Subj \end{bmatrix}$ b. $\begin{bmatrix} +2 \\ +PL \\ +Subj \end{bmatrix}$ c. $\begin{bmatrix} +1 \\ +PL \\ +Obj \end{bmatrix}$ d. $\begin{bmatrix} +2 \\ +PL \\ +Obj \end{bmatrix}$

(24) に記述される素性の束に対して，VI は部分集合原理 (SUBSET PRINCIPLE: Halle 1997) に従い適用される．

(25) Subset Principle:

> The phonological exponent of a Vocabulary Item is inserted into a morpheme of the terminal string if the item matches all or only a subset of the grammatical features specified in the terminal morpheme. Insertion does not take place if the Vocabulary Item contains features not present in the morpheme. Where several Vocabulary Items meet the conditions for insertion the item matching the greatest number of features in the terminal morpheme must apply.
>
> (Halle 1997:下線部は筆者による)

部分集合原理に従えば，VI が行われる際には，規則に合致する素性を全て参照する必要はない．つまり，音形を挿入するために必要な素性の集合の指定を最も多く満たす語彙が挿入されると考える．同一の音形 “noh-” を共有する目的語の一人称，二人称複数である (24c, d) に対して二つの個別の規則を立てることなく， (26) の規則群を立てることで，フーパ語名詞句の表示が正しく予測できる．

(26) a. [+1, +PL, +Subj] ↔ dɨ
b. [+2, +PL, +Subj] ↔ oh
c. [+PL, +Obj] ↔ noh

2.2.3. ルート仮説 (ROOT-HYPTHESIS) と語の定義

DM では，何かと何かをくっつける操作に関しては，(狭義の) 統語論における操作によって行われると考える．また，その統語論で扱われる要素は (27) に示されるように，抽象的な語と，ルートの二つであると考えられる．つまり，(13) に示される形式素性，音韻素性，意味素性の三つの素性を含む LI がそれぞれ，二つの統語的な節点 (TERMINAL NODE) として分類される．

(27) a. Abstract morphemes
There are composed exclusively of non-phonetic features, such as [Past] or [pl], or features that make up the determine node D or the English definite article eventuating as the.

b. Roots
These include items such as $\sqrt{Cat}$, $\sqrt{Ox}$ or $\sqrt{Sit}$, which at sequences of complexes of phonological features, along with, in some cases, non-phonological diacritic features. As a working hypothesis, we assume that the Roots do not contain or possess grammatical (syntactico-semantic) features.

(Embick and Noyer 2008: 295)

二つの節点のうち，ルート (ROOT(S) : Pesetsky 1995) に関しては言語普遍的である．言い換えれば，それぞれの言語間での差異は，統語構造と表示を形成する音形によって生み出されるという．

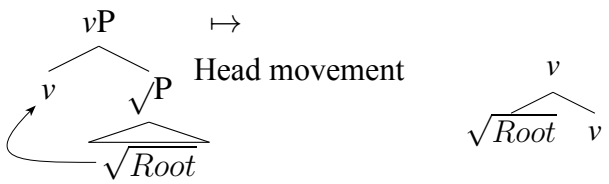
また，ルートの範疇 (CATEGORY: cf. PARTS OF SPEECH) は自身では決まっておらず，抽象的な形態素 (ABSTRACT MORPHEMES = (27a)) の一つの機能範疇 (FUNCTIONAL CATEGORY) である範疇決定詞 (CATEGORIAL DETERMINER) が範疇を決定する (cf. Marantz 1995).

(28) Categorization Assumption
Roots cannot appear without being categorized; Roots are categorized by combining with category-defining functional heads.
(Embick and Noyer 2008: 296)

それでは，(28) で示される範疇の決定はどのようにして行われるのであろうか．本論文では，DM の基本的な仮定に従い，範疇の決定は，ルートが機能範疇である範疇決定詞と主要部移動によって結びつけられることにより生じると考える．例えば， (29) で

は，統語的にルートが v と併合し，vP を構築するが，その際に，ルートは範疇決定詞である v 主要部に移動し，複雑主要部 (COMPLEX HEAD = (29)) を形成すると仮定する．そして，複雑主要部を形成した主要部は (28) に合致し，Root+v の複合要素の文法範疇の決定を行う．

(29) Syntactic Structure (order irrelevant) Complex Head

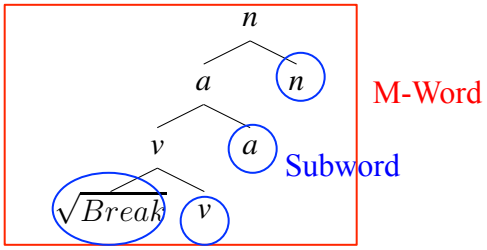


更に，(29) で形成された複合要素 (つまり，ルートと v の複合的要素) は，ルート，v それぞれとは形態的操作のレベルで (30) のように区別され，それぞれ，M-Word, Subword と定義される．M-word, Subword はともに，自身と同じステータスを持つ他者と相互関係を持つことは許されるが，異なるステータスを持つ要素との相互関係の構築は認められない．

(30) Definition
a. M-Word:
(Potentially complex) head not dominated by further head-projection.
b. Subword:
Terminal node within an M-Word (i.e. either a Root or a feature bundle)
(Embick 2010:23)

例えば、英語の “breakability”という語を例にとると，主要部移動を介して構成された構造は (31) として示される．

(31) Structure of “breakability”



(31) の構造で，四角で囲まれる部分が M-Word を構成しており，丸で囲まれた部分は，Subword である．

2.2.4. 線形化 (LINEARIZATION) と連鎖構築 (CONCATENATION)

2.2.4 節では，狭義の統語論で構成された統語構造に対し形態部門で適用される操作を導入する．

(31) で構築された構造は，全体として M-Word である．定義上，M-Word は，Subword から構築されることは既に見た通りである．それぞれの Subword は，線形化 (LINEARIZATION) 適用時点で Subword 同士の相互関係を構築し，互いの隣接関係に応じて連鎖の構築 (CONCATENATION) を行う．

線形化に伴う隣接関係は，一般的に M-Word の場合には*オペレータ (* OPERATOR) を用い，Subword の場合には，⊕オペレータ (⊕ OPERATOR) が用いられる．しかし，一つ目には，M-Word と Subword の線形順序に関する区別に関しては直接議論に関わらないこと，また，二つ目には，表記の都合上から，本論文では，⊕オペレータを*オペレータで表記し両者を特別な必要がない限り区別しない．

ここで，(31) の構造に線形化を適用した場合の構造を以下に示す．

(32) $\sqrt{Break}*v,\ v*a,\ a*n$

線形化が適用された (32) には，隣接関係による連鎖の構築が生じる．連鎖関係は⌒オペレータ (⌒ OPERATOR) によって示される．

(33) $\sqrt{Break}\frown v,\ v\frown a,\ a\frown n \quad \mapsto \quad$ break-ø-abil-ity

連鎖が構築された Subword に対し “breakability” という表示が得られる．

2.2.5. スペルアウト後の操作: 下降 (LOWERING) と 局所性による素性の順序変換 (LOCAL DISLOCATION)

DM では，統語論での素性を対象とする併合を基盤とした操作に加え，SO 後の操作を以下のように認める．

(34) Two operations at PF (= Morphological Merger)

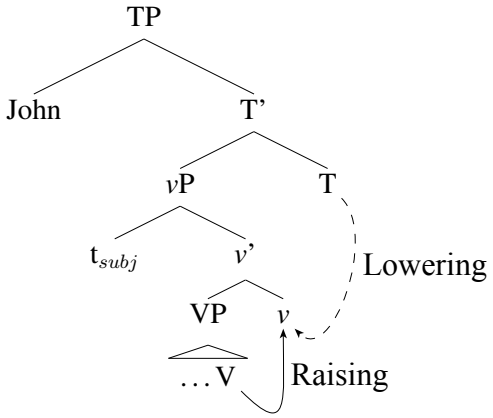
a. Before linearization: The derivation operates in terms of hierarchal structures. Consequently, a movement operation that applies at this stage is defined hierarchically. This movement is Lowering; it lowers a head to the head of its complement.

b. After linearization: The derivation operates in terms of linear order. The movement operation that occurs at this stage, Local Dislocation, operates only in terms of linear adjacency, not hierarchical structure.

(Embick and Noyer 2008: 319, 下線は筆者による)

階層構造に基づいた，SO 後の操作としての下降 (= (34a)) は，英語の時制形態素と動詞との結合関係を説明する．英語の動詞の場合，他の多くの言語で見られる統語的な主要部の上昇が観察されないことが指摘されている (cf. Pollock 1989 他) が，表示のレベルでは，動詞は時制辞との形態的に結合している．英語での動詞句と時制辞の結合は，SO 後の操作を介し (35) に示されるように T が下降することによって行われると考えられている．

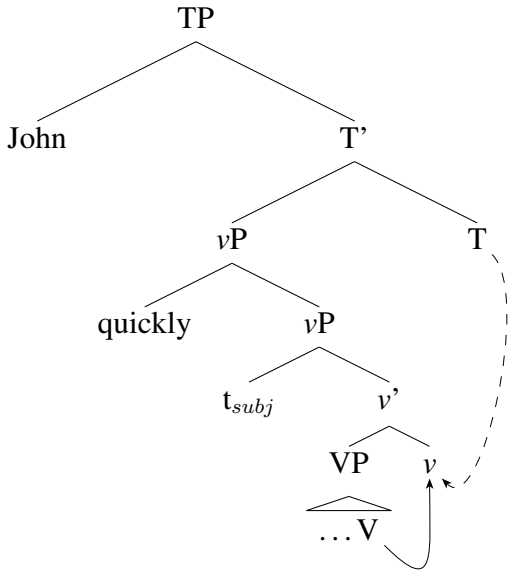
(35)



この主要部の下降のメカニズムは，(34a) に示す，階層構造上での移動である．下降が階層構造に関わる操作であることは， (36) に示されるように，動詞と時制辞の間に

副詞が介在していたとしても，介在要素が主要部要素でなければ，二つの主要部は阻害を受けること無く，連鎖を構築することができることからも分かる．

(36) John *t* quickly play-ed the trumpet.



DM では，下降に加えて，もう一つの SO 後の素性の移動として局所性に従う移動 (LOCAL DISLOCATION，以降 LD) が提案されている (= (34b))．LD は，要素間の線形順序に影響を与える移動であり，SO 後に線形化した要素を対象に適用される．

模式的に表すと，X, Y, Z が (37a) の階層関係を持つ場合，ZP および Y は，X の補部に生起している．ここで，ZP が，Y の補部，あるいは付加部であると考えると，X, Y, Z は (37b) に示される順序関係を持つ．(37b) では，*オペレータが示すように，Z は，Y に対し先行している．

(37) a. $[_{XP}$ X $[_{YP}$ $[_{ZP}$ Z] Y]]
b. [X * [Z * Y]]

(37b) では，既に X, Y, Z の間に階層関係が存在しておらず，X と Y は Z の介在のために直接連鎖を構築することができない．しかし，ここで LD (= (34b)) が適用されると，Z と X の間の線形順序が線形的隣接関係に基づき局所的に交替する．

(38) [[$_{Z}^{0}$ Z+X] * Y]

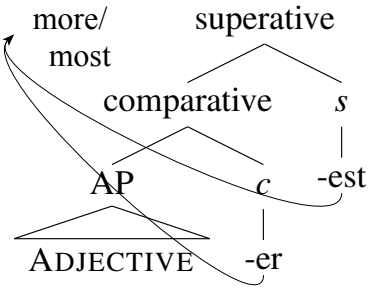
この LD 操作により英語の比較級/最上級において，二つの形態がルートによって異なることを適切に捉えることができる． (39) のパラダイムを見られたい.

(39) a. John is SMART-*er* than Bill.
b. John is mo-*re* INTELLIGENT than Bill.
c. *John is INTELLIGENT-*er* than Bill.
d. ?*John is mo-*re* SMART than Bill.

(Embick and Noyer 2001: 564)

(39) では， “-er/more” 比較級の形態的具現化の選択には，比較級/最上級となる形容詞の音節数が関わっている．つまり，ルート自身ではなく，挿入された音形の音韻論的な要件が関わっていると言える．ここで，比較級および，最上級の形容詞の構造を (40) と仮定すると， “more/most” が出現する場合には，比較級/最上級を構築する形態素 (“-er/-est”) が，表示のレベルまでのどこかの段階で形容詞自身より線形順序において前に移動することが求められる[1].

(40)



しかしながら、Embick and Noyer が指摘するように，比較級/最上級の接辞は，狭義の統語論での移動は不可能である．なぜならば，この接辞の移動は形容詞が音声的具現化をうけた要素の音韻論的な特徴 (PROSODIC PROPERTY) により，動機づけられるためである．よって，形容詞の比較級/最上級における “more/most” および “-er/-est” の選択に

[1] ここでは，比較級と最上級が (40) の構造をもち，*c*, *s* をそれぞれ比較級・最上級をつくる形態素の主要部であると仮定する．この構造に関する詳細な議論は Bobaljik (2012) を参照されたい.

は，SO 後の線形順序を変更する LD による移動が関わると分析され，VI された語彙の特性により，SO 後形態部門での移動が関与し，(39a, b) の表示を導く．

この LD は，M-Word と，Subword の両者に対して生じる可能性があることが Embick and Noyer (2001) で指摘されている．

まず，M-Word での LD の例としてラテン語 (Latin) の接辞 (CLITIC) を見る．ラテン語では，等位構造を構成する際に接辞の “-que” が用いられる．また，“-que” は等位接続された二つ目の項 (後項) の内部の一つ目の要素の後に接続する．

(41) Input : $(_{\text{conjunct1}}$ X Y) -*que* $(_{\text{conjunct2}}$ W, Z)
Surface: $(_{\text{conjunct1}}$ X Y) *t* $(_{\text{conjunct2}}$ W-*que*, Z)

更に，(42) のように，“-que” はそれ自身が M-Word としての特性を持ち，Subword の補部には生起せず，後項の M-Word の補部位置に生起する．

(42) a. [[bon +ī puer+ī] [-*que* [bon +ae puell + ae]]]
good +NOM.PL boy+NOM.PL and good+NOM.PL girl+NOM.PL
b. (after Merger) bon+ī pure+ī bon+ ae+*que* puell+ae
“good boys and good girls”
c. *bon+ī puer+ī bon-*que*+ī puell+ ae

Embick and Noyer (2001) によれば，(42) の “-que” は，(42a) に示されるように二つの等位項に挟まれる位置に基底生成し，SO 後に LD を介して “bon+ae”と順序の入れ替えが生じるという．この際に (42c) に示されるように Subword との順序の交替ではなく，M-Word との交替が生じ “bon+ae+que”の連鎖が構築される．

ただし，前置詞句に対して “-que” が接続する場合には，その前置詞句が，複数シラブル (DISYLLABIC) から構成されるか，単一シラブル (MONOSYLLABIC) で構成されるかによって振る舞いが異なる．複数シラブルで構成される前置詞句では，“-que” は前置詞に後接する一方，単一シラブルで構成される前置詞句では，“-que” は前置詞と名詞句をユニットとした前項の後ろに生起する．

(43) a. i. circum-*que* ea loca
around-and those places
"and around those places"
ii. contrā-*que* lēgem
against-and law
" and against the law"
b. i. in rēbus-*que*
in things-and
"and in things"
ii. dē prōvinciā -*que*
from province -and
"and from the province"
(Embick and Noyer 2001:576, 元の例は Ernout and Thomas 1951 より引用)

Embick and Noyer は，(43) には二つの LD 操作が関係しており，単一シラブルの前置詞は線形的に空な (STRING-VACUOUS) LD により，(44a) の様に，M-Word の名詞句と結合すると主張する．つづいて，(44a) により形成された新たな M-Word "in+rē+bus"と "-que"が LD し，その結果 (44b) が得られると述べている．

(44) a. -*que* * [in* rē + bus] → *que* * [in+rē +bus] (LD_1)
b. -*que* * [in + rē +bus] → [in + rē +bus + *que*] (LD_2)

続いて以下では，Subword の LD の例を見る．Subward の LD は，ファーベ語 (Huave) (メキシコの言語) で観察される．ファーベでは，再帰形の接辞 "-*ay*" が，(45) の様に，動詞のルートの直後に接続する場合と，動詞の最終屈折接辞の前に出現する場合が認められる．

(45) a. s -a -khoč-*ay*
1-TH cut -REFL
"I cut myself"
b. s-a -kohč-*ay* -on
1-TH cut REFL -PL
"we cut ourselves"

(46) a. t -e -kohč-*ay* -os
PAST –TH -cut-REFL -1
"I cut (past) myself"
b.*t -e -kohč-as-*ay*
PAST -TH cut-1-REFL

(47) a. t -e -kohč-as-*ay* -on
PAST-TH cut-1-REFL -PL
"we cut (past) ourselves"
b.*t -e -kohč -*ay* -os -on
PAST -TH cut-REFL-1 -PL

ここで，"-*ay*"は接辞であり，M-Word を構成する要素であるため，Subword となる．また，(45) の様に，"*ay*" は元位置で，ルートの直後，つまり， (48) の構造を持つが，LD により動詞の最終屈折辞と順序が入れ替わる．これにより，表示のレベルでの (45a) と (46)，(47) が同時に満たされる．

(48) a. [[s-a-kohč] on] *ay* → [[s-a-kohč] *ay*+ on]
b. [[s-a-kohč] as] on] *ay* → [[[s-a-kohč] as] *ay*+ on]
(Embick and Noyer 2001: 577)

3. 序のまとめ

序では，これまでの伝統的国語学における連用形とテ形の議論についてまとめ，本論文の依拠する，形態統語理論として極小主義理論と分散形態論の幾つかの仮定を提示した．

読者には多少混乱を招くような書き方をしたかもしれないが，極小主義理論と分散形態論は，それぞれ個別の理論的枠組みではない．極小主義理論とは，人間の言語計算機構の操作を最小限にとどめるリサーチプロジェクトである．そこで仮定される幾つかの経験的に確からしい操作が本章で挙げられた操作である．

分散形態論とは，極小主義理論の一部を為す形態統語論分析の理論であり，極小主義理論の理論的仮定の上に成り立つ枠組みであることをここに再度記しておきたい．

また，分散形態論は 90 年代までの生成文法理論を中心とした形態論の分析とは大きく異なる分析を提案している．この点で，以降で扱われる形態統語的な問題において，他の形態理論と混乱を生じた場合には本章に立ち戻り，分散形態論での形態統語論的分析のメカニズムに立ち返って頂きたいと思う．

第 I 部： $\mathbf{X^0}$
−主要部の意味論と統語構造−

第 1 章
連用形節接続とテ形接続の相関

1. 二文の接続の形式

久野 (1973) は， (1) に示す二種類の節接続の形式の間の類似性を指摘している．(1a) では，先行する節が動詞連用形で終わっており， (1b) では，先行する節が動詞テ形で終わっている．本章では，それぞれを「連用形接続」，「テ形接続」と呼称し，議論を進める[2].

(1) a. 太郎は上着を脱ぎ，ハンガーに掛けた.
b. 太郎は上着を脱いで，ハンガーに掛けた.

(久野 1973: 122)

久野は，一見連用形接続とテ形接続の振る舞いが似ているものの，両者を詳細に検討した場合にそれぞれの振る舞いは異なると指摘している．以下では，久野の指摘した (1) の二節の解釈の違いについて議論し，連用形節は時制辞により，時制の指定を受ける必要がない一方，テ形節は自身が内包する時制辞により，ある種の過去に，指定を受ける必要があることを示す．また，この議論により，これまでに動詞テ形を連用形と自

[2] 本章では，誤解を生じない範囲で特に指定のない限り，「動詞連用形」を単に「連用形」，「動詞テ形」を「テ形」と呼称し議論を進める.

然類をなすと考える分析が保持できないことが同時に示されるので，連用形/テ形を別個に扱う必要があると主張する．

次節の議論の前に，久野の議論を簡単に振り返っておく．(1) に関して久野が提示する連用形接続とテ形接続の違いは，(2) に示される二つの接続様式の解釈の違いにあるという．二つの接続様式について (2a) では，連用形節とそれに続く文終止節 (TERMINAL CLAUSE) の間に同時解釈がある一方で，(2b) では，そのような解釈が得られにくい．つまり，(2a) では，「太郎が遊ぶ」事態は「太郎が勉強する」事態と同時並行的 (SIMULTANEOUSLY) に生じている解釈がある一方，(2b) では，そのような解釈が得られないという．

(2) a. 太郎はよく遊び，よく勉強する．
b. ?太郎はよく遊んで，よく勉強する．

(久野 1973: 122)

日本語母語話者の直感として，久野が述べる二文の間の解釈の違いは受け入れられるが，二文の間の関係に関し詳細に検討する必要があろう．本章では，久野の指摘した連用形接続とテ形接続の解釈の違いを生むメカニズムを詳細に検討することを目的とする．

2. 連用形接続とテ形接続

第 2 節では，連用形接続とテ形接続のそれぞれの接続を詳細に検討し，後続する文終止節との関連性について観察する．

2.1. 連用形接続

連用形の出現環境は非常に広く，様々な環境に出現することができることが報告されている (cf. 田川 2009, 2012)． (3) では，連用形が時制と切り離されて生じていると考えられる場合を提示する．

(3) a. 山登りする
b. 読み書き-する
c. (論文の)書き方
d. 殴り-さえ-する
e. 叱り続ける

(3a, b, d, e) では，二つの動詞で示される事態が後続する動詞が示す事態と同時に存在しており，前項の動詞の時制 (TENSE) は後続する動詞の時制に依存している．つまり，(3a) では，「登る」事態は，軽動詞 (LIGHT-VERB) 「する」の介在により時制が指定され，(3b) では，「読み」「書き」も「する」によって時制を指定されている． (3c) では，「方」による名詞化が生じており，時制は存在していないと考えられる． (3d) では，動詞に取り立て詞「さえ」が直接動詞に接続しており，動詞と時制辞との隣接関係 (ADJACENCY) が阻まれた例であり，他の例と同様に，軽動詞「する」により時制の指定を受けている．(3e) では,「叱る」事態の時制は後続する動詞「続ける」の時制に依存している．このように, 時制辞から独立して，動詞句のみが独り立ちしている場合に「連用形」が表出すると考えられる.

しかし，連用形 ＝「動詞句が時制から独立している場合」の様に簡単にまとめられる訳ではない． (4) のように，連用形によってまとめられる節が，ある種の独立した文としてのステータスを保持しているかの様に見える場合もあり，連用形の出現は時制から独立した場合のみであるとは即座には決定できない.

(4) a. テレビを見(-ナガラ)，編み物をした.
b. 駅前に(先月) スーパーができ，(今月) デパートができた.
c.太郎は転び，膝を擦りむいた.
d. この水槽には，鮪が居，あの水槽には烏賊が居る.

ここで， (4) の例の連用形節と文終止節の関係を詳しく見る．(4) では，下線の動詞 (V_1) と，文終止節をまとめる動詞 (V_2) の間には，独立した事態関係が存在している．(4a) では，連用形節と文終止節の関係は V_1 の事態が V_2 の事態と同時に生じているが，V_1 の事態は V_2 の事態に付属的に生じている解釈がある．このような解釈を「付帯状況」と呼ぶ．(4b) では，V_1 の事態は，V_2 の事態に先行して生じていて，二つの事態は独立

している．このような解釈を「時間的継起」と呼ぶ．(4c) では，V_1 で示される事態は，V_2 の事態に先行して生じているのみならず，V_1 の事態は，V_2 の事態の前提あるいは原因となっている．このような解釈を「因果的継起」と呼ぶ．(4d) では，V_1 の事態と V_2 の事態は独立して生じていると同時に，V_1 の事態が V_2 の事態と並行的に語られている．このような場合に，二つの節は並列関係で結ばれていると考え，この解釈を「並列関係」と呼ぶ．ただし，並列関係で結ばれる二つの節は，対照関係が読み込み易く，この対照解釈により，二つの結ばれた事象が一つのユニットをなしているかの様に見られる場合がある．

それでは，(4) に提示された，四つのタイプに横断的に見られる特徴とは何であろうか．三原 (2009, 2010, 2011b) によれば，連用形節と文終止節との間に特徴的に見られる関係性は「時間的依存関係」(TEMPORAL DEPENDENCY) であるとされる．三原のいう時間的依存関係とは，二つの事態の間の時間的隣接関係であるとされ，二つの事態の時間的な隣接関係が阻害された場合に，連用形接続は文法性の低下が見られるという．

まず，付帯用法について見る．付帯用法では，V_1 と V_2 の二つの時間幅 (TEMPORAL INTERVAL) が隣接あるいは，重なりあう必要性がある (時間的近接性)．ひとたびこの近接性が阻まれると (5b, c) の様に付帯状況としての解釈は保持できない．

(5) a. そこに座り，しばし考えた．
b. #[3]おととい そこに座り，昨日考えた．
c. # おととい そこに座り，明日考える．

次に，時間的継起関係について見る．時間的継起関係によって結ばれた二つの連用形節と文終止節も時間的近接関係を保持する必要性がある．(6) の様に，連用形節と文終止節の両者が，現在の時間よりも過去に生じる場合には文法的な文となる．また，文終止節が現在よりも先に生じた事態である場合に文法性の低下が引き起こされる．

[3] (5b, c) の文は付帯状況解釈では非文法的である．

(6) a. 駅前にスーパーが開店し，その後デパートが開店した．
b. 二ヶ月前に，駅前にスーパーが開店し，その後，先月デパートが開店した．
c. *二ヶ月前に，駅前にスーパーが開店し，その後，来月デパートが開店する．
d. 二ヶ月前に，駅前にスーパーが開店し，その後，来月デパートが開店するので買い物に便利になりそうだ．

ただし，ここで注意したいのは，(6c) が非文法的である一方， (6d) が文法的であるという事実である．それでは， (6d) の文法性はどこから導かれるのだろうか．ここでは，(6d) の下線部分の「ので V になりそうだ」により，V_1 事態と V_2 事態が一つのまとまりをなし，一つの時間幅に生起した事態として解釈されることにより， (6d) の文法性が向上していると考える．

最後に，並列関係について見る．三原は並列関係の生起条件に関しても，V_1 と V_2 の時間的間の時間の近接性が重要であると述べている．すなわち， (7) に見る文法性の低下は「去年」と「来年」という副詞の介在による時間的近接性の断絶により引き起こされるためであると主張している．

(7) *先生のお宅の庭には，去年桜が咲いており，来年梅が咲いている．

三原の主張によると，確かに V_1 事態と V_2 事態の時間的近接性が (7) での文法性の低下を導いていることとなるが，その一方で，非常に近い例で文法性の低下が見られない場合も存在する．以下の (8) は，(7) と同様に，「昨年」と「来年」が用いられているが文法的な例である．

(8) 去年は男子学生が奈良へ行き，来年は女子学生が京都へ行く．

(8) では，去年生じた事態と来年生じる事態が接続されており，二つの事態が対照関係を形成している．このような場合には，昨年生じた事態と今年生じた事態が一つの対比関係というまとまりを形成しており，時間的近接関係に関わらず，文法的な文となる．

ここまでで観察した連用形接続の成立要件をまとめると，連用形節と文終止節が単一の単位を形成し，一つの大きな事態として解釈される必要性があることが明らかとなった．

2.2. テ形接続

2.2 節では，テ形接続に関して観察する．テ形接続も連用形接続と同様に，テ形節と文終止節との間には，「付帯状況」，「時間的継起」，「因果的継起」，「並列関係」を形成する事が報告されている (cf. 仁田 1996，内丸 2006，吉永 2008，三原 2010, 2011b 他)．以下，(9) ではそれぞれの用法を確認する．

(9) a. 直人は腕を組んで，黙っていた．
b. 封を切って，手紙を読んだ．
c. 美穂はメモを忘れて困った．
d. 男子学生は奈良へ行って，女子学生は京都へ行った．

(9a) では，V_1 の事態と V_2 の事態が同時に生じていると同時に，V_1 の事態が V_2 の事態に付属的に生じている (cf. (4a))．このような解釈を「付帯状況」という．(9b) では，V_1 事態は，V_2 事態以前に生じており，かつ，V_1 事態が，V_2 事態の前提となっている．このような解釈は「時間的継起」解釈と呼ばれる (cf. (4b))．(9c) では，V_1 事態は V_2 事態の原因，或は，理由として機能しており，「メモを忘れた」事態により，「困った」という事態が引き起こされている．このような解釈を「因果的継起」と呼ぶ (cf. (4c))．(9d) では二つの文は並行的に並置されており，このような解釈を「並列関係」と呼ぶ (cf. (4d))．このように，一見すると，テ形接続は連用形接続と同様の振る舞いを見せているように見える．

時間的近接関係に関しても，テ形接続は連用形接続と非常に似た振る舞いを見せる．(10) - (13) では，時間的近接関係について検討する．

付帯状況については．(10) に示されるように，テ形の付帯状況においても，時間副詞により時間的隔絶を引き起こすと文法性が低下することが分かる．

(10) a. 直人は腕を組んで，黙っていた．
b. ??直人は少し前に腕を組んで，(今)黙っていた．

続いて，時間的起因および，因果的起因については，これまでの議論と同様の事例が観察され，時間的近接性が阻害されると，接続関係の文法性は低下する．

(11) a. 学校へ行く前に封を切って，今手紙を読んだ．
b. ??学校へ行く前に封を切って，明日手紙を読む．

最後に，並列関係において，テ形接続を用いると，V_1 事態に後続し，V_2 事態が生じる解釈が強く感じられる．この事は，V_2 事態が，V_1 事態に先行するような例において文法性が低下することからも支持される．

(12) a. 男子学生が昨年奈良に行って，女子学生が来年京都に行く．
b. *男子学生が来年奈良に行って，女子学生が昨年京都に行った．

但し，二つの接続される節が (13) に示されるような「来年」と「今年」のような対照解釈を持つ場合に，文法性の低下が若干緩和される．これは，接続される節が，対比主題を示す「は」による対照解釈を持つことにより，一つのまとまりをなすことと関係があると考えられる．

(13) ??男子学生が来年は奈良に行って，
女子学生が昨年は京都に行った．

このように，連用形接続とテ形接続は類似しており，一見すると相互交替可能であるように思われる．しかしながら，それぞれの間には意味において異なりが存在することを 2.3 節で見ていく．

2.3. 連用形接続とテ形接続の対照

既に 2.2 節で見たように，連用形接続とテ形接続の間には，類似した点が多数ある．しかしながら，(14) に示されるように，連用形節とテ形節が異なる解釈を引き起こす場合がある．

(14) a. 木々が枝分かれし，成長した．
b. 木々が枝分かれして，成長した．

(14a, b) は共に，木々の幹が枝を分かち，その後その枝の先々が成長していく事態を表している．だが，(14a) では，木々の幹から枝が分かれ，その分かれた数々の枝々の先が成長して行くと同時に，木々が枝分かれによって，成長する解釈も存在する．つまり，枝を分かれして枝が成長する解釈と，枝分かれ自体が成長となる解釈の両者が，相補分布的に存在する．

一方で，(14b) の例では，木の幹から枝分かれが生じ，その枝が別個にそれぞれ成長する解釈のみを有する．ここで，問題となるのは，連用形接続にのみ存在する「幹から，枝分かれしながら成長する」解釈である．この「枝分かれする」事象と「成長する」事象が同時に共存しうる解釈は，二つの事象が独立していない事を示す．一方で，テ形接続で「枝分かれする」事象と「成長する」事象を独立したものとしてしか解釈できないことは，「テ」で接続される二つの事象が独立した時間解釈を持ち得ることを示している (cf. 類似の議論は三原 (2010, 2011b) を参照) ．この観察に基づき，三原の観察と同様に，テ形における「テ」がある種の過去を示す一方，そのような形態的標示を持たない連用形は過去の解釈を生むことができないと本章では主張する．

以下 3 節以降では，このような直感を理論的側面から分析し，テ形が過去を表す一方，連用形が独自の時制を持たないことを示す．また，同時に，三原 (2010, 2011b) が述べる「認識的過去」あるいは，「近接過去」の実態が，既存のアプローチでも十分に説明され得ることを示す．

3. テ形接続の形式意味論的アプローチ

3 節では，形式意味論の枠組み (Enç 1987, Abush, 1988, Heim and Kratzer 1996, Ogihara 1996, 1999, Nakatani 2004 等) を用いて，テ形接続の振る舞いついて説明を試みる．以下では，日本語が相対時制 (RELATIVE TENSE) を持つ言語であるという Ogihara (1996, 1999)

の主張を受け入れ，テ形の時制指定から，テ形接続における文終止節との時間関係を記述する．

3.1. 日本語の時制指定 (Ogihara 1996, 1999)

3.1 節では，日本語の時制解釈の詳細に立ち入る前に，時制およびアスペクトに関する一般的な見解について確認する．Comrie (1976) に，時制とアスペクトに関して以下のような記述がある．

(15) Tense relates the time of the situation referred to to some other time, usually to the moment of speaking. Aspects are different ways of viewing the internal temporal constituency of a situation.
(Comrie 1976: 1-3)

(15) の記述に従うと，時制の解釈は，発話時基準によって行われる．一例として，(16) の英語の例をみる．(16a) は過去に生じた事態を言語化した例であり，(16b) は未来の事態を言語化した例である．

(16) a. John built a house.
b. John will build a house.
c. John was building a house.
d. John will be building a house (when Mary arrives here next month).
(Ogihara 1999: 326)

(16a, b) ともに，「ジョンが家を立てる」命題 (PROPOSITION) が時間軸上のどこに生じたかを示しているが，「ジョンが家を立てる」という命題自体は同一であり，(16a, b) のどちらの文においても，「家の完成」が含意されている．一方，(16c, d) では「家の完成」に関しては述べられておらず，その点で (16a, b) とは異なっている．このように，テンスは命題自体に変化をもたらさない一方で，アスペクトは命題の成立に関し影響を与えていると考えられる (Ogihara 1999) .

それでは，テンスの解釈とはどのようなメカニズムにより行われるのであろうか．本章では，Reichenbach (1947) に従い，テンス解釈は，三つの時間的要素 (ENTITIES) によって形成されると仮定する．三つの要素とは，S (SPEECH TIME), R (REFERENCE TIME), E

(EVENT TIME) であり，E は，ある事態がどの時間幅に生じているかを示し (事象時) ，S は文が発話された時間を示す (発話時) ．そして，R は基準時間を示し，(17a) のような単純過去と，(17b) のような過去完了を区別する．

(17) a. Mary lived in Seattle.
b. Mary had lived in Seattle.

(Oghihara: 1999: 328)

(17a) での単純過去の時制は，E=R<S の様に示され，事象時 (E) と基準時 (R) が同一時間幅に存在しており，その二つの時間幅は発話時 (S) より時間的に先行して生じている．一方，(17b) では，事象時 (E) は基準時 (R) より時間的に先行し，更に，基準時間 (R) は発話時 (S) より時間的に先行しており，E<R<S と記述される．

(17) のテンスのメカニズムでは，単純過去形も，過去完了による，いわゆる学校文法で「大過去」と呼ばれるものも統一的に扱うことが可能となる．つまり，事象がどの時間幅 (TIME INTERVAL) に存在するのかにより，時制を解釈する．わかりやすく言えば，時制解釈は「基準時より前」(EARLIER-THAN) であるのか「基準時より後」(LATER-THAN) であるのかという観点から捉え直すことが可能となる (相対テンス: RELATIVE TENSE THEORY).

次に，3.2 節では，Ogihara (1996, 1999) の分析を用いてテ形の時制の分析を行った Nakatani (2004) のテ形接続に関する議論を振り返る．

3.2. テ形のテンス解釈 (Nakatani 2004)

当 3.2 節では，Nakatani (2004) のシステムに従い，時間を動詞の意味項 (以降用語の混乱を避けるために意味項に関しては， (SEMANTIC) ARGUMENT という用語を用いる) として扱い，(18a) の文を(18b) の様に記述する．

(18) a. Bill came
b. $\exists t\ [\ t<s^* \wedge come'(e,b)\ ]$

(Nakatani 2004: 153)

(18b) において，t は時間幅 (以下，混同を避けるために，時間幅は ((TEMPORAL) INTERVAL を用いる．以下同様) を示すタイプ (以下， (SEMANTIC) TYPE) <i> の要素であり，*s** は発話時 (以下，SPEECH TIME) を示し，不等号記号＜は時間的前後関係を示す．また，(18b) のファンクション (以下，(SEMANTIC) FUNCTION) come'は t と e をとり，真理値 (TRUTH-VALUE) に値を返す．また，come' によって取られる argument *b* は，type <e> であり， "Bill" の外延 (以下 DENOTATION) である．更に，本節では，Nakatani の分析に従い，type <ev> の事象変項 (以下 EVENT VARIABLES) を採用する (cf. Davidson 1967)．本理論に基づくと，二つの type <ev> のイベントと interval <i> を結びつけるためには，TEMPORAL TRACE FUNCTION τ が用いられる．この τ は <ev> を <i> に返す function である (cf. Landoman (1992))．この仮定の下では， τ は事象 e を事象 e が生じている interval; τ (e) に指定する．更に，Nakatani (2004) の仮定に従い， (19) の慣習に従う．

(19) For a temporal relation R and events e_1 and e_2, $R(e_1, e_2)$ iff $R(\tau(e)_1,\tau(e_2))$. (e.g. $e_1 < e_2$ iff $\tau(e)_1<\tau(e_2)$)

(Nakatani 2004: 153-54)

更に，3.1 節でも確認したように，Ogihara/Nakatnai のシステムは，Reichenbach に従い，時制形態素は二つの働きを行うとされる．一つ目の働きは，interval t_1 と t_2 の間の時間的な前後関係を示す働き．二つ目の働きは t_1 を t_R とラベル付けされた reference time に投錨 (以下 ANCHOR) するという働きである．当該システムでは，過去形，完了形，大過去の意味標示は (20) - (22) のように示される．

(20)
a. John came.
b. $\exists e[\tau(e) < s^* \wedge \tau(e) \subseteq t_R \wedge come'(e, j)]$

(21)
a. John had come. (= [John PAST [PERF come]])
b. $\exists t \exists e[t<s^* \wedge t \subseteq t_{R1} \wedge [\tau(e)<t \wedge \tau(e) \subseteq t_{R2} \wedge come'(e, j)\ ]\ ]$

(22)
a. John has come. (=[John PRES [PERF come]])
b. $\exists t \exists e[t=s^* \wedge t \subseteq t_{R1} \wedge [\tau(e)<t \wedge \tau(e) \subseteq t_{R2} \wedge come'(e, j)\ ]\ ]$

(20) - (22) では，s^* はディスコースにおいて，speech time のプロミネントとなっている時をさす．(20) は，「『ジョンが来る』という event e があり，そのような e が speech time s^*より先行しており，且つ，reference time t_R の一部をなしている」という意味を示す．ここでは，時制形態素は (i) e と speechtime s^*との時間的前後関係 (SEQUENTIAL RELATION) を示すと同時に，(ii) e を reference time t_R に anchor する二つの機能を有している．

また，Ogihara/Nakatani のシステムにおいては，完了相も過去と同様に働き，再帰過去 (RECURSIVE PAST) として解釈される．よって，(21) は，time interval t が存在し，その t は時間的に speech time に先行し，且つ，reference interval t_{R1} の一部をなしており，「ジョンが来る」という event e は t よりも時間的に先行し，且つ，time interval t_{R2} に含まれる」のように解釈される．

続いて，時間副詞は reference time を指定する (Partee 1973，Dowty 1986，Hinrichs 1986 他) 働きがあり，時間副詞は，更なる anchoring に対する基準値を導入する．(23) は時間副詞 “yesterday” が導入された場合の意味計算である．

(23) a. John came yesterday.
b. $\exists e[\ \tau(e) < s^* \wedge \tau(e) \subseteq t_R \wedge \tau(e) \subseteq$ yesterday’$\wedge$ come’ $(e, j)\ ]$
$(\approx \exists e[\ \tau(e) < s^* \wedge \tau(e) \subseteq$ yesterday’$\wedge$ come’ $(e, j)\ ]\ )$

(23) では，interval τ (e)は，“yesterday” の denotation によって指定される interval の一部に存在する．この意味で，e は “yesterday” の存在により，reference time に anchor される．

ここまで述べてきたメカニズムは日本語でも同様に用いることが可能であり，(24) − (25) に示すように，英語と並行的となる．

(24) a. Hanako-ga ki-ta.
b. $\exists e\ [\ \tau(e) <, s^* \wedge \tau(e) \subseteq t_R \wedge$ come’$(e, h)\ ]$

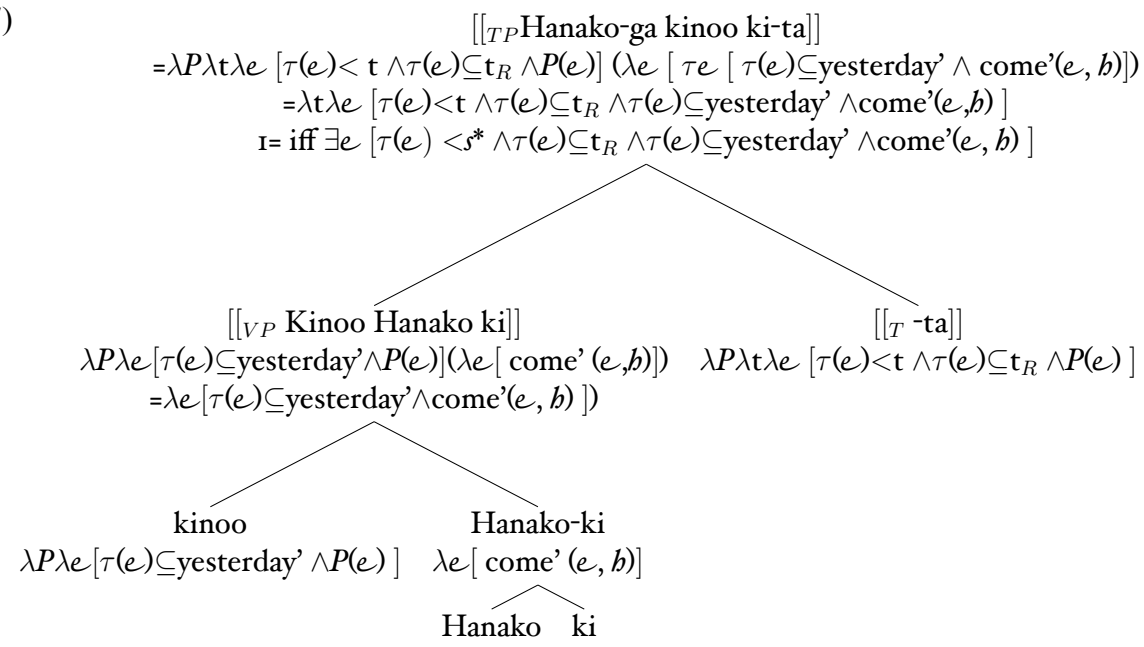
(25) a. Hanako-ga kinoo ki-ta.
b. $\exists e[\ \tau(e) < s^* \wedge \tau(e) \subseteq t_R \wedge \tau(e) \subseteq$ yesterday’$\wedge$ come’ $(e, h)\ ]$
$(\approx \exists e[\ \tau(e) < s^* \wedge \tau(e) \subseteq$ yesterday’$\wedge$ come’ $(e, h)\ ]\ )$

更に，過去の形態素 「タ」および「昨日」の意味表示は (26) のように示される．

(26) a. [[-ta]] ‘PAST’ $=\lambda P\lambda t\lambda e[\tau(e)<t\wedge\tau(e)\subseteq t_R\wedge P(e)]$
b. [[kinoo]]‘yesterday’ $=\lambda P\lambda e[\tau(e)\subseteq$ yesterday’ $\wedge P(e)]$

(26) の意味表示を踏まえ，「花子が昨日来た」の意味は (27) のように計算される．

(27)



更に，Nakatani (2004) によると，テ形における「テ」は過去の時制形態素「タ」の異形態であるとされ「テ」および「タ」そして，節の意味は (28) のように記述される．

(28) a. [[-ta/-te]]‘PAST’ $=\lambda P\lambda t\lambda e[\tau(e)<t\wedge P(e)]$
b. [[root $C_{[-wh]}$]] $=\lambda R\lambda t\lambda e[\tau(e)\subseteq t_R\wedge R(t)(e)]$
(where P is of type $<ev,t>$: R is of type $<i,<ev, t>>$)

Nakatani (2004) のメカニズムでは，「テ」および「タ」はともに相対時制を示す時制辞となり，同時に，「テ」と「タ」は接続された文の間の時間的前後関係を構築する．よって，テ形接続の意味は (29) のように記述される[4]．

(29) Hanako-ga ki-te Masako-ga kaet-ta.

a. Hanako come
$= \lambda t \lambda e[\tau(e) < t \wedge come'(e, h)]$

b. Masako leave
$= \lambda e[leave'(e, m)]$

c. Hanako come and Masako leave
$= \lambda t \lambda e_1 \exists e_2[\tau(e_1) \subseteq t_R \wedge \tau(e_1) < t \wedge leave'(e_1, m) \wedge \tau(e_2) < \tau(e_1) \wedge come'(e_2, h)]$
$= 1$ iff $\exists e_1 \exists e_2 [\tau(e_1) \subseteq t_R \wedge \tau(e_1) < s^* \wedge leave'(e_1, m) \wedge \tau(e_2) < \tau(e_1) \wedge come'(e_2, h)$

(29c) は，(29a, b) から導かれる解釈であり，(29b) に対して (29a) が付加する構造をとる．(29a) では動詞句に「テ」が後続しているため，独立したテンス解釈を持っている．よって，event e が t に先行する sequence があるとされる．また，この (29a) が (29b) に付加することにより $\tau(e_1)$ と $\tau(e_2)$ の間の時間関係が $\tau(e_1) < \tau(e_2)$ となる．そして，(29b) に対して直接時制辞「タ」が後接し，$\tau(e_2) < s^*$ が保障され，結果的にテ形節と s^* との関係は $\tau(e_1) < \tau(e_2) < s^*$ が得られる．以上から，2.3 節で見た (30) (= (14b)) において，テ形節が文終止節に先行する解釈と整合性が保障される．

(30) (= (14b)) 木々が<u>枝分かれして</u>，成長した．

3.2 節では，テ形接続が，文終止節に先行して生じる解釈が無標である事を形式意味論の観点から示した．4 節では，連用形接続が，テ形接続と異なり，同時性解釈を導くことを論じる．

---

[4] Nakatani によれば，「テ」と「タ」の交替は T レベルに生じる交替現象であり，T が C によって束縛されない場合に，「タ」が「テ」として表出すると述べている．また，Nakatnai は，テ形節は文終止節に対して付加構造を取ると主張しており，付加構造は (i) のメカニズムにより付加され，解釈を受ける．

(i) $[[\gamma]] = \lambda(e_1)\exists e_2[P(e_1) \wedge R(\tau(e_1))(e_2)]$
where $[[\alpha]] = P$ of type $<ev, t>$(VP), $[[\beta]] = R$ of type $<i, <ev, t>>$(TP), and syntactic expression $\gamma = [_\alpha \beta \alpha]$ (Nakatani 2004)

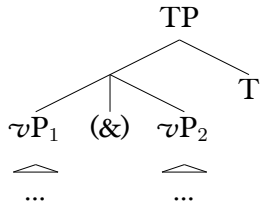
4. 連用形のテンス：連用形節の接続構造とテンス指定

3 節の議論では，Ogihara (1996, 1999)，Nakatani (2004) に見られるテ形節の時制に関する議論を振り返った．しかしながら，Ogihara/Nakatani による分析では，連用形に関する分析は明示的に与えられておらず，テ形節と連用形節を比較するためには，テ形の分析だけではなく，連用形の意味論を考える必要がある．

4 節では，3.2 節の Ogihara/Nakatani による議論を踏まえ，連用形接続の時制について形式意味論から論じる．そして，テ形節が Nakatani (2004) で述べられるように，時制辞を伴う形態である一方，連用形は，時制辞の介在に関わらない形式であり，全く異なった意味構造を保持できることを以下では示す．

Takano (2004), Hirata (2006) によると，連用形は *v*P[5]等位構造を持ち， (31) の構造を持つとされる．

(31)



(31) の構造に関しては，三原 (1997)，Tomioka (1992)からの批判がある．Tomioka (1992) では，連用形接続において，(32) のように，連用形節と文終止節の両者に独立した時間副詞が生起可能であることを根拠に，(31) の構造を棄却している．

(32) 昨日クリスが<u>帰り</u>，明日パットが帰る．
(Tomioka 1992:487)

しかしながら，Ogihara/Nakatani のメカニズムにおいては，時間副詞による時制指定は，3.2 節 (26) で議論したように，T の存在とは独立して行われている (cf. (27))．よって，本節の議論においては，時間副詞の存在がそのまま T の介在の傍証とはならない．逆

[5] ここでは，議論を簡潔にするための *v*P と VP を同様に扱う．

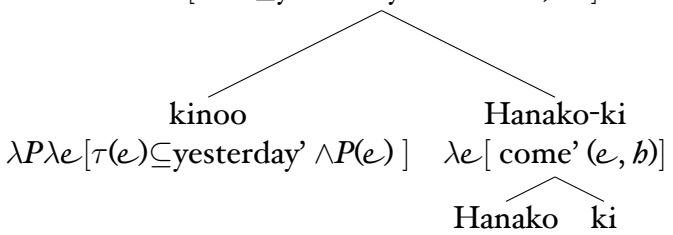
に，(33) が示すように，連用形節におけるテンスの指定は，T の介在に関わらず，時間副詞の存在による認可が可能となる．

(33) a. 昨日花子が来…

b. $[[_{VP}$ Kinoo Hanako ki$]]$

$\lambda P\lambda e[\tau(e)\subseteq \text{yesterday}' \wedge P(e)](\lambda e[\text{come}'(e,h)])$

$=\lambda[\tau(e)\subseteq \text{yesterday}' \wedge \text{come}'(e,h)])$



(33) で示すように，VP レベルにおいて，τ (e)に関しては，”yesterday” の denotation によって時間が既に指定されおり，過去の形態素の有無に関わらず，時制の指定が可能となる．

それでは，一旦日本語に(v)VP 等位構造 (= (31)) が存在することを受け入れ，連用形節節と文終止節の意味計算を行う．前提として，連用形節および，文終止節は (34) に示す意味構造を持つとする．

(34) a. Hanako come

$= \lambda e[\text{come}'(e, h)]$

b. Masako leave

$= \lambda e[\text{leave}'(e, m)]$

(34a, b) は，(31) に示した等位構造によって構造を拡大する．ここでは，&による接続は Predicate Modification (Heim and Kratzer 1996) によるものと仮定する．

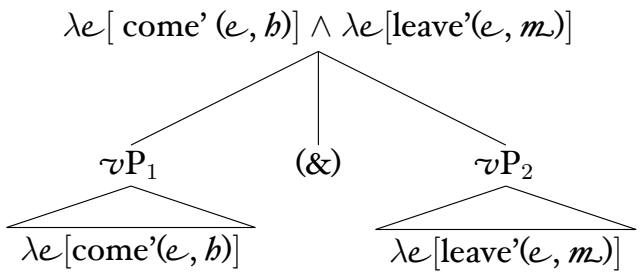
(35) Predicate Modification

If α is a blanching node with daughters $\{\beta,\gamma\}$, and $[[\beta]]$ and $[[\gamma]]\in D_{<e,t>'}$ then $[[\alpha]] = \lambda x\in D_e[[\beta]](x)$ and $[[\gamma]](x)$.

(Heim and Kratzer 1996: 65)

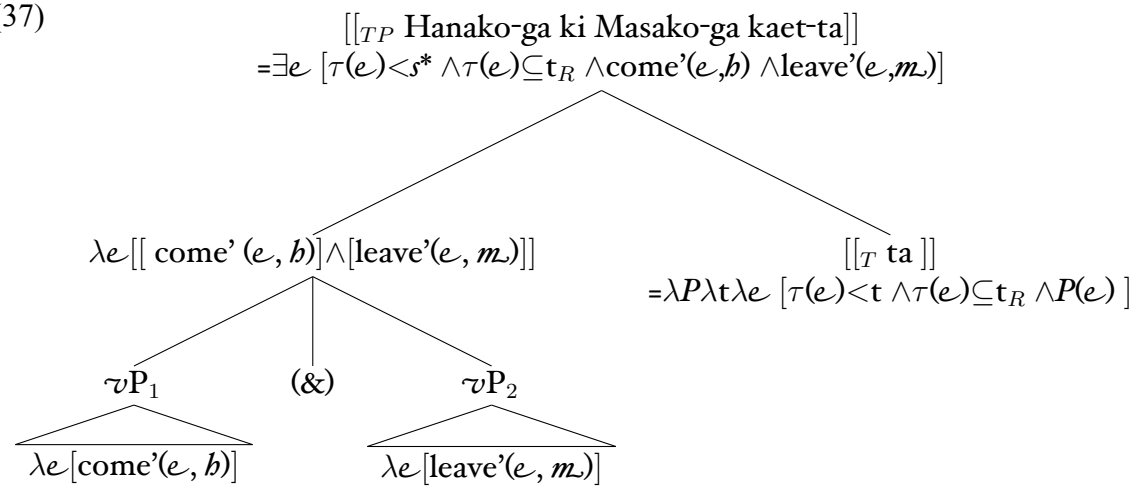
(35) に従えば，Predicate Modification の適用は，適用される対象の type が同一であれば良い．また，(34a, b) に示される二つの連用形節の type は両者とも <ev, t> である．よって，(34a, b) は，Predicate Modification により統合され，(36) の構造をなす.

(36)



更に，(36) の構造は，時制形態素を取り，(37) にまで拡大し，文全体の時制解釈を可能にする.

(37)



(37) に示す意味を見ると，「花子が来る」事態 (e_1) と「正子が帰る」事態 (e_2) に関しては，Predicate Modification を経て，同一の事態に変換されており，(e_1), (e_2)の両者は (e) となる．これにより，Predicate Modification により統合された二つの事態は同一の事態を示し，この二つの同一の事態は，時制辞「タ」によって束縛されていることから，τ (e)<*s** が保障される．また，このメカニズムは，連用形節が時間副詞をとり，文終止節と別な Time interval に指定を妨げない．(38) では，連用形節に時間副詞「昨日」が含

まれる例であるが，その場合には，連用形節と文終止節が同一の type を持たず，二つの独立した事態が生じている．

(38)　昨日花子が<u>来</u>，今日正子が帰った．
$\exists e_1 \exists e_2\ [\tau(e_1) \subseteq \text{yesterday}' \wedge \text{come}'(e_1, h) \wedge \tau(e_2) < s^* \wedge \tau(e_2) \subseteq t_R \wedge \text{leave}'(e_2, m_s)]$

(38) では，e_1 と e_2 がそれぞれ独立した，存在量化詞 (EXISTENTIAL QUANTIFIER: ∃) によって束縛されており，独立した事態解釈が可能となるので，二つの事態の同時性は義務的でないことが分かる．

以上，第 3 節では，連用形接続が，文終止節と同じ temporal interval に投射される解釈を持つと同時に，別な temporal interval に投射されることを妨げないことを示した．この事実は，((39) = (14a)) において，連用形節が二つの意味解釈「枝分かれする」事態と同時に「成長する」事態が進行する解釈と「枝分かれする」事態が完了した後に「成長する」解釈を持つことと整合性がある．

(39)　(= (14a))　木々が<u>枝分かれし</u>，成長した．

本節では，Ogihara/Nakatani の日本語の時制指定のメカニズムが，連用形の時間指定を説明することを示し，同時に，連用形の二つの解釈が生じるその根源的理由を示した．

5. テ形節のパズル-並列解釈を求めて-

3.2 節の議論によれば，テ形接続の際の V_1 は，V_2 に対して過去の解釈を持つことが義務的である．しかしながら，テ形節が (40) の例で並列関係解釈を持つことは事実であり，その解釈はテ形の意味論と齟齬を来す．

(40)　男子学生は奈良へ<u>行って</u>，女子学生は京都へ行った．

(40) では，「男子学生が奈良へ行く」事態と「女子学生が京都へ行く」事態が 同一の temporal interval で生じる解釈が生じる事が妨げられない．これまでの議論において，

この解釈は問題となる．この問題に対し，Nakatani は Event Interlacing によって説明を与えている．まず，(41a, b) の二文を比較されたい．

(41) a. 気象情報を集めて，天気図を作った．
b. 気象情報を集めた後で，天気図を作った．
(Nakatani 2004: 172-73)

(41) では，同じ二つの事態「気象情報を集める」事態 (V_1)と「天気図を集める」事態 (V_2) が，接続形式の違いはあるものの，接続されている．(41a) の文では，V_1 が V_2 と同時に生じている解釈と同時に，V_1 事態が V_2 事態に先行する解釈を持つ．一方，(41b) では，V_1 事態は V_2 事態に先行する解釈のみを有する．ここで Nakatani は，(41a) の同時性の解釈は，V_1 の事態が V_2 の事態に依存して生じていると捉えている．その結果，(41a) の V_1 と V_2 の下位事態レベルにおいて，$V_1 < V_2$ が存在する一方で，$V_1 < V_2$ という時間関係を持つ事象が連続して生じ，結果的に，$V_1 < V_2 < V_1 < V_2 \ldots$ の様な時間関係が生じる．形式的には，(42) のように示される．

(42) For two events α and β, where $\beta = <\beta_1, \beta_2, \ldots \beta_n>$ in which for $1 \leq i \leq n$, $\beta_i < \beta_{i+1}$, if there is no τ_R such that $\alpha \subseteq \tau$ R. then:
a. $\alpha < \beta_1$
b. for $1 \leq i \leq$ n, $\alpha^i < \beta_1$
(Nakatani 2004: 174)

(42) では，α と β が示す事態は時間関係での，重複が示されており，(41a) の V_1 事態と V_2 事態が同時並行的に生じている事態は，(43) のように示される．

(43) a. α =天気図を作成する事態
$=<\beta, \gamma>$ (β と γ は ordered set であり，β を行う結果 γ が生じる)
$=<\beta_1 \ldots \beta n, \gamma>$($\beta$ を繰り返し行っても，結果 γ は一度生じるのみ)
b. δ =気象情報を集める事態
$\delta < \alpha$ (気象情報を集める事態が常に，天気図作成の事態に先行する)
$(\delta^1 < \beta_1) < (\delta^2 < \beta_2) \ldots (\delta^n < \beta_n) < \gamma$
(気象情報を集める事態は常に天気図を作成する事態に先行するが，δ と β が交互に何度も生じた結果一度だけ γ が生じる．)

(43) に示される様に，(41) では，二つの V_1 事態と V_2 事態が交互に生じ，結果として，最終的に V_2 事態の完了が生じる解釈を導ける．詳細に見ると，V_1 事態と V_2 事態には，時間関係が存在するものの，総体として一つの事象を作り上げ，その結果が $V_1 < V_2$ の繰り返しにより導かれる．これにより，表層の同時性が導かれ，(40) で見られるテ形接続による同時性が導かれる．

ただし，ここでの Nakatani の議論には一つ問題がある．(41) の動詞句のタイプを見ると，文終止節の動詞はいわゆる「達成動詞」(ACCOMPLISHMENT/ ACHIEVEMENT) であり，ここでの同時性は「付帯状況」であると考えられる．よって，同様の説明が，状態動詞において成り立つかというと疑問が残る[6]．

(44) に示すのは，述語を状態動詞に限り，並列関係を読み込み易い例である．

(44)　体育館には男子生徒が居て，校庭には女子生徒が居る．

(44) では，「体育館に男子生徒が居る」事態と「校庭に女子生徒が居る」事態が同時に生じており，二つの事態関係に前後関係を読み込むことは困難であり，かつ二つの事態関係は相互に独立していて ordered set を形成していない．「体育館に男子生徒が居る」事態と「校庭に女子生徒が居る」事態の意味は (45) のように示される．

(45)
a. male students is in the gym.
λe [be at the gym (e, M)]
b. female student is in the yard.
λe [be at the yard (e, F)]

[6] 動作を示す動詞が継起を示し易く，並列解釈を生み難い事は三原 (2010, 2011b) でも指摘がある．また，三原によれば，状態動詞を用いる事で並列関係は生じ易くなるという．更に，テ形の並列関係は落ち着きが若干悪く，連用形を用いる事で並列関係の文法性は向上すると述べられており，テ形接続を用いた並列関係の座りの悪さはテ形が「ある種の過去」(三原の用語では「認識的過去」)を導く事に起因するとしている．この事は，以下の例で，テ形接続ではテ形節と文終止節の間の接続関係に時間的前後関係の読みを義務的に導く「それから」の介在を許すが，連用形節では介在を許さないことから示されるという．

(i)　a.　庭には灯籠があって，それから，玄関には蹲があった．
b. ??庭には灯籠があり，それから，玄関には蹲があった．

詳しい議論は三原 (2010, 2011) を参照されたいが，三原の判断によると連用形／テ形接続において以下のような文法性の差異があるという(ただし(i)の??は三原の判断であり，筆者には (i) に示される程のコントラストがあるのかは判断できない)．

(45a, b) のそれぞれは T レベル要素と関連づけられ，それぞれテ形節が (47a)，文終止節が (47b) の意味を持つ ((46) にテ/タの意味を再掲する= (28a))[7].

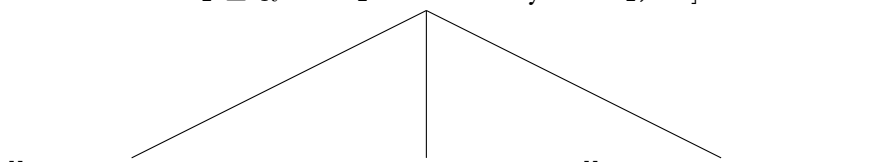
(46) $[[\text{-ta/-te}]]\text{‘PAST’} = \lambda P \lambda t \lambda e[\tau(e) < t \wedge P(e)]$

(47)
a. Male students is in the gym “PAST”
$\lambda e[\tau(e) < t \wedge \text{be at the gym'}(e, M)]$
b. Female students is in the gym “PAST”
$\lambda e[\tau(e) < t \wedge \text{be at the yard'}(e, F)]$

更に，(47a, b) で示された二つの意味計算は，相互に独立しているために，Predicate Modification を受け，一つの事態として再解釈されることはない．よって，二つの独立した事態として接続され， (48) に示す意味表示を持つ.

(48)

[[Male students was in the gym
and female students are in the yard]]
$= \lambda t \exists e_1 \exists e_2 [\tau(e_1) \subseteq t_R \wedge \tau(e_1) < t \wedge \text{be at the gym'}(e_1, M)$
$\tau(e_2) \subseteq t_R \wedge \tau(e_2) < t \wedge \text{be at yard'}(e_2, F)]$
$= 1 \text{ iff } \exists e_1 \exists e_2 [\tau(e_1) \subseteq t_R \wedge \tau(e_1) < s^* \wedge \text{be at the gym'}(e_1, M)$
$\tau(e_2) \subseteq t_R \wedge \tau(e_2) < s^* \wedge \text{be at yard'}(e_2, F)]$



[[$_{TP}$ Male students was in the gym]]
$\exists e_1 [\tau(e_1) < s^* \wedge \tau(e_1) \subseteq t_R \wedge \text{be at the gym'}(e_1, M)]$

&

[[$_{TP}$ Female students was in the yard]]
$\exists e_2 [\tau(e_2) < s^* \wedge \tau(e_2) \subseteq t_R \wedge \text{be at the yard'}(e_2, F)]$

この様に，状態動詞の場合を勘案すると，テ形節と文終止節が等位接続される．そのため，それぞれの節が，二つの異なる Temporal interval に anchor される様な，等位接続を考える必要があることとなる.

[7] いずれにせよ，テ形節は，主節に対して時間的に先行するか，或いは自身が過去の意味を持たなければならない．この予測は以下の例から支持される.

(i) *明日太郎が算数の宿題をして，昨日花子が作文の宿題をした.

6. 連用形接続とテ形接続とは

本章では，Ogihara/Nakatani による時制解釈のメカニズムを用い，Nakatani (2004) で提案されるテ形接続を踏まえ，本論文では新たに連用形接続の意味を導きだした．その結果，連用形接続は等位構造 (Predicate Modification) を持ち，一つの時制形態素に束縛されている一方，テ形に関しては，二つの節の間に時間的前後関係を生じさせ，ordered set をつくる解釈が無標の解釈であることを示した．この，無標の解釈がこれまで議論されてきた「テ形節が過去の解釈を生み出す」本質であると考えられる．本章では，その本質が，これまで統語的な分析で看過されてきた，意味論の観点から説明されることを示した．同時に，本章で示した，意味的な分析は，テ形接続であっても，状態動詞の場合に関しては二つの事態が独立した解釈をすることが可能となることを示した．

第 2 章
連用形節と最小句構造

1. 連用形節の統語構造

動詞連用形の出現環境は多岐にわたっており，近年では，多くの研究者の興味の対象となってきた．本章では，以下の三つの点を論じる．第一に (1) に示される，多岐にわたる連用形の出現環境を整理した田川 (2009, 2012) から出発し連用形の統語構造を形態統語論的観点から観察した分析を確認し，連用形は統語構造としては，非常に小さな主要部構造を取ることを確認する．第二に，これまで問題となってきた (1a) の様な連用形による文接続の環境で生じる連用形節も，T レベルの介在を仮定することなく理論的に説明できることを示す.

(1) a. 太郎は道路の脇まで車を<u>押し</u>，それから警察に電話した.
b. 太郎は転んだ拍子に，前の人を<u>押し</u>倒してしまった.
c. 太郎は<u>押し</u>に弱い.

(田川 2009: 35)

第三に本章では，連用形の表示が動詞由来名詞を形成するが，その場合の統語構造に関しても議論する.

2. 連用形の出現環境

2 節では，連用形の出現環境に関して田川 (2009, 2012) をまとめておきたい．田川では以下に示される様に連用形は，広く様々な環境への出現が指摘されている．以下では田川 (2009) からの例を中心として提示するが，必要に応じて例を改変して示す．

(2) 動詞の直後に取り立て詞が介在する場合に生じる．
パソコンを壊しさえする．

(3) 一部のいわゆる助動詞や接続形式に前接する形態として現れる．
a. 彼女は今にも泣きそうだ.
b. 私がやります.
c. 本を読みながらテレビを見た.
d. 歩行者に注意を払いつつ徐行をして下さい.
e. 本を買いに行った.

(4) ある種の接頭辞や，語彙的要素が付加する場合に，「X+連用形+する」という連鎖の一部として現れる．
a. 走る→ 小走りする/*小走る　　はしゃぐ→大はしゃぎする/*大はしゃぐ
b. 笑う→ 高笑いする/*高笑う　　干す　　→ 陰干しする/*陰干す

(5) 動詞句や動詞そのものに付加し，範疇を変化させる接尾辞 (影山 (1993), 伊藤・杉岡 (2002)) の前に現れる．
雨の降り方，政権の担い手，荷物の運び屋

(6) 複合語の要素として現れる．
a. 統語的複合動詞，語彙的複合動詞の前項要素になる．
走り続ける，殴り殺す
b. V-N 連鎖の複合語の前項に現れる．
張り紙，積み木，置き手紙

(7) 連用形そのままで名詞として使用される．
泳ぎ，争い，眠り，へこみ，詰まり，スリ…

(2) − (7) に示す様に，連用形の分布範囲は広く，これまでの研究では個別の環境に対して研究者の興味の観点から述べられ，統語的な観点からの連用形の出現環境を一般化することを目的とした研究は多くない．

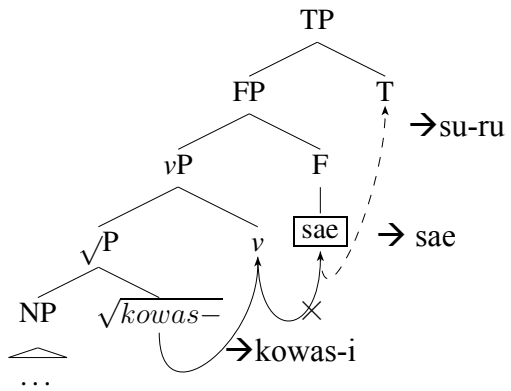
2.1. 連用形の出現環境に関する考察

田川 (2009, 2012) では (2) − (7) のそれぞれの連用形の出現環境に対して，どのような要因が影響を与え，連用形を導くのかについて詳細な記述を行っている．以下ではそれぞれの環境についてまとめておきたい.

2.1.1. 動詞の直後に取り立て詞が介在する場合

2.1.1 節では動詞の直後に取り立て詞が介在する場合に関しての田川の議論を振り返る． (2) では，連用形は取り立て詞が動詞に直接後接し，動詞語幹「壊し」と T レベル主要部との構造的連続性の阻害より出現すると田川は主張している． (8) の構造を確認されたい.

(8)



(8) の構造では，v[8]から T への主要部移動 (HEAD-MOVEMENT: Travis 1984, Baker 1988, 他) が取り立て詞 “sae” の介在によって阻まれていることを示している．このように主要部間の結合が阻まれた場合に，vP レベルは時制辞から独立して，語彙挿入 (VOCABULARY INSERTION: VI) の適用を受けることができる．よって，kowas-v の連鎖に対して，/kowas-i/ が挿入され，vP レベルの表示は「壊し」となる．続いて，vP と連鎖関係を持てない時制辞は自身のもつ [+bound] の語彙特性を満たすために /su/ の挿入をうける (ス

[8] 2.1 節では，理論的な観点からの V および v の区別に関しては特に深くは立ち入らず，語彙的な V の上位には v が存在し，V–v の連鎖が動詞句を形成すると仮定する．語彙的な V，範疇未指定の Root，範疇決定詞 v 等については，本章 3 節以降に問題とする.

ル挿入: SU-SUPPORT/DO-SUPPORT) ．よって，表出する語彙は「壊し−さえ−する」という形態を取る．

2.1.2. 一部のいわゆる助動詞や接続形式に前接する形態として現れる場合

田川は，(3) の接続形式が TP レベル投射を統語的に選択しないために生じると指摘する．(9) に見られるように，田川は TP レベルの不在を，$T_{[+Past]}$ の具現化である時制形態素「タ」が出現しないことによって示す．

(9) a. *わたしがやったました．
b. *テレビを見たながら論文を読んだ．
c. *本を買ったに行った．

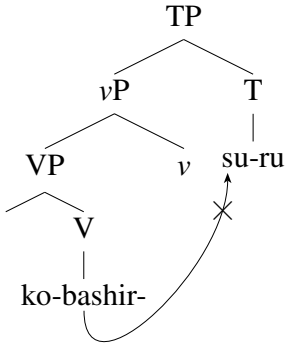
(田川 2009 : 41)

田川によれば，(9) の環境で，時制辞が顕在的に出現した文が非文法的であることから，「ました」，「ながら」，「に」等が統語的に *v*P を選択しているとし，その結果，*v*P の具現化となる連用形が顕現すると述べている．

2.1.3. 「X＋連用形＋する」の場合

田川は， (4) の環境に対しては，動詞語幹に何らかの要素の付加により， (2) と同様に，主要部移動が阻まれ，その結果として，*v* 要素である動詞が T との統語的な連鎖を構成できなくなり，連用形が表出すると述べている． (10) の構造をみると，*v* レベルが /ko-bashir/ となっており，動詞語幹に「小」の付加によって動詞語幹が拡大している．

(10)　　小走りする



この動詞の移動については，接頭辞「小」が非自立語であり，「小」は自身が付加する要素 ((10) では /hashir-/) によって認可を受ける．しかし， (10) の環境で，V−*v* 要素のみが移動し T レベルまで上昇すると，接頭辞「小」が /hashir-/ から独立してしまう．このような「小」と /hashir-/ の断絶が許されないために， /hashir-/ 部分は動詞移動の適用を受けられず，結果的に V-*v* は T と統語的な連鎖を形成できないという．よって，/hahir-/ 部分に関しては，連用形として具現化し，かつ，T は V-*v* との連鎖形成をなさないためにスル挿入を受ける．

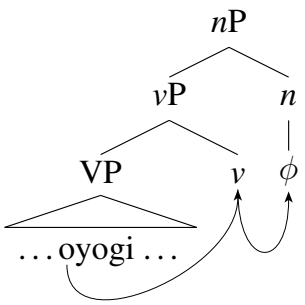
2.1.4. 動詞句や動詞そのものに付加し，範疇を変化させる接尾辞の前の環境および，複合語の V_1 要素として出現する場合

田川では (5) の環境と (6) の環境には統一的な説明が与えられている．この二つの環境では語形成に関わる範囲の構造内に句レベルの上位機能範疇 T の主要部が出現できないと考えられている．よって，田川は「語形成に関わる要素であれば，連用形で具現化する」と主張する．

2.1.5. 連用形がそのまま名詞句として使用される場合

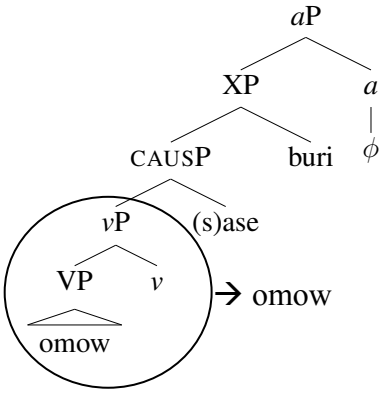
田川によると，連用形名詞句は，動詞句から派生された名詞句であり，概略，下記の構造を持つという．

(11)



(11) の構造では，*v* は ø 形の名詞化辞との連鎖を構築し，名詞となった段階で，時制 T との連鎖の構築ができなくなり，*v* レベルに対して連用形が挿入されると田川は考えている． (11) の構造を主張する根拠は，田川自身が，連用形の出現を *v*P レベル動詞句が引き起こすと考えるためである．田川の枠組みでは連用形の出現は名詞化により引き起こされる訳ではないと主張しているのである．このように，*v*P レベルの動詞句が「連用形」の具現化を引き起こすと主張することで (12) に示される形容詞化された動詞句の「連用形」としての具現化も同時に説明できるという．

(12) a. 思わ s-(s) ase-buri-ø (思わせぶりな態度．)



以上で田川の連用形出現に関する環境の一般化を見た．田川の主張をまとめると，連用形は統語的に T との連鎖を構築できない，V−*v* の連鎖の音声的具現化として出現す

るとし，V–*v* の連鎖が (2) – (7) の様な多様な環境に出現できることを「動詞句が T との連鎖を構築しない場合の形態」としての特徴付けで説明している．

2.2. 時制を持つ連用形節？

前 2.1 節で観察したように，連用形が V–*v* の連鎖の具現化であり，統語的に T との連鎖構築をなしていないと考えることにより，多様な環境に出現する連用形の特徴を捉えることができる．本稿でも，連用形は T が介在しない場合に出現するという田川の主張を受け入れる．しかしながら，田川では，T の介在に対して否定的な証拠はあまりあげられていない．よって，本節では連用形節が T を含むという可能性をもつ分析にたいしてそれらの問題点を指摘する必要性がある．2.2 節では，連用形により導かれる節[9]が，一見すると T レベル要素と関係を持つような例を指摘する．そして，同時に，提出される例が連用形節に T レベル要素が介在する証拠として，採用できないことを指摘する．

2.2.1. 時間副詞の介在

これまで多くの議論において時間副詞は TP レベルに付加される要素であり(岸本 2007 他)， T レベルの存在を示す証拠として用いられてきた．

(13) を見ると，(13a) では，過去を示す「昨日」と過去の時制辞「タ」が共起しており，文法的な文である．一方 (13b) を見ると，過去を示す「昨日」が非過去の時制辞「ル」とともに使われており，非文法的な文を導いている．この二文の文法性の比較により， T レベルの具現化である時制辞と，時間副詞の間には相関関係がある様に思われ， (13b) での非文法性が「昨日」という過去を示す時間副詞と非過去を示す時制辞「ル」との共起関係が許されないことに帰結している様に見える．

[9] 以下では単純に連用形節と呼ぶ．

(13) a. 昨日クリスが帰った.
b. *昨日クリスが帰る.

時間副詞と時制の間にある種の一致関係が存在するとすれば，(14) に示される連用形節の内部において，文終止節と独立した時制副詞の生起を許す事実は連用形節に T の介在を示す.

(14) 昨日クリスが帰り，明日パットが帰る.
(Tomioka 1992: 487)

しかし，日本語の時制副詞が TP 付加位置であるのかについては，議論の余地が残る. まず，時間副詞が TP 付加位置であると主張する岸本 (2007) であげられる議論を見たい. 岸本は，とりたて詞「ダケ」のスコープ解釈は統語的な要因により決定するとし，ダケが統語的に構成素統御 (以下 c 統御/C-COMMAND) する要素をスコープに取れるという[10].

(15) a. あの人だけがテレビを見た.
b. 子供が家の中でだけ遊んでいた.
c. 健が子供をほめだけはした.
(＿＿＿はダケの c 統御領域)
(岸本 2007: 30 強調は筆者による)

岸本によれば，(15a) では名詞句「あの人」がダケにより c 統御されており，「あの人だけ」という読みが得られるという. (15b) では「家の中で」がダケにより c 統御されており，「家の中でだけ」という読みが得られるという. (15c) では，「子供をほめること」がダケにより c 統御されており，「子供だけをほめた」(=目的語がスコープに入る解釈)，「ほめることだけをした」(＝動詞句がスコープに入る解釈). 「子供をほめることだけはした」 (＝目的語+動詞句がスコープに入る解釈) という読みが得られるという[11]. (15c) に示される三つのスコープにより，岸本は表層の位置に関わらず，ダケが動詞を

[10] c-統御:
α *c-commands* β if α does not dominate $\beta$and every γ that dominates α dominates β.
(Chomsky 1995:35)

[11] 岸本は主語「健」がダケのスコープに入る解釈は得られないというが，筆者は「健だけが子供をほめる事をした」の解釈を許す.

その c 統御領域として取るため，動詞句内領域に存在する全ての構成素に対してスコープを及ぼせることが分かるという．

続いて，岸本は (16) の例をあげて，時間副詞と「ダケ」のスコープ関係について時間副詞が「ダケ」のスコープに入らないことを指摘する．

(16) a. 先生が昨日あの子をほめだけはした．
b. 先生が教室であの子をほめだけはした．

(岸本 2007: 31)

岸本によると， (16a) の例では「昨日」がダケのスコープに入る「昨日だけ先生があの子をほめた」という解釈が得られない一方で，「教室で」がダケのスコープに入る「教室だけで先生があの子をほめた」の解釈が得られると述べる．よって，「昨日」は「教室で」とは統語的に異なる位置に生起しており，かつダケが動詞句に付加していることから，「昨日」が動詞句より上位の振る舞いを示すという．

だが，この岸本の議論のみで，時間副詞が TP 付加位置に存在する証拠とすることは困難であると思われる．以下では時間副詞が TP 付加位置ではない可能性を示すために，岸本が提示した (16) の例を改変した (17) を見る．日本語では副詞句は (17) に示されるように，文頭 (=A)，主語と目的語の間 (=B)，目的語と動詞の間 (=C) の位置のどこにでも現れることができる．更に，前文脈として「あの子は先生にずっと叱られている」を加えると，(16) とは異なる解釈が生じる場合があると思われる．

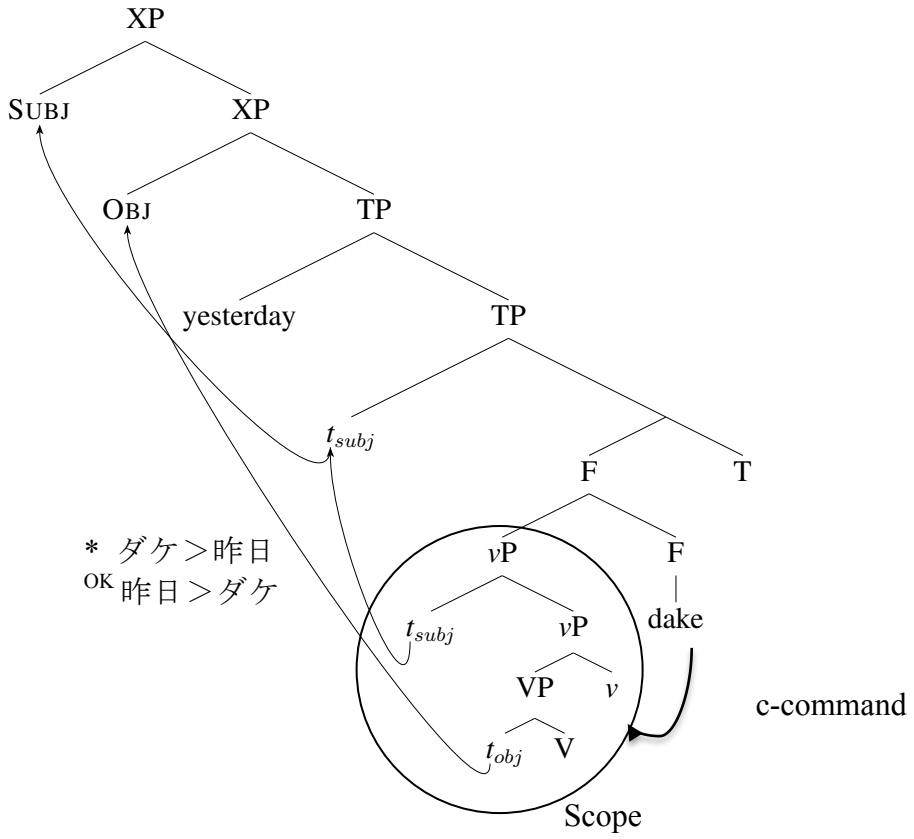
(17) 「ここの所ずっと叱り続けているあの子を見て」
a. ($_A$ 昨日) 先生が ($_B$ 昨日) あの子を ($_C$ 昨日) ほめだけはした．
b. ($_A$ 教室で) 先生が ($_B$ 教室で) あの子を ($_C$ 教室で) ほめだけはした．

(17) で副詞句の A-C のそれぞれの位置関係と，ダケのスコープ解釈を見ると， C の位置では，「昨日」も「教室で」もダケのスコープに入る解釈を得られる．この事実は，動詞句に付加されたダケが動詞句全体を c 統御領域としてとることから自然と導かれる．しかし，文脈の支えがある場合には， B の位置においても，(少なくとも筆者には)「昨日」も，「教室で」と同様にダケのスコープに入る読みが可能であるように思われる．岸本のいうように，B 位置の時間副詞が付加詞であり，ダケとのスコープ関係が c 統御

により決定されるとするならば，筆者の解釈が問題となる．更に， A の位置では，「昨日」も「教室で」もダケのスコープの外に出る解釈をもち，A 位置は，*v*P より上の位置を示す．それでは，それぞれの構造をより詳細に検討しよう．

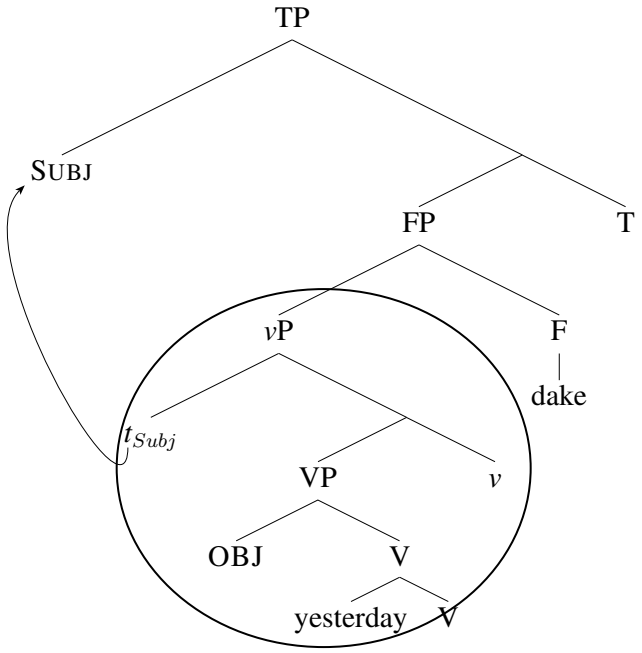
まず，(17a) の文で， 岸本がいうように，B の位置にある「昨日」がダケのスコープに入らないとしても， C の位置で「昨日」がダケのスコープに入ることは時間副詞が一様に TP 付加位置に生起すると主張することに対して問題となる． つまり，時間副詞が TP 付加位置のみに生起するのであれば，C 位置においても，やはり，「昨日」が TP 付加位置を占めており，表示を導くためには，「先生」および，「あの子」が移動の適用を受け「昨日」より高い位置に移動する必要がある．その構造を示したのが， (18) である．確かに (18) では，表示を正しく導いているが，岸本の読みでは TP 付加位置の「昨日」は統語的にダケからは c 統御されていないと述べられている．もしも， (18) が C 位置に時間副詞が生起した場合の構造だとすると，解釈において矛盾を生じる．なぜならば， C 位置に時間副詞が生起した場合には「『昨日』がダケのスコープに入る解釈」を得られるためである．よって，C 位置の時間副詞が TP 付加であることは保持できない．

(18)　先生があの子を昨日ほめだけはした.



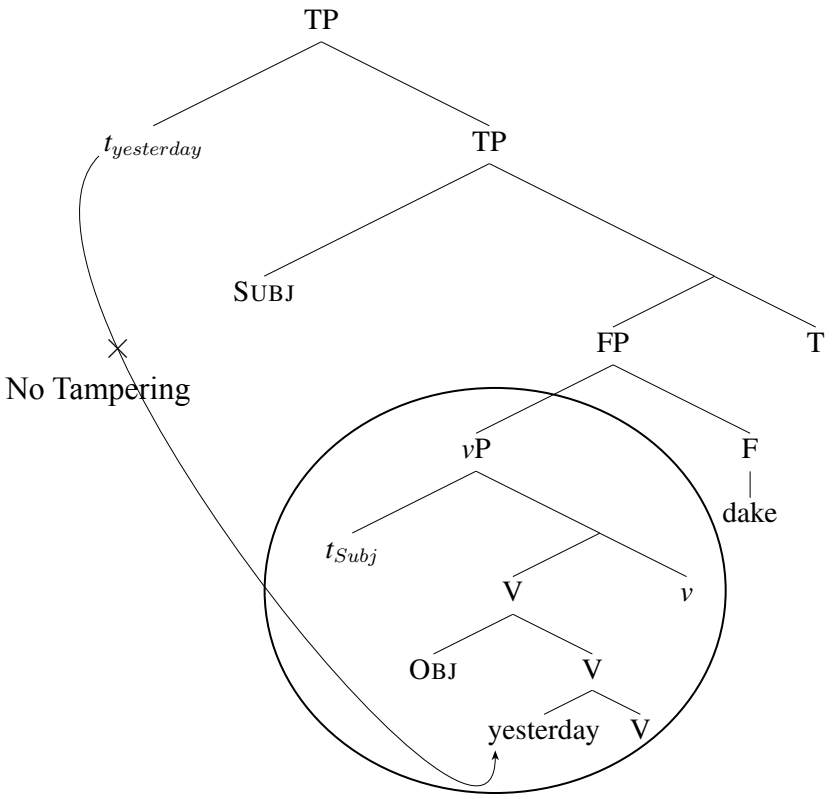
続いて，C 位置では時間副詞「昨日」がダケのスコープに入っていることを認め，且つ，目的語より動詞に近い位置に生起している可能性を考える．ここで，「昨日」が *v*P 内に基底生成する構造が可能であるとすると，目的語のよりも内側 (構造上，下位) に基底生成することとなり (= (19))，岸本のいう様に，時間副詞が TP 付加詞である議論は再び保持できない.

(19)　先生があの子を昨日ほめ$\boxed{\text{だけ}}$はした.



また，もしも時間副詞が A 位置ないしは， B 位置に基底生成する TP 付加詞であるとするならば,「昨日」が C 位置において「ダケ」のスコープに入るためには,「昨日」が目的語位置より下に移動 (LOWERING) する必要があり， 不干渉条件 (NO-TAMPERING CONDITION) の違反となる.

(20)　先生はその子を昨日ほめだけはした.



これらの事実を鑑みると日本語の時間副詞の振る舞いは，英語等の時間副詞とは異なることが分かる．よって，ここで議論では時間副詞が vP 領域および TP 領域で曖昧でありどちらにも生起可能であるとしておきたい.

2.2.2. 主格付与と拡大投射原理

これまで標準的な分析においては，英語等を始めとした，西欧系言語と同様に，日本語の主格 (NOMINATIVE CASE) の付値 (VALUE) は T からの一致現象 (AGREE: Chomsky 2000, 2004, 2008 他) によって行われると考えられており，ガ格の存在が T の介在の根拠とさ

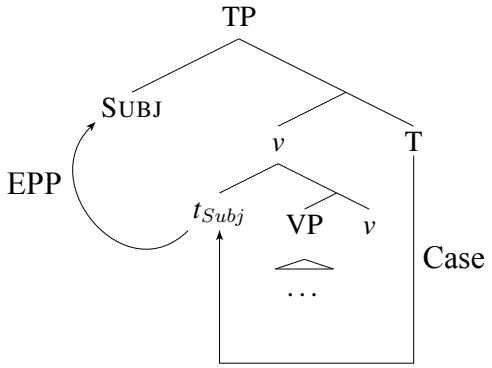
れてきた (Takezawa 1987). (21) の構造は，一般的な一致現象による格の付値に関して模式的に示したものである[12].

時制を持つ T は φ 素性と呼ばれる人称素性 (PERSON FEATURE)，数素性 (NUMBER FEATURE)，性素性 (GENDER FEATURE) の素性からなる素性束 (FEATURE BUNDLE) と，格素性 (CASE FEATURE) を持つ．しかしながら， T 主要部の φ 素性は不活性で指定を受けておらず，統語派生 (DERIVATION) の進行に伴って，一致を介して付値される必要がある．

一方で，名詞句は T と同様に φ 素性持っており， φ 素性は，統語派生に導入された段階で既に指定を受けていると考えられている．また，名詞句は格素性も同様に持っているが，統語派生に導入された段階では，名詞句の格素性は不活性 (INACTIVE) であり，自身を c 統御する機能範疇からの一致により，付値される必要がある．

現行の主格の一致に関わる現象は，(21) に示されるように，*v*P の指定部に基底生成された主語 (PREDICATE INTERNAL SUBJECT HYPOTHESIS: Fukui (1986), Fukui and Speas (1986), Kitagawa (1986), Speas (1987), Kuroda (1988), Koopman and Sportiche (1991), Kratzer (1996), 他)が，T からの一致を受け格の活性化を行うと同時に，拡大投射原理 (EPP) に従い， TP の指定部に移動すると考えることが一般的である．

(21)



[12] T を介した主格の一致および，そのメカニズムに関しては，Chomsky (2000, 2008), Pesetsky and Torrego (2005), Ura (2000), Hiraiwa (2005), Bobaljik and Wurmbrand (2008), Wurmbrand (2012),等が詳しい．以降では，格の一致のメカニズム自体を問題にせず，一般的なメカニズムを掲載することとし，格の一致のメカニズムに関しては，深くは立ち入らない．

(21) のメカニズムが全ての言語に対して有効であり，日本語もそのメカニズムに従うと仮定すると，主格が顕在化した文においては， T の介在が不可欠という帰結が導かれることになる．

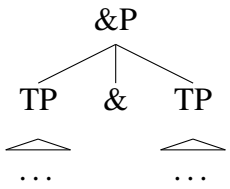
だが，格の一致，とりわけ，主格の一致に関しては，多くの研究があり，その付値のメカニズムは一致を見ていない，例えば，Kuroda (1965, 1978)，Marantz (1991)，Fukui and Nishigauchi (1992)， Harley (1995)， Aoyagi (2004)， 青柳 (2006) 等では，格の付値に対して一致とは異なる規則を立て説明を試みる．Caha (2009) では，名詞句は，統語派生に導入される段階で全ての格を持っており，名詞句の移動により，それぞれの格が具現化すると主張している (THE PEALING THEORY OF CASE) .

たとえ，(21) に示されるタイプの主格の一致のメカニズムを採用した場合であっても，連用形節には T が介在しない可能性がある． (22) の例を見られたい.

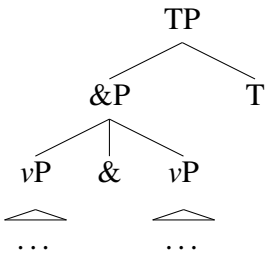
(22) a. 太郎は音楽を聞き，(彼は) 本を読んだ.
b. 太郎は昼食を食べ，(彼は) 出かけた.
c. 太郎が学生を非難し，学生が泣いた.
d. 学生がビールを飲み，先生は日本酒を飲んだ.

(22) に示された例では連用形節と文終止節の両者は独立した主格名詞句を持つ． (21) に示されるように，主格名詞句が T からの一致によって行われるとした場合に，連用形節と文終止節の構造は (23) の二つの構造の間で曖昧である[13].

(23) a.



b.



[13] ここでは，議論の煩雑化を避けるために，連用形と主節が&により三つ又枝分かれにより接続されると仮定する．連用形接続の構造の詳細に関しては，第Ⅱ部第 2 章を参照されたい.

(23a) の構造では，連用形節，文終止節ともに独立してそれぞれの *v*P 指定部に基底生成した主格主語は T により主格の一致を受け，EPP[14] の要請により指定部まで移動する．一方で， (23b) の構造を仮定した場合には，連用形節および文終止節の主格主語は (23a) と同様に *v*P 指定部位置に基底生成する．しかし，(23b)の場合には，単一の TP が二つの *v*P が支配しており，EPP で移動する主格主語の移動先として利用可能な TP の指定部位置は一箇所のみである．EPP による主格名詞句の移動の可否を考えた場合 (23b) の構造は一見すると主語位置が確保されずに問題となる様に思われる．

しかし，この問題も大きな問題とはならない．ここで，連用形節内での否定極性表現 (NEGATIVE POLARITY ITEM: NPI) の主語「主語+も」と，否定辞「ズ」のスコープ解釈を以下で考えてみよう[15]．その前に，基本的な NPI のメカニズムを振り返る．通例，否定極性表現は，否定辞によって c 統御されることによって認可される．

(24) a. 誰もその資料を持って来なかった.
b. 誰もその資料を持ってこず…

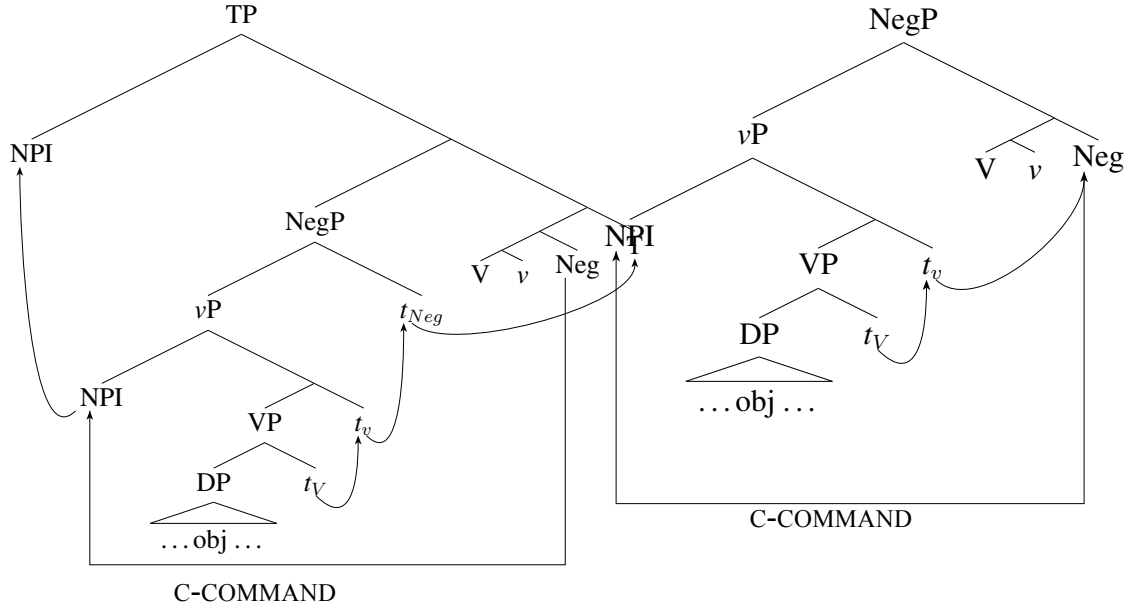
(24a) は，終止形の節であり，否定極性表現の「誰も」は否定の「ない」によって認可されていることが分かる．(24b) においても，「誰も」は「ズ」によって認可される以下のような構造を取ると考えられる (cf. 三原 2011a) .

[14] 現行の理論のもとでは，EPP と拡大投射原理は意味が異なる．拡大投射原理は，TP 指定部位置に主語を要求する「原理」であり，EPP 素性は要素を移動する際の駆動力である．ここでの EPP は TP 指定部位置を主語位置と仮定する議論を踏襲し，EPP を移動の原理の意味で用いる．

[15] 越智正男先生から「誰も」が否定極性表現ではなく，全称量化詞 (∀) である可能性をご指摘頂いた．確かに，「誰も」が全称量化子であり，否定のスコープに入った場合には ∀<¬の解釈が生まれ，「誰一人として資料を持って来なかった」という意味の解釈が必然となる．ただし，「誰も」が全称量化詞であるか否かについては議論が必要である．ただし，「誰も」が全称量化詞であったとしても，否定に c-統御されることで，スコープ解釈は，「ゼロの人が資料を持ってきた」という解釈が得られ，本論の分析には合致する．

(25) a. Syntactic Structure of (24a)
誰もがその資料を持って来なかった

b. Syntactic Structure of (24b)
誰もがその資料を持って来ず…



(24a, b) のそれぞれの構造を示した (25a, b) が見られる様に *v*P 構造においても，主語位置の否定極性表現の認可が可能である．このことから，*v*P 内に主語が残る (23b) の構造を持つ可能性は排除できず，日本語の連用形節内で主格名詞句が EPP により義務的に TP 指定部に上昇する必要がない可能性が示される．

2.2.3. 連用形節内でのかき混ぜ

日本語は語順に関して一定の制限の下，自由な語順を許す言語として知られており，その自由語順は「かき混ぜ」 (SCRAMBLING) 操作によって導かれる．かき混ぜ操作は「節内かき混ぜ」(CLAUSE INTERNAL SCRAMBLING) と「長距離かき混ぜ」(LONG DISTANCE SCRAMBLING) という二つのタイプに分けられる．二つのかき混ぜは異なる振る舞いを見せることが知られている．本節では，節内での移動に関する「節内かき混ぜ」の議論のみを取り上げる．

(26) a. 節内かき混ぜ　:
りんごを [花子が *t* 食べた].
b. 長距離かき混ぜ　:
この本を[太郎が[鈴木先生が *t* 勧めた]と勘違いした].

節内かき混ぜの着地点は現在まで多くの研究者間で TP 付加位置であると考えられており，TP レベルの投射の存在を示す手段として用いられてきた (cf. Saito 1989, 1992 他).

では，連用形節内でのかき混ぜはどのような特性を示すのであろうか．(27) が示すように，連用形接続は連用形節内部の節内かき混ぜを許容する．

(27) a. [太郎がりんごを食べ]，[花子がバナナを食べた].
b. りんごを [太郎が *t* 食べ]，バナナを [花子が *t* 食べた].

これまでの，節内かき混ぜの着地点が TP 付加位置であるという議論を踏襲すれば，(27) に示される節内かき混ぜを許す連用形節が，少なくとも TP レベルの投射を含むことを支持する証拠になろう．

しかし，(27b) において，かき混ぜの着地点が TP 付加位置であるという議論は，かき混ぜられた要素が主語位置よりも高い位置に着地していることを示しているに過ぎず，主語が TP 指定部にあることを前提とした議論である．前節 2.2.2 節で示したように，日本語の主語が (ある場合には)，*v*P 内部に残存する可能性を考えた場合 (他に，Kuroda (1988), Fukui and Takano (1988)も *v*P の内部に残存する可能性を指摘している) には，かき混ぜの適用を受けた要素が TP 付加位置に移動する根拠は弱まる．

また，節内かき混ぜは，短距離かき混ぜ/動詞句内かき混ぜ (SHORT DISTANCE SCRAMBLING/ VP-INTERNAL SCRAMBLING)と中距離かき混ぜ (MIDDLE DISTANCE SCRAMBLING) に細分化される．短距離かき混ぜと中距離かき混ぜの例を (28) - (29) にそれぞれ示す.

(28) 短距離かき混ぜ
a. *太郎がそいつ$_i$に誰の先生$_i$を紹介したの
b. 太郎が [誰$_i$の先生]$_j$を$\boxed{\text{そいつ}_i}$に t_j 紹介したの

(29) 中距離かき混ぜ
a. *そいつが$_i$花子に誰の先生$_i$を紹介したの
b. *[誰$_i$の先生]$_j$を$\boxed{\text{そいつ}_i\text{が}}$花子に t_j 紹介したの

(28) と (29) のそれぞれを比較すると短距離かき混ぜが，強交差 (STRONG CROSS-OVER EFFECT) の効果を示さない一方，中距離かき混ぜは強交差の効果を示す．これは，中距離かきまぜが，A/A'の両方の特性を示す一方，短距離かき混ぜが義務的に A 移動の特性を示すためであるという (Tada and Saito 1991，Saito 1994)．この短距離かき混ぜを，かき混ぜの操作の一種として分析するのであれば，A 位置の特性を示す *v*P 外指定部 (OUTER-SPEC.) の様な位置が，かき混ぜの着地点として想定できる．

かき混ぜ操作に関しては，未だ解明されていない点が多く，さまざまな分析があるものの，TP より低い位置，つまり，*v*P 周縁部 (*v*P-Edge) 位置にかき混ぜ操作が何かしらの要素の移動を妨げる積極的な根拠は今のところ提示されていない．

ただ，Hiraiwa (2010) で示される中距離かき混ぜでかき混ぜられた要素に関する議論がかき混ぜ要素の位置を示すのであれば，連用形節内では，TP 位置より高い位置にかき混ぜの適用を受けた要素が移動する必要性はなく，かき混ぜの適用を受けた要素は，*v*P 周縁部位置にとどまる可能性の指摘ができよう．Hiraiwa のかき混ぜに関する議論を以下で紹介する．

Hiraiwa (2010)では，中距離かき混ぜと，「は」によって主題化された要素が共起した (30c) の例を，(30a) の基底構造から導く分析を提示する．(30b) は，(30a) から，(i)「直美に」が主題化の適用を受けて，TP より外側の TopP あるいは，TP 付加位置に抜け出るとしている．そして，(ii) (30c) に示す様に TP 内部の「りんごを」が，中距離かき混ぜの適用を受けて，TP 或は TopP より更に高い位置に抜け出すという．

(30) a. [$_{TP}$ 健が直美にりんごをあげた].
b. [$_{XP/(TopP/TP)}$ 直美には [健が $t_{直美に}$ りんごをあげた]].
c. [$_{YP}$ りんごを [$_{XP(TopP/TP)}$ 直美には [健が $t_{直美に}$ $t_{りんごを}$ あげた]]].
(Hiraiwa 2010:156)

中距離かき混ぜが (30a-c) に示される派生をたどると仮定すれば，中距離かき混ぜを受けた要素は，少なくとも TP より外側の位置を移動先として要求する．

同様に，かき混ぜと主題化を連用形節内で適用した (31) の例を見ると，主題化された要素より左側にかき混ぜられた要素が移動した (31c) が非文法的であることは，*v*P より高い位置が連用形節内部で関わることを許容しないことを示していると言えよう．

(31) a. [$_{vP}$ 健が直美にりんごをあげ]…
b. [$_{XP(TopP/vP)}$直美には[$_{vP}$ 健が $t_{直美に}$りんごをあげ]]…
c. *[$_{YP}$ りんごを [$_{XP(TopP/TP)}$直美には [健が $t_{直美に}$ $t_{りんごを}$ あげ]]]，バナナを智子にはあげた．

以上，本節では，かき混ぜ操作の着地点が *v*P 指定部あるいは，*v*P 周縁部である可能性は少なくとも現時点では否定できず，かき混ぜの可否が TP の介在の十分な根拠とはなり得ないことを示した．更には，Hiraiwa (2010) で提示される例と同様の操作を連用形節内部で適用した場合，主語を持つ連用形節が *v*P としての特性を示すことを示した．

かき混ぜの着地点に関する更なる研究に関しては，A/A’の問題をはじめ，着地点，移動の駆動力等を含め今後の研究に期待したい．

3. 最小句構造としての連用形

2 節では，動詞連用形の出現環境が *v*P レベルの投射であることを主張した．本節では，連用形の具現化について，詳細に検討し連用形が最小句構造を持つことを主張する．

3.1. 語彙挿入 (VOCABULARY INSERTION) と再調整規則 (RE-ADJUSTMENT RULE)

分散形態論 (DISTRIBUTED MORPHOLOGY: Halle and Marantz 1993, 1994, Harley and Noyer 1999, Embick and Noyer 2001, 2008, Siddiqi 2006, Bobaljik 2012 他，以下では DM) の仮定に従うと，語彙の出現に関しては (i) 統語構造 (SYNTACTIC STRUCTURE) と (ii) 形態論での語彙挿入 (VOCABULARY INSERTION:以下 VI)，そして(iii) 音韻論 (PHONOLOGICAL COMPONENT) における再調整規則 (READJUSTMENT RULE: RR) が関わる．3.1 節ではそれぞれの規則群の相互関係を振り返る．

DM では，統語操作に関わる語彙とは，これまでの語彙論主義者 (LEXICALIST, cf Chomsky 1970 他) が仮定してきた「語」とは異なる．分散形態論では，語とは素性の集合であり，統語計算が完了した，つまり，SO した，素性の束 (FEATURE BUNDLE) に対して，音形 ((PHONOLOGICAL) EXPONENT) である語彙 (VOCABULARY) が挿入され，その結果，

表示が得られると考える．古くは後期挿入 (LATE-INSERTION: Halle and Marantz 1993, 1994, Marantz 1994 他)と呼ばれたこの素性の束に対する語彙の挿入をここでは語彙挿入 (VOCABULARY INSERTION: 以下 VI) とよび，本論文では，語彙挿入を (32) を仮定する．

(32) Vocabulary Insertion
Vocabulary Insertion supplies phonological features to the abstract […] morpheme…
(Embick and Noyer 2008: 298)

例えば，英語の複数形では，統語的には名詞句に複数形の接辞が付加されることにより，複数形素性の形態的具現化が VI され表示が決定する．具体的には (33) のように，複数形の接辞が生起する#主要部は自身が[pl(ural)]の素性を持つ場合には VI の適用を受け/z/として具現化する．

(33) [pl] ↔ -z

だが，英語の場合には，単純な接辞付加に加え，語形変化を伴う(34) の様な語も存在する．

(34) a. [pl] ↔ -en/{$\sqrt{Ox}$, $\sqrt{child}$, …}
b. [pl] ↔ -Ø/{$\sqrt{Moose}$, $\sqrt{Foot}$, …}
(Embick and Noyer 2008: 299)

(34) で挙げる特定の語に隣接する場合には，[pl]の具現化は (33) の規則に従わず，それぞれ ‘ox’ の場合に，‘en’，‘Moose’ の場合には ø として具現化する (IDIOSYNCRASY). このようなルート (ROOT) 部分の環境依存の異音 (ALLOMORPH) の出現を環境異音 (CONTEXTUAL ALLOMORPHY)と呼ぶ．また，この様な語彙に依存した異音に加えて，音声的環境に依存した異音 (PHONOLOGICALLY CONDITIONED ALLOMOPRHY: 以下 PA) が存在する．よく知られている事実ではあるが，英語の複数形の接辞は，前に続く名詞の音韻的特徴によって，/s~z/の間で交替する．

(35) a. book, cat … → __+/s/
b. pen, dog … → __+/z/

(35) の例のように，語末が無声音 ([-Voiced]) の名詞の場合，複数形の語尾も無声音が選択され，語末が有声音 ([+Voiced]) の名詞句の場合は，複数形の語尾も有声音が選択される[16]．この複数形接尾辞の発音に関しては統語的な要因ではなく，音韻的な操作である「（巡行）同化 (ASSIMILATION)」の結果である．純粋な音韻論的規則による語形変化は語彙が挿入された結果生じた二つの要素の隣接関係によって決定する．このような二要素間の音韻的な変化によって生じる異音をここでは PA と呼ぶ．また，英語で “destroy” を名詞化した際に，”roy” 部分が “ruc” という語彙に依存した変化を行う．このような特定語彙の特定音変化は RR の適用によって出現すると考える．

3.2. 連用形の派生

3.2 節では，DM のメカニズムに従い，連用形の統語構造から，表示を導くことを目的とする．連用形名詞として用いられる場合の構造に関しては，次節で議論することとし，本節では連用形が動詞句の一部および，連用形節で用いられる場合を提示する．

連用形は *v*P レベル投射であることは，2 節において確認されており，更には，時間副詞が TP 付加部に限られないということ (2.2.1 節)，日本語のある特定の環境では，主語が EPP による TP 指定部への牽引を受けないこと (2.2.2 節)，連用形節内部のかき混ぜが主題化を超えて適用できないこと (2.2.3 節)を提示した．以上の議論から，連用形節内に対して (36) が指摘できる．

---

[16] より正確には，英語の名詞句複数形の接辞は以下のような分布を形成する．

(i) Allomorphs of the English (regular) plural:

a. [pl] ↔ iz / $C_{[+siblilant]}$

b. [pl] ↔ s / $C_{[-Voice]}$

c. [pl] ↔ z / ___ (elsewhere)

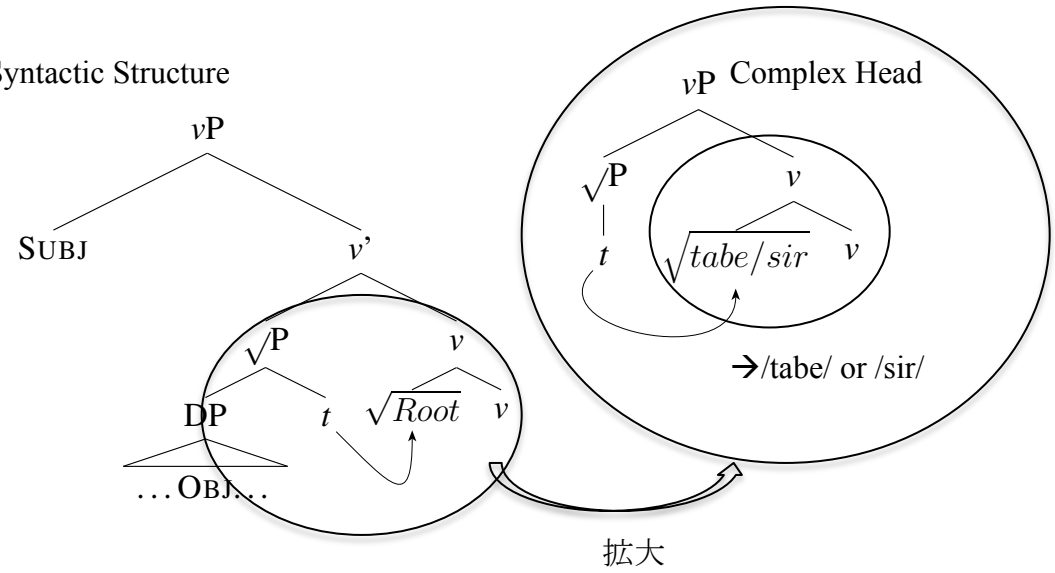
(Bobaljik and Baker: 2008: 2)

本章の議論には直接関わらないが，(i) の例では，a から順に a→b→c とルールの適用の順序がある．これは，より特異な場合からルールの適用を行う (COMPETITION/UNDERSPECIFICATION/PANINIAN ORDER) ためである．このような同一の素性に対する VI の選択に関する語彙どうしの選択を競合 (COMPETITION: Embick and Noyer 2008, Embick :2010, Bobaljik: 2012 他)と呼ぶ．より詳しい議論は Bobaljik and Baker (2008), Embick (2010) 等を参照．

(36) a. 連用形は *v*P レベルの複合主要部 (Root-*v* amalgam) に対する音形である．
b. 連用形節内部の副詞要素，および，時間副詞は，*v*P 周縁部に生起する．
c. 連用形節内部の主語は，EPP による牽引を受け，TP 指定部に，義務的に移動しない

本章第 2 節の議論から連用形節が (37) のような構造を持つことが導かれる．

(37) Syntactic Structure



(37) の構造では，ルートが範疇決定詞 (CATEGORIAL DEFINING HEAD) である *v* に主要部移動を介して移動する[17]．連用形の統語構造は *v*P 構造のため，狭義の統語論 (NARROW SYNTAX) における操作はここまでで完了する．続いて，形態部門に送られた，複合主要部 ((37) の丸で囲まれた部分) が形態部門において，線形化 (LINEARIZATION) の適用を受ける．線形化の適用を受けた後には (38) の様な線形順序 (LINEAR ORDER) を構築する ((38) では Embick (2010) に従い*オペレータで二つの要素の隣接関係を示す).

(38) a. $\sqrt{tabe} * v$
b. $\sqrt{sir} * v$

[17] ルート，範疇決定詞に関しては，序を参照されたい．

(38) で線形化によって隣接された要素 (ここではルート) と，v に対して連鎖構築 (CONCATENATION) が行われ (39) の連鎖が構築される ((39) では，⌒オペレータを用いて連鎖を示す).

(39)
a. $\sqrt{tabe}\frown v$
b. $\sqrt{sir}\frown v$

(39) では，ルートと v が隣接性に従って，連鎖を構築していることが示されている．このルートと v の連鎖に対して，形態部門において VI を行う．

VI の詳細に立ち入る前に，日本語の動詞クラスについて振り返っておきたい．日本語には，母音語幹動詞/子音語幹動詞の二つのクラスに加え，幾つかの変格活用がある．概略，母音語幹動詞は語幹が母音で終わる動詞のクラスであり，「食べる」，「起きる」，「見る」，「着る」等が含まれる．一方，子音語幹動詞は語幹が子音で終わる動詞のクラスであり，「走る」，「買う」，「取る」，「死ぬ」，「飛ぶ」，「知る」等が含まれる．本論文では，変格活用に関しては議論せず，母音語幹動詞と子音語幹動詞のみに議論の焦点を絞る．図 1 では，二つの動詞クラスの活用表を提示する．

図 1 日本語の活用形[18]

Vowel/Consonant	Base form	Mizen(Pre-Neg.)	Renyoo	Te-form	Non-Past	Past
Vowel	tabe-	tabe-	tabe	tabe-te	tabe-ru	tabe-ta
Vowel	mi-	mi-	mi	mi-te	mi-ru	mi-ta
Consonant	yom-	yom-a	yom-i	yon-de	yom-u	yom-da
Consonant	nom-	nom-a	nom-i	non-de	nom-u	non-da
Consonant	kaer-	kaer-a	kaer-i	kaet-te	kaer-u	kaet-ta

再び，(39) の連鎖に対する VI に戻る．(39a) では，ルートは母音語幹動詞であり，v と連鎖を構築している．このルートと v の連鎖に対して，/tabe/の音形の挿入により連用形/tabe/の表示が得られる．(39b) では，ルートは子音語幹動詞であり，v との連鎖を構築している．子音語幹動詞では，母音語幹動詞と異なり，ルートと v に対して/sir/の

[18] ここでは，活用形の音声を音声表記によって表す．

音形が挿入されるが，日本語では子音では語が終わることができない[19]．よって，/sir/に対して/i/の挿入が適用され，連用形/sir-i/の表示が得られる．

この/i/挿入は，三上 (1953)，三原 (2007)，田川 (2009, 2012) 等では，緩衝母音 (EPENTHETIC VOWEL/ EPENTHESIS) であると分析されており，本論文でも/i/の挿入を音韻論で挿入される緩衝母音として扱う[20]．

4. 名詞化された連用形

本節では名詞化された連用形つまり，2.1.5 節において提示した連用形が名詞として用いられる場合について考える．本章の問題の出発点は以下の三原 (2007)，田川 (2009, 2012) における提案が根底にある．三原 (2007) は，連用形は *v*P 構造を持つという本章での議論とほぼ同一の議論を展開している．

---

[19] No-Coda: *C]$_\sigma$ “Consonants are disallowed syllable-finally.” (Ito and Mester 2003: 26)

[20] ここで，/i/を *v* の音声的具現化として (i) のように扱うことはしない．

(i) a. *v* ↔ i / C]$_\sigma$ ___
b. *v* ↔ ø

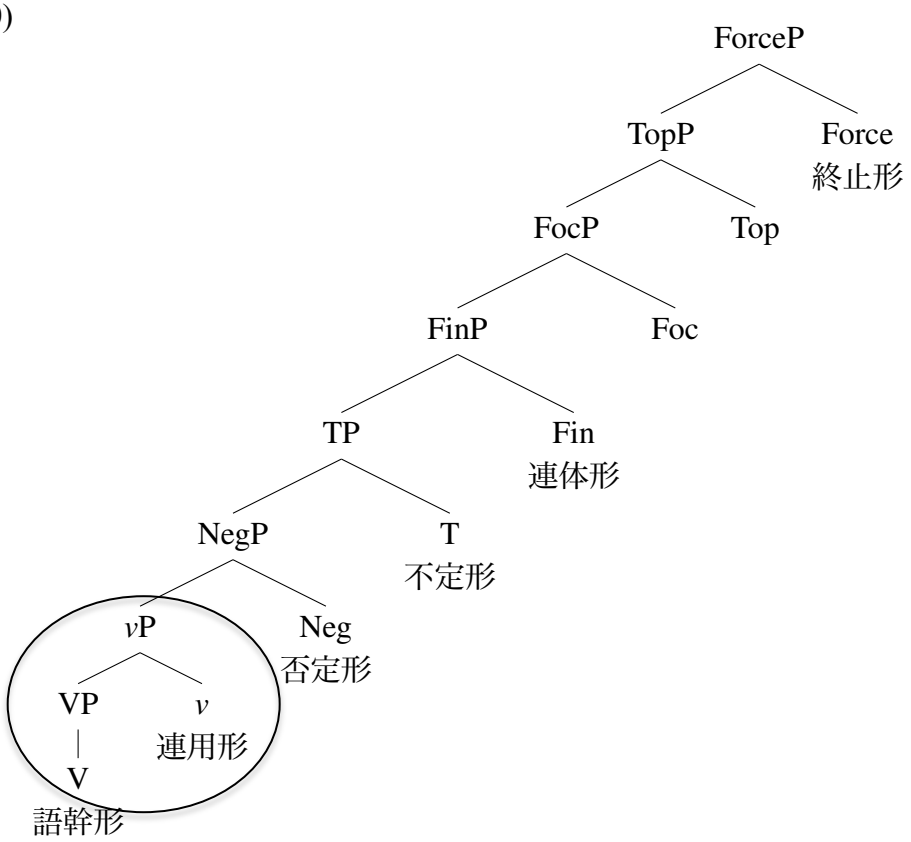
なぜならば，*v* の具現化を VI として仮定した場合に，T と *v* の連鎖が構築された場合に，Root⌒*v*⌒T に対しての VI が，/sir-i-{ru/ta}/として表示されてしまう．このような表示を避けるために，(i) の仮定を採用できない．

更には，/i/に関して RR の結果とすることもできない．通例 RR は，特定語彙に関する再調整であり，動詞のような不特定多数の語彙に対する規則とは考えられないためである (cf. Embick 2010).

(ii) Readjustment Activity Hypothesis
A readjustment rule triggered by morpheme X can effect a Root- or morpheme-specific change only when X and the Root/functional head are in the same PF cycle. (Embick 2010: 101)

ただし，この緩衝母音に対して田川の述べるように[+V]の素性が必要であるかに関しては定かではない．その理由は 4 節での名詞化の議論で提示される結果名詞の連用形には[+V]の特性が必要ないからである．

(40)



(三原: 2007 改変)

また，田川においても，以下の活用形態規則を用いて，明示的に連用形に[+V]という素性の必要性を論じている．

(41) （動詞の）活用形に関する形態論的規則

a. {V[+V], Fin[+Irrealis], M[+Imp]} ↔ Vcf に/e/、Vvf に/o/を付加

b. {V[+V], C[+Cond(itional)]} ↔ V に/eba/を付加

c. {V[+V], T[-Past]} ↔ T[-Past]に/u/を挿入/V__

d. {V[+V]} ↔ Vcf に/a/を挿入/__Neg{ない，ず，ん，ねばならない}

e. {V[+V]} ↔ Vcf に/i/を挿入

f. a, b, c において Vvf では/r/を挿入/V__suffix

(田川 2009:148)

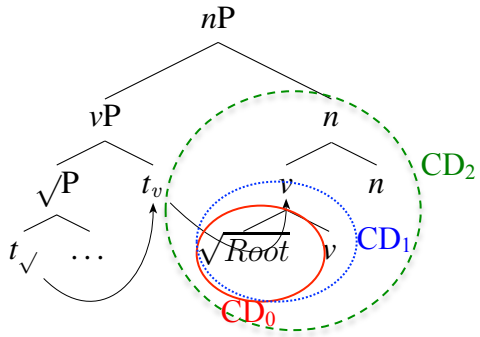
しかしながら、三原や，田川の議論にある様に，連用形の出現に動詞の範疇指定の必要性が常にあるのかについては疑問が残る (依田 2007，西山 2012)．なぜならば，何か

しらの V 素性という指定をルートに関して指定した段階で，理論的にはルートは派生のある段階で，*v* が挿入されることすでに予測していることとなる．これは先読み (LOOK AHEAD)と違わない．この仮定は，名詞として用いられる連用形が常に動詞を介して名詞化されているのであれば何ら問題ないが，もしも，動詞派生名詞句が範疇決定詞 *v* の介在を伴わずに名詞化される場合があるとすると，三原/田川の説明は妥当性を欠くことになる．よって，以下では，本章 2 節 (7) で指摘された連用形が転換名詞 (DEVERBAL NOMINAL) として用いられる場合に焦点をあてて議論する．

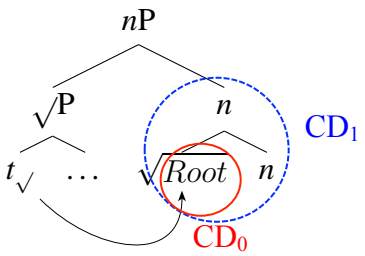
4.1. 範疇変化と循環領域

まず動詞由来名詞について英語の例を確認しておこう．英語の動詞由来名詞に関しては，動名詞 (GERUND) と，動詞派生名詞 (DERIVED NOMINAL) があることが知られている．英語では，動名詞が「ルート→動詞→名詞」という派生を持つ一方で，動詞派生名詞が，「ルート→名詞」という派生を持つと指摘されている．この二つの派生の仮定でポイントとなるのは，動詞転換の介在の有無である (Marantz 1997, Alexiadou 2001, Embick 2010 他)．(42a, b) は Embick (2010) で示される，動名詞と動詞派生名詞の統語構造である．

(42) a. 動名詞



b. 動詞派生名詞



(42a) の動名詞の構造では，ルートは一旦動詞への転換を受けその後，名詞句に転換されている．ここで，*a*/*n*/*v* 等，範疇決定詞 (CATEGORY DETERMINING-NODE) は循環主要部 (CYCLIC HEAD, 以下 CH) であり，循環主要部は循環領域 (CYCLIC DOMAIN，以下 CD) の形成をもたらす．この，循環主要部は，極小主義理論 (Minimalist Program: Chomsky 2000, 2001, 2004, 2008) で提案される位相主要部 (PHASE HEAD，以下 PH) と類似の働きを持ち，

SO に関わる領域 (SPELL-OUT/TRANSFER DOMAIN，以下 SOD) の決定を行う．また，循環領域の SO は位相の SO と同様に，統語操作が行われる領域の全ての統語操作が完了し，次の位相に統語操作のドメインが移動した段階で生じる．

ただし，SOD と CD は以下の点で異なる．まず，SOD は PH の周縁部 (PHASE EDGE) および，Phase 主要部は SO の対象とならないが，CD に関しては，当該 CD 内部の CH 自身以外の要素全てが，SO の対象となる．

(43) (SO1) When cyclic head *x* is merged, cyclic domains in the complement of *x* are spelled out.

(Embick 2010: 51)

注意したいのは，SO された CD 内の要素の形態部門における扱いである．Embick (2010) のメカニズムでは CD がそのまますぐに形態部門において，VI の適用を受ける訳ではない．これは，既に見た (33) − (35) の英語の名詞の複数形の形態変化および，英語の過去形の形態変化を考えた場合に明らかになる．例えば， (44) の英語の動詞の過去形では，過去形形態素の音形は/t/, /d/に加え，ø 形で現れる場合がある．

(44) Vocabulary Items for Tense

a. $T_{[+Past]} \leftrightarrow$ -t/ $__ \{\sqrt{Leave}, \sqrt{Bend}\ldots\}$

b. $T_{[+Past]} \leftrightarrow$ -ϕ/$__\{\sqrt{Hit}, \sqrt{Sing}\ldots\}$

c. $T_{[+Past]} \leftrightarrow$ -d (elsewhere)

(Embick 2010:47)

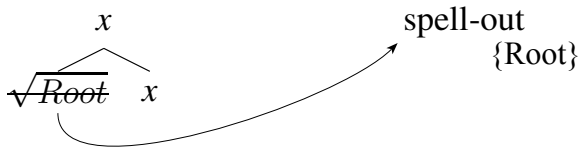
(44) の競合 (COMPETITION) において，形態部門で T 自身の形態的具現化を決定するために，$T_{[+Past]}$ はルートが可視的でなければならない．更に，T に先だって，*v* の挿入により，SO したルートに VI が適用されており，統語部門の相互関係のみに頼った分析では，(44b)に示されるようなルート自身の形態が変化する異音 (ROOT ALLOMORPHY) において問題が生じる．なぜならば，(43) のみでは，ルート自身の音形は T が形態部門に送られた段階で決定してしまうことを予測するからである．よって，Embick は，SO に関し以下のような定義を行う．

(45) (SO2) Merge of cyclic *y* triggers Spell-Out of cyclic domains in the complement of *y*, by SO1=(43) . For a cyclic domain headed by cyclic *x* in the complement of *y*, this means that the complement of *x*, the head *x* itself, and any edge[+21] material attached to *x*'s domain undergoes Vocabulary Insertion.
(Embick 2010: 53, 下線は筆者による)

(45) の下では，CH が SO した段階で形態部門には T が *v* と同時に存在することを許す.

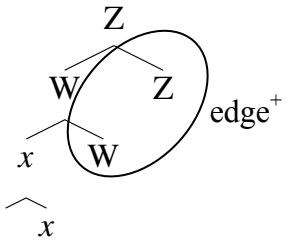
このメカニズムで，形態部門では，最大二つの CD に存在する要素が VI の段階で可視的である．具体的には， (46) に示すように，第一番目の CH の補部要素であるルートが SO の適用を受け形態部門に送られる．この段階では，形態部門には{Root} が存在している.

(46)



続いて，狭義の統語論では *x* に対して，edge[+]要素である W, Z が併合し構造を拡大する ((47)).

(47)

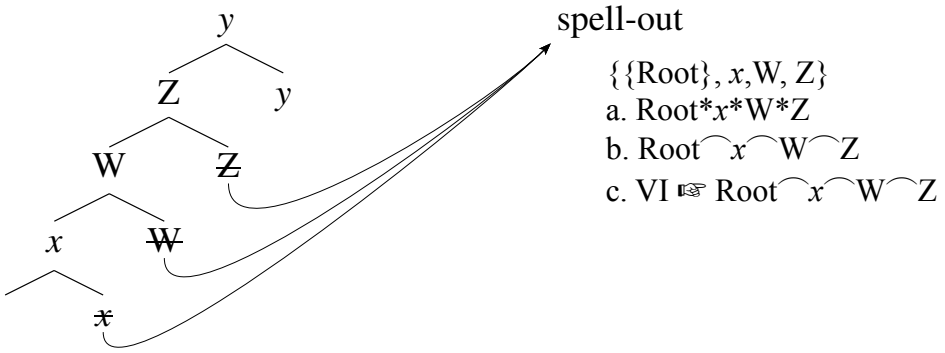


そして，Z に対して CH の *y* が併合した段階で，*x* と *x* に付随する edge[+]要素の W, Z が SO される.

---

[21] edge[+]要素とは CH を形成しない，主要部に対するカバータームである．例えば，Root-*v*-T-C 連鎖において，定義によれば (Chomsky 2001, 2004, 2008, 2012)，*v* および，C は位相をなす主要部であり，かつ同時に，CH である．一方 T は，位相をなさず，CH でもない．また，T に関しては，C が併合した段階で，C の補部にあたる要素であり，*v* と同時に SO の適用を受ける．このような，ある位相あるいは，CH が SO の適用を受ける際に，位相/CH 主要部と同時に SO される主要部を Embick は edge[+]と呼ぶ.

(48)



この段階で形態部門では，{{Root}, *x*, W, Z}が同時に存在しており，(48a) の線形化の後に (48b) の連鎖構築の適用を受け，Root⌒*x*⌒W⌒Z に対して，(48c) の様に VI が適用される．

更に，y が (49) より構造を拡大し，次の CH (以下では *z*) と併合すると，*y* が SO され，形態部門では，{{*x*, W, Z}, *y*}が同時に存在し，その全てが互いに可視的である．ただし，(48) の時点で既に *x* の内側にあるルートに関しては，*y* と同一の PF の領域には存在しない．加えて，{{Root}, *x*, W, Z} は (48) の段階で VI の適用を受けており，*y* からの VI に関しては何ら影響を受けない．つまり，*y* から可視的であるのは，既に VI の適用を受けた{x*, W*,Z*} (ここでは，*は既に VI の適用を受け，更なる VI を受けない要素を示す) となる．一方で，(49b) に示されるように次の CH (=*z*) が併合し，SO の適用を受ける段階では，ルートは既に，*z* からは可視的ではなく，*z* が存在する PF 領域には，{{{x*.W*, Z*},y},z} が同時に存在する．

(49)

a. $[\underbrace{[[[\sqrt{Root}\ x\ ]\ \mathrm{W}\ ]\ \mathrm{Z}\ ]\ y\ ]}_{y}$

b. $[[[[\ \sqrt{Root}\ \underbrace{x\ ]\ \mathrm{W}\ ]\ \mathrm{Z}\ ]\ y\ ]\ \ldots z}_{z}\ ]$

(SO3) Material in the complement of a phase head that has been spelled out is not active in subsequent PF cycles. That is, the complement of a cyclic head *x* is not present in the PF cycle in which the next higher cyclic head *y* is spelled out.

(Embick 2010: 55)

ここで，ふたたび名詞化の議論に立ち返ろう．この循環領域のメカニズム[22]においては，(42a)は，実線で囲まれた領域 (= CD_0) と破線で囲まれた領域 (=CD_1) と破線で囲まれた領域 (CD_3) の三つの CD を持つこととなる．統語的には，CD_0 は，CD_1 を形成する CH が導入された段階で，CD_1 の内部の要素は CD_2 を形成する CH が導入された段階で可視的でなくなる[23]．具体的には，(42a) の構造で *n* から *v* を含む，*v* より内側の要素に対しては相互に形態的に関係を持てない．

一方，(42b) の構造では，*n* とルートの間には，CH の介在がなく，ルートは直接 CH_1 の *n* に直接に選択されている．つまり，*n* とルートは SO の VI の段階で相互に可視的である．このルートとそれぞれの CH の関係が導く帰結として (50) のデータがあげられる．

(50)

a.動名詞	b.動詞派生名詞
refus-*ing*	refus-*al*
marry-*ing*	marr-*age*
destroy-*ing*	destruct-*ion*
break-*ing*	break-*ø*

(Embick 2010: 46)

(50) で *n* に挿入される音形を見ると，動名詞の場合には "-*ing*" という単一の音形として具現している一方，動詞派生名詞の場合には，ルートに応じて様々な *n* の音形 (*al*,

[22] この(SO1)-(SO3)までのメカニズムは，Domain Corollary および，Activity Corollary (Embick 2010: 56)と呼ばれ，以下のようにまとめられる．

(i) Domain Corollary
Cyclic head *x* is not present in the PF cycle of computation that is triggered by Merge of *x*: Thus, *x* is *not* subjected to Vocabulary Insertion (and thus cannot undergo any phonological processing) until the next cycle of Spell-Out when it is in the domain of another cyclic head. (Embick 2010: 56)

(ii) Activity Corollary
In [[… *x*]*y*], *x*, *y*, both cyclic, material in the complement of *x* is not *active* in the PF cycle in which *y* is spelled out. (Embick 2010: 56)

詳細は Embick (2010) を参照されたい．

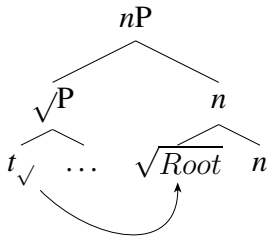
[23] ここで，「可視的」という意味は，狭義の統語論における操作の適用が可能であるということと同義である．

age, *(t)ion*, *ø* 等) が具現している．(50) の *n* の具現化は，(42) のそれぞれの構造と強く関係し，*n* とルートの間の可視性に関係している．具体的には， (42a) の動名詞では，*n* とルートが異なる CD に存在するために，*n* からは，ルートが不可視的である．しかし，(42b) では，*n* とルートが同一の CD に存在するために，*n* からルートが可視的である．この二つの可視性の違いがもたらす帰結として，*n* からルートが可視的でない動名詞の *n* の具現化がルートに関わらない一方で，*n* からルートが可視的である動詞派生名詞の *n* の具現化がルートに依存した異音が出現することとなる．

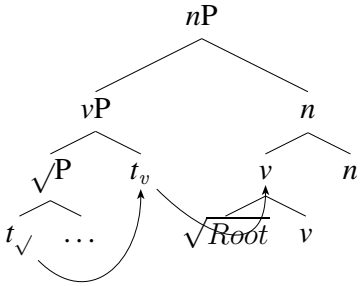
4.2. 日本語の動詞転換名詞

それでは，日本語の例を振り返ろう．連用形名詞の派生は論理的には，(51a-c) に挙げられる三つの可能性がある．

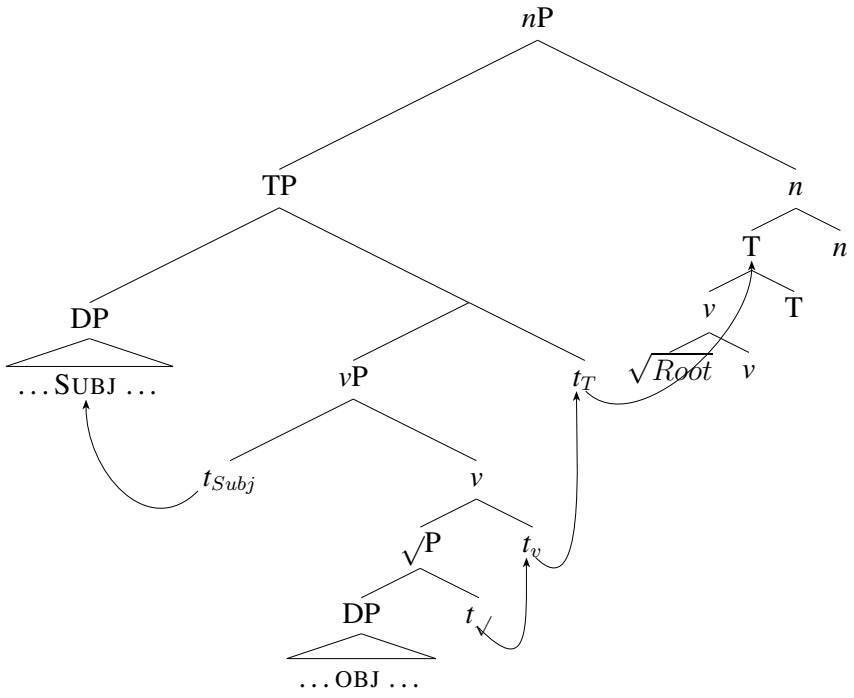
(51) a. ルートからの直接派生



b. 動詞からの派生名詞



c. 文を名詞として転換する



(51) の三つのタイプの名詞化に関して，連用形接続で *v*P 内部に主格主語が残存することが可能であると仮定する本稿では，(51c) の構造は，(51b) の構造と等価であると考えられる．よって，(51c) の構造に関する立ち入った議論は行わず，ここでは，連用形の名詞化として (51a-b) の構造を仮定する[24]．それでは，Embick (2010) らで述べられる分析は日本語でも成り立つのか，日本語の連用形名詞の例について分析しよう．

[24] 顕在的な時制辞の具現化を伴わない連用形を用いた名詞化の議論とは (51c) の構造は直接関わらないと思われるが，それだけで (51c) の構造の可能性をただちに棄却する事はできないだろう．なぜならば，「〜(最) 中/方」による文の名詞化 (田川 2010，Yoda and Nambu 2012) や，主格属格交替現象(Harada 1971, 1976, Watanabe 1996, Hiriwa 2001, 2005, Horiuchi 2005, Miyagawa 2008, Yoda 2012, Yoda and Nambu 2012) 等のように，文を介した名詞化が存在することが指摘されているためである．この場合には，名詞節は顕在的な時制形態素を含む「連体形」で節が終止する．また，今後，この二つの文の間の相互乗り入れ関係を議論した，Yoda and Nambu (2012) において指摘されるように，TP 上位に *n* を仮定する分析を援用し，名詞節の構造化を行うことも可能であろう．(51c) の構造を採用し，名詞句の構造を考えた場合には，日本語の「こと」でまとめられる名詞節では，TP 上位に *n* 主要部が，そして，*n* 主要部に対して，C 主要部が接続する階層関係が想定できる．そして，C 主要部おいて *n* と C の連鎖が生じた場合 *n*⌒C→「こと」という形態統語論的操作が生じる可能性がある．この環境において，T 主要部の存在と，*n* 主要部の存在が同時に満たされ (かつ日本語で，これまでの分析を踏襲した一致による格の活性化が行われているのであ) れば，主格属格交替現象 (NOMINATIVE GENITIVE CONVERSION) と時間副詞句 (TEMPORAL ADVERBIAL CLAUSE) での，主格と属格が随意的に交替できることについて統語的に扱える可能性がある．この問題

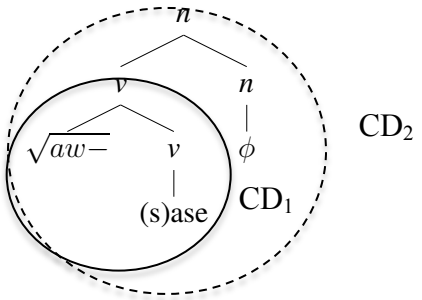
Volpe (2005) は，日本語の名詞化が (51a) の統語構造により名詞化する場合を議論する．Volpe は，日本語の連用形名詞が，(51a) の構造を持つことに対して，(52) の Arad (2003) による観察をあげ，結果名詞句がルートからの直接の名詞化を行なっている可能性を指摘する．

(52) The ability to assign multiple interpretations is strictly reserved for roots. Once the root has merged with a category head and formed a word (*n*, *v*, etc.), its interpretation is fixed and carried along throughout the derivation. This locality constraint is universal and holds across languages.
(Arad 2003: 740，強調は筆者による)

Arad (2003) の観察では，ルートが範疇決定詞と併合した段階で，そのルートが表出する意味が確定し，今後の派生によって意味の転換が行われないことになる．(52) を採用した場合，「合う/会う」“meet”の使役形「合わせ/会わせ (る)」から，着物の種類である「合わせ[25]」 “a lined kimono” が (51b) の構造により導きだされると仮定した場合問題が生じる．Volpe (2005) によって指摘される問題を以下に簡潔にまとめる．

まず，「合う/会う」の派生を考えよう．Harley (1995, 1996), Miyagawa (1998), Pyllkanen (2002)らによれば，動詞の「合う/会う」を派生するには，ルートが使役の形態素かつ，CH の *v* の具現化である “-(s)ase”と併合する．この際，使役形態素は動詞化辞であると仮定されており，ルートを動詞化すると考えられている．そして，動詞化された「会わせ(る)」は，更に，ゼロ形態素による名詞化により名詞転換する (53) .

(53)



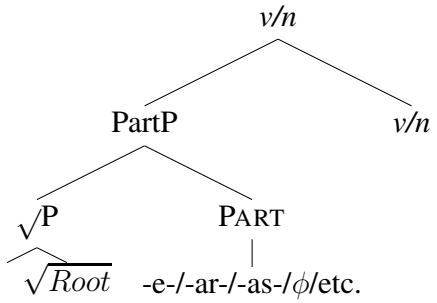
については，連用形の議論からは離れるので，本論文では取り扱わない．この分析の可能性については，Yoda and Nambu (2012) を参照されたい．

[25] 二枚の生地を合わせてつくられた着物

ここで，「合わせ」が (53) の構造を持つことが正しいとするならば，CD_1 で，ルートの “aw- ” と “-(s)ase-” が併合した段階で，(52) の一般化に従い「何かと何かを会わせる」という使役を含んだ意味が確定する．続いて，CD_2 で ø 名詞化辞との併合により，「何かと何かを会わせること」という意味が確定する．この段階ではすでに，使役を含んだ事態性を名詞句が保持しており，着物の種類である，「生地が合わさったもの」という事態性の無い結果名詞の解釈を導きだすことはできない予測をする[26]．しかし，実際は予測と異なり，「合わせ」は事態性の無い「着物の一種」であることは既に見た通りである．この “-(s)ase”が CH で有るとすると，ルートを動詞化してしまうという点が大きな問題である．

そこで，Volpe (2005) では，den Dikken (1995) で主張される接辞的小辞 (AFFIXAL PARTICLE) の分析を援用し，使役の “-(s)ase” が CH を形成しないと主張する[27]．より具体的には，“-(s)ase” が CH であるという分析の代案として，Volpe は，“-(s)ase”を小辞として，ルートに直接接続し，かつ動詞の意味を変換させる機能 (FUNCTION) を持つと主張する．結果として，(54) の構造は一つの CD のみを持つこととなり，「着物のタイプ」である「合わせ」は動詞を介さず名詞化され，(52) の一般化の射程内に収まる．

(54)



この Volpe の分析は日本語に，(51a) の名詞句が存在する可能性を強く支持している．

[26] 類例は，Volpe (2005: 44)を参照．

[27] ここでは，“-(s)ase”が CH ではないという主張を受け入れる．この主張に関しては理論内部の問題を含むため，後の章で統語的な議論を踏まえて訂正を加える．ただし，ここでの議論では，CD に関する議論が重要となるため，また，議論の複雑化を避けるために，Volpe に従い，“-sase” が CH ではないとして議論を進めていることに注意されたい．

それでは，日本語の動詞由来名詞句は常に，(51a) の構造により派生されるのであろうか． Volpe の提案する動詞句を介さない名詞化つまり，(51a) の構造に対し田川 (2012) では疑問が提示されている．ただ，Volpe の指摘は，「ルート→名詞」という派生プロセスを持つ動詞由来名詞句が存在する一方で，「ルート→動詞→名詞」という派生プロセスをもつ動詞由来名詞句の存在を否定はしておらず，田川の展開する議論が Volpe らの展開する議論に対する反論とはなっていないと思われる．

さらに，既に指摘した様に Volpe が指摘した (54) の構造を持つ例は，Grimshaw (1990) による結果名詞 (RESULT NOMINAL) に分類される例である．結果名詞の特性は「動詞句の解釈を持たない (≒ 事態解釈を持たない) 」こと，そして，「項を取らない」ことがあげられる．実際に Volpe が提出する例に関しては，「ちらし (“a reflet”)」，「出汁 (“soup stock”)」，「流し (“a sink”)」，「タレ (“souce/gravy”)」，「きれ (“a piece of cloth”)」，「離れ (“cottage”)」等であり，これらは，事態性を持たず，かつ項を取らないので，結果名詞に相当する．一方で，事態解釈を持つ名詞句「泳ぎ」，「走り」，「笑い」や，項を取ることが可能である名詞句「(人) 待ち」，「(魚) 焼き」，「(宿題) 忘れ」等のように，項を取る動詞由来名詞句が存在する．これらの名詞句は，動詞由来名詞句が一度動詞句への転換を受け，名詞化される (51b) の構造の存在を示す．そして，このような名詞句は Grimshaw (1990) での過程名詞句 (PROCESS NOMINAL) を形成する．

ここまでの議論をまとめると，日本語の動詞由来名詞句には，英語と同様に，(51a-b) の二つの動詞由来名詞句が存在し，(51a) の構造は，Grimshaw (1990)での，結果名詞句を，(51b) の構造は，過程名詞句を導くと考えられる．

4.3. 連用形の統語構造

4.2 での議論を振り返ると，日本語の連用形は，以下の二つの間で構造的に曖昧であることが示された．以下では，主要部の構造のみを示す (ただし以下では，Part の投射は省く).

(55) a. 動詞の介在がある場合 b. 動詞の介在がない場合

この二つの構造で，連用形が導かれるのであれば，連用形に対する VI 規則は，以下の規則とまとめられよう．

(56) ルートの範疇が決定した段階で挿入される音形

$\sqrt{Root} \leftrightarrow$ 連用形

4.4. 結果名詞句と過程名詞句: トルコ語の Suspended Affixation から

4.2 節でのべた，動詞転換名詞の内部構造は，トルコ語の等位構造のデータからも支持される．トルコ語では，SUSPENDED AFFIXATION (Konfilt 1996, 2012, Kabak 2007 以下 SA) という以下の言語現象があることが知られている．

(57) [[[Ali-nin ördeğ -i kızar-t] -ıp [krema -yı
Ali-GEN duck -ACC roast-CAUS -and cream -ACC
don -dor]] -ma -sın] -ı söyle -di -m.
freeze -CAUS -SUBJUNCT.NOM -3.SG. -ACC tell -PAST-1.SG
" I said for Ali to roast the duck and freeze the cream"
(Konfilt 2012)

Konfilt によると，(57) の文では名詞化接辞の "-mA"と，一致 (AGREEMENT) および，格の形態素が，等位接続された要素"ördeğ -i kızar-t" (=roast the duck) と "krema -yı don-dor" (=freeze the cream) の両者をスコープに取っているという．このように，一つの接辞が，それぞれの等位項を自身のスコープに取りながら，等位項の外側に存在する現象は SA と呼ばれる．

更に，トルコ語では，(57) の "-mA"と同音で，結果名詞句を構成する名詞化接辞 "-mA" が存在するという．(58) では，それぞれ，「凍らされた結果」できあがる， "don-dur-ma (=ice cream)"， 「ローストされた結果」できあがる "kızar-t-ma (=fried/roasted

food)”,「ローストした結果」できあがる “kavur-ma(roasted food)” が示される．それぞれは結果名詞を形成しており，名詞化辞 “-mA” が用いられている．

(58)
a. don -dur -ma
freeze -CAUS -RESULT.
“ice cream”
b. kızar-t -ma
roast-CAUS -RESULT
“fried/roasted food.”
c. kavur -ma
roast -RESULT
“roasted food”

(Konfilt: 2012)

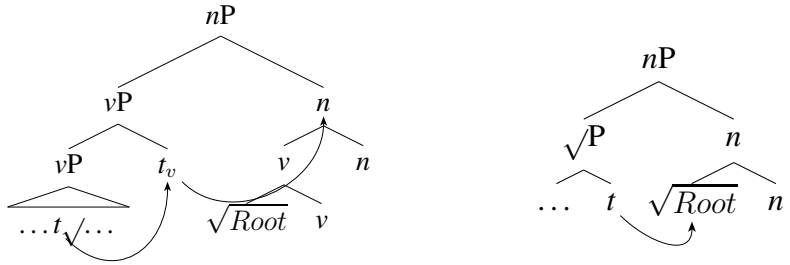
Konfilt(2012) によれば，この “-mA” を用いた SA は，(57) のような，過程名詞句を形成する名詞化接辞においては文法的な文を導くものの，結果名詞句を形成する同音異義語の名詞化辞 “-mA” では，非文法となるという．

(59)
#[don-dur] -up [kızar-t] -ma
freeze-CAUS -and roast-CAUS *-RESULT/OK NOMINALIZER
“*Ice cream and roast meat”/ “freezing and roasting”

前節 4.2 の議論では，結果名詞句は (i) 項を取らないこと，(ii) 事態解釈を持ち得ないことから，(iii) CD 一つから成り立つこと，(iv) CH の内側に，ヴォイス要素 PART が存在し得ることも示された．この議論を援用すると，(59) のトルコ語の過程名詞句で SA が可能である一方で，結果名詞句では SA が見られないことが自然に導かれる (cf. Yoda to appear).

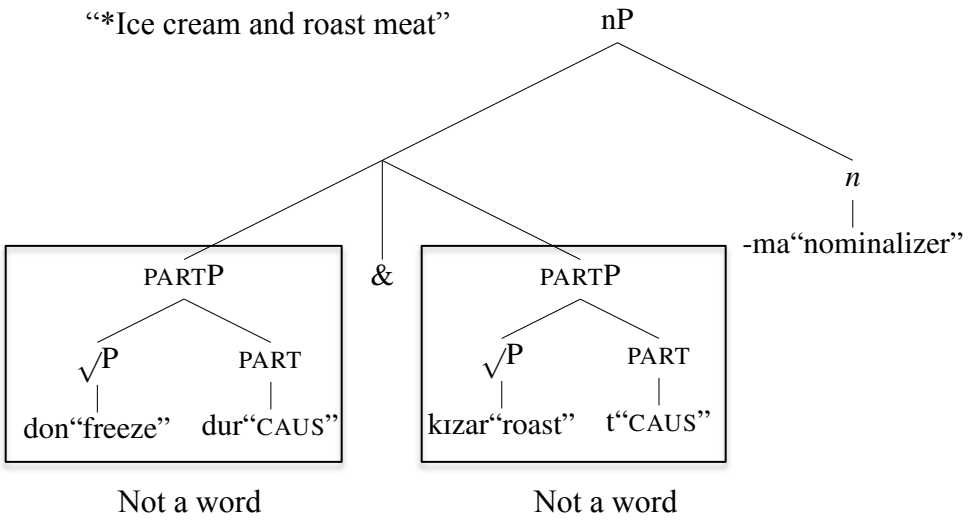
日本語のデータを振り返ると過程名詞句と結果名詞句は，以下の構造を持つ．

(60) a. 過程名詞句 b. 結果名詞句



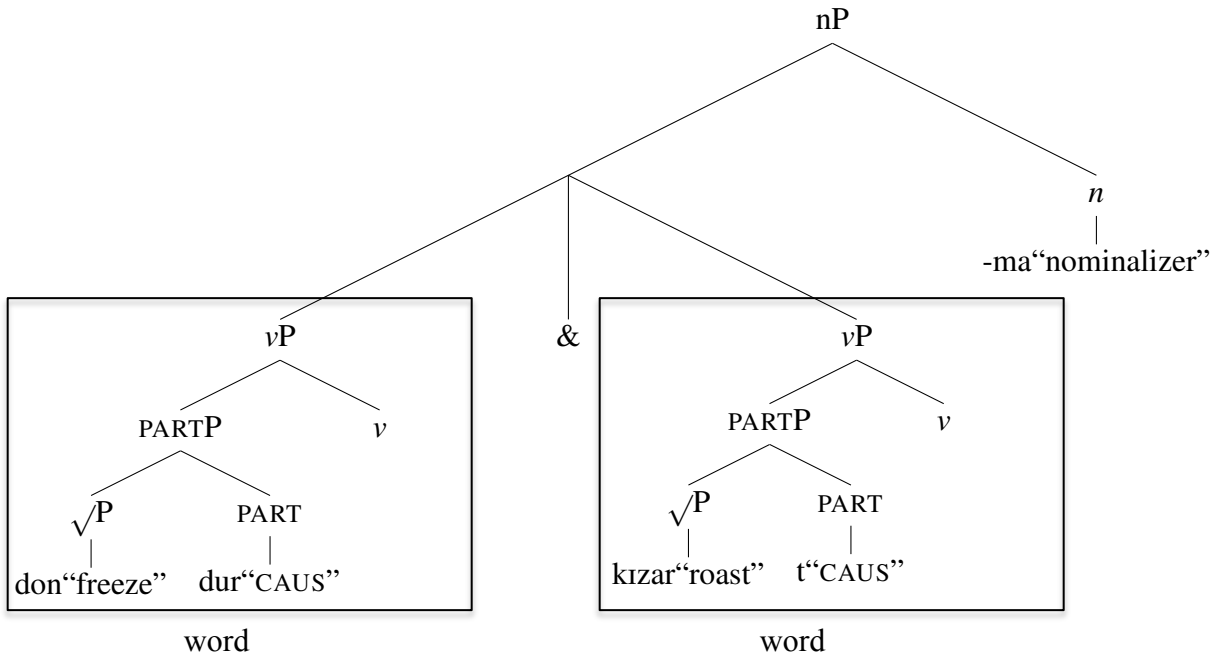
ここで，再びトルコ語の (59) を振り返ると，過程名詞句が SA 可能な一方，結果名詞句が，SA 不可能であることは，結果名詞句の SA が，「語」の単位を形成してないルートの等位接続であることから導かれる．

(61) #[don-dur] -up [kızar-t] -ma
freeze-CAUS -and roast-CAUS -RESULT.
“*Ice cream and roast meat”



一方，過程名詞句の場合を考えると，(61) の場合とは異なり， “don-dur” および，“kızar-t”は一度 *v* の介在により，動詞化されその後名詞化の適用を受けている．よって，等位接続される要素 “don-dur”，” kızar-t”は「語」としてのステータスを確立し，等位接続されているといえる．この場合には，「語」と「語」の等位接続となり，SA が文法的となる．

(62) #[don-dur] -up [kızar-t] -ma
freeze-CAUS -and roast-CAUS -NOMINALIZER.
“freezing and roasting”



このように，トルコ語の例からも動詞転換名詞が複数の構造を持っており，その構造により，統語的な特性が異なることが明らかとなる．

5. 連用形の構造と音声的具現化

本章では，まず，田川による連用形の出現環境を振り返り，連用形が多種多様な環境に出現できることを見た．その上で，田川や三原が主張するように連用形の表示を導くに際して，時制辞 T は介在しないことを示した．ただし，名詞化された連用形を詳細に検討すると，田川や三原が分析するような連用形は常に動詞の素性を有すような投射を要求する必要は無く，ルートに範疇決定詞が付加された要素であることを示した．

そして，その結果，連用形はルートさえ存在していれば出現する形態 (ELSEWHERE FORM) のような形態であることを主張した．

また，本節での議論は日本語のルートと範疇決定詞のみに関わる議論ではなく，トルコ語の名詞化においても有効であることを明示的に示した．

第 3 章
テ形接続と等位構造: &主要部の音韻的交替現象

1. はじめに

これまでテ形の研究では，(i) テ形で接続される節の意味関係を中心に捉える研究，(ii) 動詞の形態を形態論的に導く研究，(iii) テ形節自身の統語的特性を考える研究が行なわれて来た．(i) のテ形の意味論に関する研究では，「なぜテ形節と文終止節 (TERMINAL SENTENCE) の意味関係が多岐にわたる意味を導くのか」という点に焦点があてられて来た．(ii) の形態論的研究では，「テが時制の投射である T の具現化であるのか，あるいは，その他の要素であるのか」という点に焦点があてられて来た．(iii) の統語論的研究では，「テ形節と文終止節がどのような統語構造をなしているのか」という点に焦点があてられ二文の接続関係が注目されて来た．

本節では，テ形の形態的な特性に注目し，「動詞＋テ」という動詞の活用形態がどのように導かれるのかに焦点をあて，形態統語論的な考察を行う．結論として，動詞テ形の「テ」は名詞句を並列的に接続する「ト」の異音 (ALLOMORPH) であり，「テ」,「ト」の音韻的具現化は音韻部門において，&主要部の左側に隣接する要素によって決定づけられると主張する．更に，結論として，「テ」による接続は等位構造，付加構造を形成すると主張する．

2. テの機能を巡って

本節では，テ形節における動詞テ形の構造を明らかにし，「テ」がどのような統語的特性を持っているのか，という問いに対し答えを与える．伝統的日本語学では，「テ」に対して，(1) に示す二つのアプローチがある．

(1) a. テを接続詞的要素とするアプローチ:
山田 (1952)，橋本 (1934) 等
b. テを動詞の屈折の一部とするアプローチ:
Kuno (1973), Martin (1975) 等

特に学校文法では，「テ」が連用形に接続される接続助詞と考えられており，(1a) のアプローチが一般的である．しかし，以下の節で見るように，テ形節の詳細な検証を踏まえると，テを動詞と独立した要素と考えるよりも，むしろ大きな意味では動詞句の一部を構成する要素であると捉える方が自然である．

2.1. テ形接続の機能と時制

テ形による二文接続の出現環境は多岐にわたっており，(2) − (4) に示す様に様々な環境にテ形述語が出現する．

(2) 非生産的なある種の決まった表現として用いられる．
これらの様々な現象を<u>して</u>，一つの現象としてみたい．

(3) 主動詞とアスペクチュアルな助動詞を接続する際に用いられる．
日本車がいっぱい<u>走って</u>いる．

(4) 二つの動詞あるいは，節を接続する際に用いられる．
皆乾きと飢えに<u>耐えて</u>，サメの泳ぐ荒波を漂流した．
(Hasegawa 1996:4-5)

本節では，(2) − (4)のテ形接続のうち，(4) の「二つの動詞あるいは，節を接続する際に用いられる『テ』」を中心に観察し，(2) は考察の対象外とする．また，(3) に関しては，(4) の分析に関連がある場合においてのみ言及し，主要な考察の対象から除外する．

まず「テ」によって接続される二つの文に関し以下で詳細に検討する．テ形節と文終止節は (5) の，四つの意味関係をなす.

(5) a. [付帯状況] 直人はしゃがんで，財布を拾った.
b. [時間的起因関係] 美穂は紀伊国屋に行って，本を買った.
c. [因果的起因関係] 彼の話を聞いて，驚いた.
d. [並列関係] 父親は，ビールを飲んで，娘はソーダを飲んだ.

それでは，(5a-d) の意味解釈はどのように導かれるべきであるのか，また，「テ」の機能とはどういったものであるべきなのだろうか．以下 2.1.1−2.1.4 節ではこれまでの先行研究で与えられた説明を振り返り，その不備を指摘する.

2.1.1. テ: 意味的に空な接続形式とする分析とその問題点

(5) に示されるテ形接続の意味関係に対し，「テ」の機能を完全に「二文接続」のみであると限定するアプローチ (cf. Alfonso 1966, 寺村 1981, 遠藤 1982, Gray 1983，生越 1988, 他) では，テ形での多義性が英語の “and” と同様に言語使用の問題であると主張する．例えば， (6a) の英語の例を見ると，明示的には二文間の関係が示されていないにも関わらず，因果関係の読み込みが容易である．また， (6b) の例においても，時間的な前後関係は明示的には示されていないが， “and-then” が容易に読み込める (Grice 1975, Horn 1985) .

(6) a. My cat died last night. I’m sad.
b. They had a baby and got married.

また，(7) ， (8) のそれぞれ例を見ると， (7a) と (7b) ， (8a) と (8b) は同様の解釈が得られる.

(7) a. One plus one is two, and I’m sad.
b. Because one plus one is two, I’m sad.

(Hasegawa 1996: 20)

(8) a. John eats apples and six men can fit in the back seat of Ford.
b. John eats apples before six men can fit in the back seat of a Ford.
(Hasegawa 1996: 20)

だが，(7a)，(8a) の解釈は，(7b)，(8b) の解釈に限定される訳ではなく，語用論的に可能な解釈全てまで広がる．

また，(9) に示されるテ形接続も様々な意味を表す可能性がある．例えば，(9a) では，第一文を聞いた段階では，因果関係が優勢な解釈であるが，二文目が続いた段階で，因果関係はキャンセルされる．また，(9b) では，第一文の解釈では，時間的前後関係が優勢な解釈であるものの，二文目が続いた段階で，時間的前後関係の読みがキャンセルされる．

(9) a. 風邪をひいて頭が痛い．
頭が痛いのはいつものことだけど．
b. 真希は大阪へ行って，宏は大阪から帰って来る．
宏が帰って来るのが先だけど．

この様な例から，テ形接続が特定の意味を導き出している訳ではなく，単に二文を接続する機能を持つだけである可能性がこれまで議論されてきた．

しかしながら，テ形が意味的に空 (SEMANTICALLY VACUOUS) な接続形式ではないことが Hasegawa (1996) で議論されている．次節では，Hasegawa による議論を振り返る．

2.1.2. Non-incidental 分析 (Hasegawa 1996)

Hasegawa (1996) は，前節で挙げられた「テ」が意味的に空な接続詞であると主張する議論を否定している．まず (10) の付帯状況の例を見られたい．

(10) a. 日本列島に初めて独自の文化を生み出した縄文人は狩人で{あり/??あって}漁夫だった．
b. 日本列島に初めて独自の文化を生み出した縄文人は狩人であって，漁夫ではなかった．
(Hasegawa 1996)

(10a) の様に連用形接続では文法的である一方，テ形接続では文法性の低下を示す例がある．(10a) の例で，テ形接続の文法性を向上させるためには，(10b) の様に，極性 (POLARITY) を反転し，否定文とする必要があり，(10) に示される文法性の変化は，「テ」が意味的に空な接続詞ではないことを示していると Hasegawa はいう．更に，Hasegawa は (11) の例が示すように，テ形接続のみが文法性の低下を示す例がある．

(11) a. 花子が家を出た．雨が降り始めた．
b. 花子が家を出た後で，雨が降り始めた．
c. *花子が家を出て，雨が降り始めた．

(11) の例ではそれぞれの文が「花子が家を出る」事態と「雨が降り始める」事態を接続しているのだが，その接続形式が異なる．Hasegawa によれば， (11c) の文法性の低下は接続形式によるものであるという．(11a) において，独立した二つの文が接続された場合に，高い文法性が示される一方，(11c) が文法性の低下を示している．この(11a) と (11c) の比較で，(11c) に文法性の低下が見られることから，「テ」それ自体が意味的に空ではないと Hasegawa は主張する．更に， (11b) と (11c) の文法性の違いから，「テ」が「後で」と同様に，時間的な前後関係 (TEMPORAL SEQUENCE) を示している訳ではなく，他の文法機能を担っているとも主張する．

Hasegawa は，(11) の三例の文法性の差異から，「テ」を “Non-incidental” な機能を持ち，二文が何の関係性を持たないことを強制し接続する接続形式であると結論づける．つまり，Hasegawa の説明の下では，(11c) の非文法性は (11a, b) が示すような時間的な前後関係が示されるべき環境において，二つの意味関係が何も持たない解釈を強制する接続形式が用いられていることに起因するという訳である．

2.1.3. 時制形態素としてのテ (Nakatani 2004)

Hasegawa (1996) での，テ形接続が「二文が何の関係性を持たない」場合にのみに用いられる接続形式であるという分析に対しては，既に Nakatani (2004) が批判的な議論を展開している．Nakatani (2004) では「テ」は時制形態素「タ」の異音であり，時間的

前後関係を示していると主張している[28]．以下では，Nakatani による Hasegawa の批判を確認する．Nakatani は Hasegawa の挙げる (11) の例に対して， (12) の例を挙げ，連用形接続においても，テ形接続と同様に文法性の低下を指摘している．

(12)　　*花子が家を出，雨が降り始めた．

(12) が示すように，テ形接続を連用形接続と変えても，文法性の向上が見られない．これにより，Nakatni は，「テ」が「二文間に意味関係を作らない」という機能を備えている訳ではなく，(11) の文法性の低下は二文間の意味が相互に関係しないことによると主張している．

Nakatani の議論では，日本語は相対テンス言語であり，テ形節の無標の解釈は，文終止節に先行して生じた事態を記述する形式であると述べている．本節では，テとタの意味論に関わる詳細な議論は避け，概略 *v*P レベルに構成される文命題が，T レベルの時制によって，時間幅 (TIME INTERVAL) に投錨されるとし議論をすすめる[29]．また，Nakatani によれば，時制解釈は，T レベル要素のみでは完結せず，更に上位の C レベル投射 (あるいは，Fin レベル: cf. Rizzi 1997, 三原 2009, 2010, 2011b) の介在によって決定される．

(13) T and C (=Fin) semantically (as well as syntactically) work at different levels. T works event-internally and C (=Fin) event-externally.
a. Tense semantics in general is twofold:
The T-level tense takes care of event-sequencing
The C-level tense takes care of reference-time
(and sometimes the sequencing between two reference time.)
b. An event is independent, if governed by C (=Fin)
c. Event dependency emerges when events are connected without C.
(Nakatani 2004: 151, 下線部は筆者による)

(13) のメカニズムに従えば，C レベルが介在する文終止節が T 主要部に [+Past] の素性を持つ場合においては，T レベルは「タ」として具現化する．一方，C レベルが介在

[28] テ形の時制に関する詳細な議論は第 I 部第 1 章を参照．
[29] *v*P レベルと命題の関係に関しては，Fukui and Speas (1986), Kitagawa (1986), Koopman and Sportiche (1991), Kuroda (1988), Kratzer (1996)を参照．また，時制投錨に関しては Enç (1987), Hornstein (1990), 三原 (1992), Ogihara (1996, 1999) 等を参照．

しない T レベルは「テ」として具現化する．この事実は， (14) (= (5) の再掲) で，並列解釈以外の場合で，V_1 事態が V_2 事態に先行して生じる解釈を持つことと整合する[30].

(14) (= (5))
a. [付帯状況] 直人はしゃがんで，財布を拾った.
b. [時間的起因関係] 美穂は紀伊国屋に行って，本を買った.
c. [因果的起因関係] 彼の話を聞いて，驚いた.
d. [並列関係] 父親はビールを飲んで，娘はソーダを飲んだ.

ただし，単純に Nakatani の分析が示す C の存在の有無がそのまま「テ」と「タ」の交替を促していると考えるだけでは問題が生じる場合があることに注意されたい．問題については， 2.1.4 節で詳細に扱う.

2.1.4. CP 領域に関わる諸問題

前 2.1.3 節では，Nakatani の主張に基づき，C の介在が，T レベルの時制形態素の具現化に影響を与えることを見た．Nakatani の主張を踏まえると， (15) のようなテ形節内部での，節内かき混ぜ操作 (CLAUSE INTERNAL SCRAMBLING) の中距離かき混ぜ (MIDDLE-DISTANCE SCRAMBLING) は，TP の付加位置に着地すると分析されると思われる (cf. Saito 1989, 1992)[31].

(15) a. 太郎がりんごを食べて，花子はバナナを食べた.
b. りんごを[太郎が *t* 食べて]，花子はバナナを食べた.

しかしながら，既に多くの先攻研究 (第 3 章参照) で指摘されている様に，中距離かき混ぜ操作に関しては，構造上の問題を含んでいる．特に問題となるのはかき混ぜ句の着地点の問題である．まず事実観察から順を追って確認したい．日本語では， (16) に

[30] Nakatani は，(14a~d) のように「テ」による接続形式の様々な意味形成に対し，以下のような説明を与える.

(i) When event Ψ(e) is independent on event ø(e'), the interpretive status of Ψ(e) in the discourse is established only by virtue of its logical relation to ø(e'). (Nakatani 2004: 172)

[31] かき混ぜに関する議論の詳細は Miyara 1982, Saito 1985, Kuroda 1988, Fukui 1993, Tada 1993, Miyagawa 1997, 2001, Nemoto 1999 等が詳しい．また，第 I 部第 2 章の連用形節内部のかき混ぜについても参照のこと.

示されるように，Wh 要素は「カ」を主要部とする C 要素と同一節内部に存在する必要性が指摘されている (K.I, Harada 1972) .

(16) a. 太郎は花子に[誰がくるか]教えた.
b. *太郎は誰に[花子が来るか]教えた.

(16) に加えて，Saito (1989) は，かき混ぜによって摘出された Wh 要素に関しては，その限りではなく，以下のように「カ」を主要部とする C 要素がまとめる節から抜き出されていても，認可が可能なことを指摘する.

(17) a. [メアリーは[ジョンがどの本を図書館から借り出したか]知りたがっている].
b. どの本 $_i$ を[メアリーは[ジョンが t_i 図書館から借り出したか]知りたがっている].

(17) の文が文法的な文として解釈されるためには，かき混ぜられた「どの本」が統語派生のある段階で，元位置で解釈される必要がある．この様なかき混ぜられた要素が元位置に戻ることを再構築 (RECONSTRUCTION) と呼ぶ.

また， (18a) の例を見ると，表層では，かき混ぜられた「自分自身」は「花子」より高い位置にあるはずであり，もし「自分自身」が A 位置 (A-POSITION) に存在しているとすると，「花子」は「自分自身」に束縛され，非文を導くはずである．しかし，(18a) が文法的であることから，かき混ぜられた要素の着地点は A’位置 (A’-POSITION) と考えられる[32]．だが，(18b) では，中距離かき混ぜ適用前の位置関係では，適切な束縛関係が保障されず，かき混ぜの適用を受けて初めて，「彼ら」は「お互い」との束縛関係が成立する．これにより，かき混ぜられた要素の着地点は A 位置であるとも考えられる[33].

(18) a. 自分自身 $_i$ を[花子が t_i 批判した].
b. 彼ら $_i$ を[昌男は[お互いの先生に t_i 紹介した]].

[32] 当然の事ながら，「自分自身」と「花子」の同一解釈は再構築効果によって保障されることとなる.
[33] このようなかき混ぜ操作における A/A’の曖昧性については，ドイツ語 (German) では Webelhuth (1989), ヒンディー語 (Hindi)では Mahajan (1990) でも扱われている.

(18) の束縛の事実を捉えるには，TP 付加位置にかき混ぜられた要素が A 位置にあると同時に，A' 位置にある必要性が生じる．

この問題に対し，Hiraiwa (2010) では，短距離かき混ぜの適用を受けた要素が CP レベル領域への移動と同時の，TP レベル領域への移動で解決を求める．

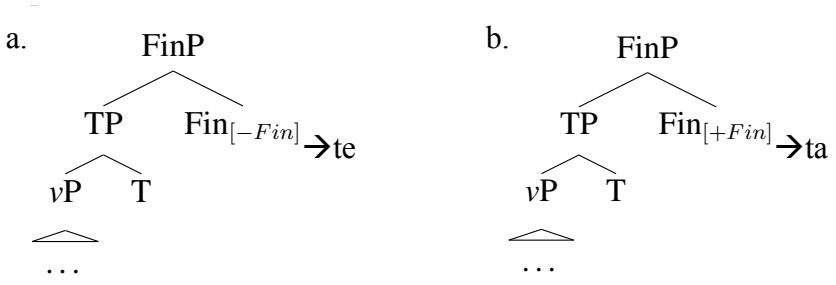
Hiraiwa (2010) の観察によると， (19) が示すように中距離かきまぜの着地点については，主題化された要素よりも左側となる．これは少なくとも焦点化を受けた名詞句よりも左側，つまり，当該の節の CP レベルのどこかまで移動を示す．

(19) a. 健が直美にりんごをあげた．
b. 直美には $_i$，[健が t_i りんごをあげた].
c. りんごを $_j$，[直美には $_i$，[健が t_i t_j あげた]].
(Hiraiwa 2010: 156)

Hiraiwa の分析では，中距離かき混ぜの適用を受けた要素は，A'連鎖 (A'-CHAIN) を構築しながら，CP 領域に移動すると同時に，A-連鎖 (A-CHAIN) を構築しながら TP の指定部領域にも移動する．この枠組みを採用すれば，中距離かき混ぜが適用された節においては，CP 領域の介在が必要である．

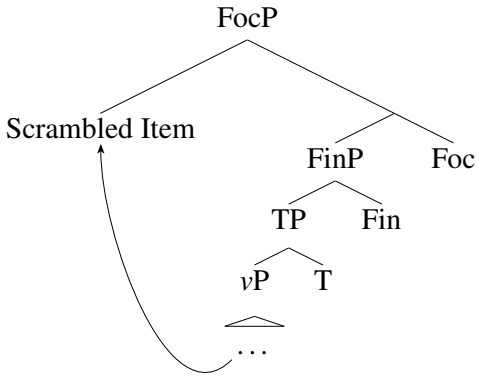
更に，Nakatani の分析においては，C を単一の階層として扱っているが，近年 Rizzi (1997) に端を発した豊かな C レベルを仮定する分析により，C レベルの投射については，これまでに考えられていたよりも，より複雑な構造を持つという分析がある (CARTOGRAPHIC APPROACH: Rizzi 1997 他)．Rizzi らでは，CP レベルは文文法と談話との関連性を構築するレベルであると考えられており，この仮定に従えば，Nakatani の主張する C レベルの有無は文の定形性を保障する Fin レベル主要部の素性 [±Fin] 素性に帰結されると言い換えられる．

(20)



そして，Rizzi らの分析の下では，かき混ぜ操作はある種の焦点移動であり， (21) に示される Foc(us)P の指定部への移動となる．

(21)



これらの議論を踏まえると，Nakatani が主張する様に C レベルの不在が T 主要部の音韻的具現化に関わるとは言い難く，例え C レベルが存在していたとしても，T の具現化が「テ」となる場合が考えられる．

そこで，本稿では，Rizzi らによる，CP 領域の精密化: CP カートグラフィー (CARTOGRAPHIC STRUCTURE OF CP) の枠組みを援用し，Nakatani の分析を踏襲しながらも，テ形における「テ」に対し，新たな分析を提出する．

2.2. & 主要部の交替現象

2.1 節までの議論では，テ形におけるテが主節に対し，相対的な時制解釈を引き起していることを示す一方，「テ」，「タ」が C レベル投射の介在により交替するという分析の問題点を示した．本 2.2 節では，テ形が時間的順序関係を示すマーカーであると同時に，二文接続を導く&の主要部であると主張し，それを示す．

日本語において，二つの同一のカテゴリー要素を接続する場合，(22) に示すように，名詞句を接続する際には「ト」が，それ以外のカテゴリーを接続する際には「テ」が用いられる．

(22) a. りんご{と/*て}みかん
b. 食べ{*と/て}飲む
c. 安く{*と/て}うまい
d. *大阪から{と/て}まで

また，(23) の例を見ると，状態動詞によって形成されたテ形節の場合に，テ形で接続された二つの節の事態は，順序付けされた集合 (以下，ORDERED SET) を形成しているとは考え難く，二つの節は何らかの要素によって平行に接続される必要がある．

(23) 体育館には男子生徒が居て，校庭には女子生徒が居る．

(23) の様な並列関係を形成する節に対し，(24) に示される節では，二つの事態の間に，並列関係を読み込むと同時に ordered set を形成する解釈が可能である．

(24) 気象情報を集めて，天気図を作った．

ここで，(23) の例が示す節と (24) の例が示す節を比較したい．(23) の並列関係をなす節は&主要部を持ち，等位構造である反面，(24) の節はテ形節が文終止節に対し付加的に接続すると仮定する[34]．もし，この仮定が正しければ，等位構造をなす (23) の文は，Ross (1967) 以来指摘される等位構造制約 (COORDINATE STRUCTURE CONSTRAINT: CSC) の適用を受け，(24) の文は等位構造制約の適用範囲から外れると予測する．

等位構造制約は，(25) に示される．

[34] テ形に関する二つの節がどのような接続関係を形成するのかについては，本節では詳しくは論じないが，Tamori (1976-1977)，Nakatani (2004)に関しては，従属節構造をなす分析を，内丸 (2006)，三原 (2011)，吉永 (2012)では，テ形接続が等位接続構造/付加構造の二つの構造を持ち得る分析を提案している．本論文では，内丸，三原，吉永の延長で，テ形節が等位接続構造と付加構造の両者を持ち得ると考え議論する．テ形が等位接続と，付加構造の両者を持つと考える根拠に関しては，第Ⅱ部で詳しく考察する事とする．また，等位構造からの抜き出しに関する議論では，等位接続された二つの項からの抜き出しの移動が制約をうけるのか (Pesestky 1998, Chomsky 2012)，あるいは，LF における制約であるのか (May 1985, Goodall 1985, Fox 2000, Kato 2012, Yoda 2012)かに関しては意見の一致を見ていない．ここでは，等位構造を持つことが，等位構造制約に関わるとし議論を進める．表層で等位構造を持つにも関わらず，等位構造制約の対象とならない場合に関しては，Jackendoff and Culicover (1997), Yusa and Sacock (2002), Kwon and Polinsky (2008), 他，また，第Ⅱ部 1 章に詳しい議論がある．

(25) In a coordinate structure, no conjunct may be moved, nor may any element contained in a conjunct be moved out of that conjunct… unless the same elements is moved out of that conjuncts.

(Ross 1967)

(25) の等位構造制約は，等位構造において等位接続された項の一部，あるいは全てを非対称的に抜き出すことを規制しており，等位構造からの抜き出しは，等位接続された双方の等位項から並行的に抜き出す (ACROSS THE BOARD MOVEMENT: ATB MOVEMENT) のみが許容されることを記述している．この等位構造制約は， (26) のような例の文法性の低下を適切に予測できる．

(26) a. I like [apples and oranges].
b. *What$_i$ do you like [apples and t_i]?
c. What$_i$ do you like t_i?

(27) a. You drank wine and ate some cheese.
b. *What$_i$ did you [drink wine and eat t_i]?
c. What$_i$ did you [drink t_i and eat t_i]?

(25) の等位構造制約は， (28) に示されるように，二つの事態が ordered set を形成しない並列関係をなす文からの抜き出しに適用されるが， (29) に示されるように，二つの事態が ordered set を形成する場合の抜き出しには適用されるない．また， (29) の場合は，二つの節から並行的な抜き出しもできない．

(28) a. 2 時間目は男子学生が体育館に居て，女子学生が校庭に居た．
b. 2 時間目はどこに[男子学生が *t* 居て，女子学生が *t* いた]の．
c.*2 時間目は校庭に，[男子学生が体育館に居て]，[女子学生 *t* が居た].

(29) a. [気象情報を集めて]，[天気図を作った].
b. #何を[*t* 集めて]，[*t* 作った]の．
c. 天気図を[気象情報を集めて]，[*t* 作った].

(28) ，(29) から，テ形接続には少なくとも，等位構造が関わる場合があり，そのような等位接続は &P が介在すると考えられる．本論文では，テの具現化に関し，「テ $_1$」，「テ $_2$」の様に，等位接続を導く「テ」と従属接続を導く「テ」を個別に仮定せず，二つの異なる構造を導く「テ」は一つの語彙 (LEXICAL ENTRY) であると考え分析を進める．

3. 形態統語論的時制辞と&主要部の交替現象

本節では，2 節までで確認した T レベル主要部，Fin レベル主要部，& レベル主要部の相互関係による，複合主要部 (T-Fin-& AMALGAM) の音形 (EXPONENT) の交替現象に対し，理論的説明を与える．

3.1. 主要部の音韻的具現化の交替: 過去形と非過去形

本 3.1 節では，分散形態論 (DISTRIBUTED MORPHOLOGY: DM 第 1 章，第 3 章参照) の仮定を用いて，テ形節における「テ」の具現化に対して理論的に説明を与える．本章 3 節までの議論で，テ形における「テ」は T レベル主要部と Fin レベル主要部，&レベル主要部の相互関係により導かれることを示した．

詳細には，まず，テ形におけるテの出現には T レベル主要部に，[+Past]の指定があると述べた (第 1 章，第 3 章，2.1.3 節)．続いて，精密化された C レベルを採用し Fin レベル主要部が [+Fin] である場合 T レベル主要部は/ta/として具現化するとした (第 3 章 2.1.4 節)．

それでは，以下では非過去，過去，テ形の形態的具現化を要請するメカニズムについて考えよう．非過去形および過去形の統語構造は (30) に示される (ここでは，動詞は「食べ」,「知 r」を用いた[35])．

---

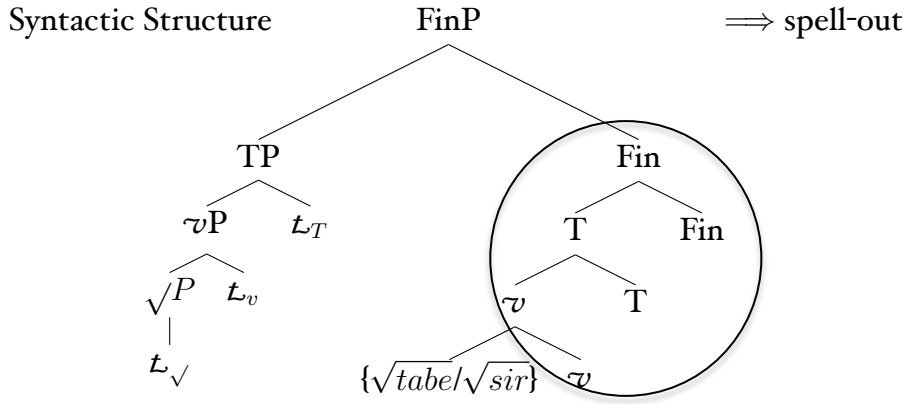
[35] 以下で再び日本語の活用形に関するパラダイムを確認する．

Vowel/Consonant	Base form	Mizen(Pre-Neg.)	Renyoo	Te-form	Non-Past	Past
Vowel	tabe-	tabe-	tabe	tabe-te	tabe-ru	tabe-ta
Vowel	mi-	mi-	mi	mi-te	mi-ru	mi-ta
Consonant	yom-	yom-a	yom-i	yon-de	yom-u	yom-da
Consonant	nom-	nom-a	nom-i	non-de	nom-u	non-da
Consonant	kaer-	kaer-a	kaer-i	kaet-te	kaer-u	kaet-ta

上記の図から見て分かるように，テ形，過去形，非過去形がそれぞれの連用形を内包している．本論文では，テ形，過去形，非過去形を以下の様に考える (cf. 序および，田川 2009 も参照)．

(i) 母音語幹動詞
a. 連用形: tabe
b. テ形: tabe-te 連用形+te
c. 非過去形: tabe-ru 連用形+ru
d. 過去形: tabe-ta 連用形+ta

(30)



(30) の樹形図で，丸で囲まれた複合主要部部分 (Fin-T AMALGAM) に注目したい． Fin レベル主要部が [+Fin] の素性を持ち，かつ T レベル主要部が [-Past] の素性を持つ場合には複合主要部が/(r)u/ として具現化すると仮定する．また，Fin レベル主要部の素性が [+Fin] かつ，T レベル主要部の素性が [+Past] であれば，複合主要部が/ta/として具現化する．つまり， (31) の様に，過去形と非過去形の音声的具現化は /ta/ と /(r)u/ の間で交替する．

(31) 時制形態素に関するパラダイム
a. 過去形 (Past form): $T_{[+Past]} \frown Fin_{[+Fin]} \leftrightarrow$ ta
b. 非過去形 (Non-Past): $T_{[-Past]} \frown Fin_{[+Fin]} \leftrightarrow$ (r)u

過去形については，動詞のクラスに関わらず，常に/ta/が挿入される一方で，非過去形に関しては，動詞のクラスによって /ru/~/u/ が挿入されることに注意されたい．

具体的には，過去形および非過去形の母音語幹動詞「食べ」の場合は，統語論では動詞移動を介し，複合主要部を形成する その後，(30) の構造を形成し，SO の適用を受ける．続いて，形成された複合主要部 ((30) の丸で囲んだ部分) に対して形態部門におい

(ii) 子音語幹動詞
a. 連用形: yom 連用形
b. テ形: yon-de 連用形+te
c. 非過去形: yom-u 連用形+ru
d. 過去形: yon-da 連用形+ta

この(i), (ii)の母音語幹/子音語幹動詞のパラダイムのもとでは，Root-*v* 複合主要部は，常に連用形として具現化し，T-Fin-X 複合要素で，テ形，非過去形，過去形の接辞の交替が生じていると考えることが自然である．

当メカニズムに関して指摘して頂いた，Johnathan Bobaljik 先生に御礼申し上げる．

て，語彙挿入が適用される．語彙挿入の際には，丸で囲まれた全ての範囲が一つの循環領域 (CYCLIC DOMAIN: Embick 2010 他) となる[36]．このような構造上で，Fin 主要部にとって T 主要部が可視的であり，T レベルの具現化に影響を与えられる (第 3 章も参照) ．

よって，T レベルの指定が [+Past]であり， 且つ，Fin レベルの指定が [+Fin] であれば /ta/ として，[+Past] ，且つ，[-Fin] であれば/te/として，[-Past] ，且つ， [+Fin] であれば, /ru/ として具現化する[37]．最終的に，語幹が母音語幹動詞 (「食べ」) の場合，語幹は音韻的には /tabe/ となり，/tabe-u/の出現が Hiatus (Avoid *VV) により制限され，非過去形では/tabe/-/ru/の過去形では/tabe-ta/の形式が出現する．

過去形および非過去形の子音語幹動詞「知る」の場合も同様の過程を経る．ただし，子音語幹動詞の場合には，(31) の語彙挿入の際にそのまま/u/が選択され非過去形の表層では，/sir/-/u/が出現する．また，過去形では/sir-/-/ta/が挿入され，音便規則[38]の適用により，/sit-ta/が表層に具現化する．

3.2. 主要部の音韻的具現化の交替: &主要部の音韻的具現化

続いて，前節で見た「ト」/「テ」の交替現象に関して観察する．前節の議論に従えば,「ト」/「テ」は&の具現化として考えられる．ここでは，その&主要部の音声的具現化を見る．&の主要部に関しては，それ自身が形態部門において隣接する要素によって具現化は (32) の様に交替するのであった．

---

[36] T, Fin の主要部は共に edge^{+} (第 I 部 2 章参照) を形成する．

(i) $[_{edge+}\ [_{CD1}\ [_{CD0}\ \text{Root}] \frown v\ ]\ T\ (=\text{edge}^{+}) \frown \text{Fin}\ (=\text{edge+})\ ]$

[37] [-Past]かつ[-Fin]の可能性に関しては，本論文では扱わないが，(i) のような例が考えられる．ここでは「ために」は目的の節を形成する接続詞であり，未来の未確定の事項について言及することができる．

(i) 夏休みの最終日に宿題を提出する$\boxed{\text{ために}}$…

ただし，この場合でも，不定の現在形は非過去形と同形で現れる．

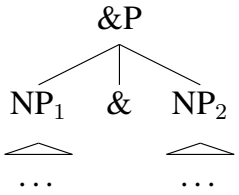
この問題に関しては，今後の課題としたい．

[38] 音便規則の詳細な検討を行った論文としては，MaCawley(1968)，Poser (1984)，佐々木 (2005)，Davis and Tsujimura (1991)，田川(2009)，Sawada (2007)等がある．

(32) &主要部の交替に関するパラダイム (tentative)
a. &↔ to /$X_{[+N]}$ ____
b. &↔ te/ _____ (default)

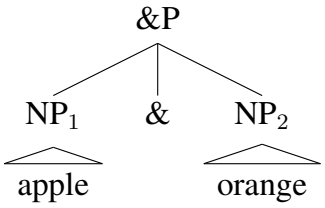
名詞句が&によって接続された場合に関しては (33) の構造を以下で示す[39].

(33) Syntactic Structure: Tentative



例えば， (34) の名詞句の等位構造では，NP_1 の位置には「りんご」，NP_2 の位置には「みかん」となる．

(34) a. りんごとみかん
b. Syntactic Structure: Tentative



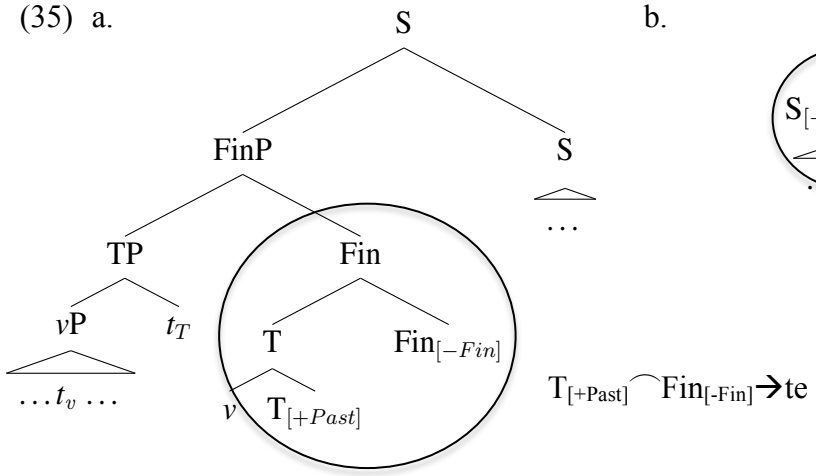
(34) の構造で SO が適用され，音韻部門では[$_N$ apple]と&が隣接することとなる．この線形順序に(32a) の規則が適用されて，&主要部の音声的具現化は「ト」として表出し，「りんごとみかん」の表示が得られる．

続いて，&主要部がテとして音声的具現化をうける場合を考える．テの出現要件としては，T 主要部に [+Past] の指定があり，且つ，Fin 主要部に [-Fin] の指定があることが要件であった．更に，前節で見た様に，本論文では並列関係解釈を導く「テ」とその他の解釈を導く「テ」を区別せずに，&の介在によりテが出現すると述べた．この二つの

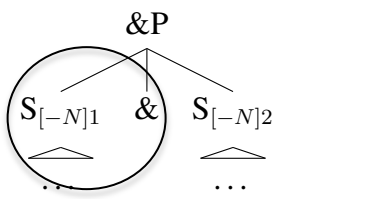
[39] 現段階では，&がどのような構造を持つかに関しては，問題とせず，二つの範疇を並置する構造を仮定する．ただし，この三つ又枝分かれ構造に関しては，併合 (MERGE) のメカニズムに反することになる事なる．この三つ又枝分かれ構造に関しては第 II 部第 1 章で修正を加える事とする．

環境を統合して考えた場合に，ここまでの議論では，樹形図を用いると，以下の (35a, b) の二つの環境をテの出現について設定したこととなる．

(35) a.

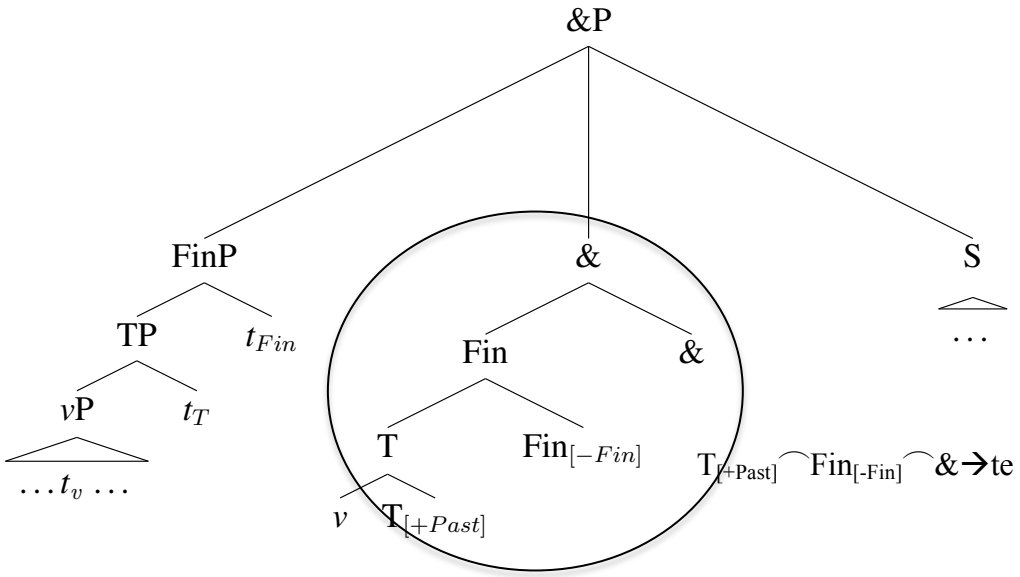


b.



この二つの仮定そのままでは，「テ」を導くための構造が二つ同時に存在しており問題となる．そこで， (36) の構造を想定することで，T 主要部の[+Past]， Fin 主要部の[-Fin]素性，&レベル主要部の介在の三つ要素間の関係性を捉える．

(36) Syntactic Structure :Tentative



テ形接続の意味の如何に関わらず，「テ」を一つ音声的具現化として捉える本論文では，テ形が並列関係解釈であっても，その他の解釈であっても，&主要部が出現を予測

する．また，&主要部に関しては本章の段階では三つ又枝分かれを許容すると仮定し，S_1，(ここでは，FinP) と S を接続する．Fin 主要部が [-Fin] 指定を受け，かつ T 主要部が[+Past]指定を受けている場合に「テ」が出現する環境が整うことも確認した．よって，ここでは，T 主要部，Fin 主要部，&主要部 (T*Fin*&) が形態的融合 (FUSION, MORPHOLOGICAL MERGER，あるいは LOWERING) によって融合し，一つの音声的具現化の適用を受けると考える．

ここでの議論は既に提出された (32) の「テ」の具現化に関わる規則の変更を求めるものではないことに注意されたい．一見すると，ここでは T⌒Fin⌒&→テというような語彙挿入規則を立てる必要があるかに思えるが，「ト」/「テ」の交替現象において問題となるのは「ト」が名詞句のみを接続する一方で「テ」に関しては範疇の指定がないということであった．つまり，「ト」に関して範疇を指定しておき，それ以外の場合は「テ」で接続するという (32) の規則は T⌒Fin⌒&の連鎖で，「テ」の挿入が予測可能である． (33) では，過去形のタ非過去形のル，テ形接続におけるテについての規則を再掲する．

(37) C-T レベルの競合

a. Past form	$T_{[+Past]}$-$Fin_{[+Fin]}$↔ ta
b. Non past form	$T_{[-Past]}$-$Fin_{[+Fin]}$ ↔ (r)u
c.	& ↔ to / $X_{[+N]}$_____
d.	& ↔ te / _____ (elsewhere)

4. &主要部の交替現象

本節では，テ形の接続関係についてのこれまでの分析を振り返り，Hasegawa (1996) の “non-incidental” 分析が受け入れられないという，Nakatani の主張を参考にし，Nakatani の提案する構造に対して，かきまぜ操作から経験的な問題を提示した．また，Yoda (2013) の提案に従い，動詞テ形の「テ」は，名詞句を接続する「ト」の異音であるととらえ，交替現象は，「タ↔ル↔テ↔ト」の間で生じることを新たに示した．

結論としては，テ形接続での「テ」の出現は T レベル要素，および，Fin レベル要素に加えて，&主要部の相互関係によって導かれることを示し，これらが，形成する T-Fin-& 複合主要部が交替に関わっており， DM のメカニズムで交替が適切に捉えられることを示した．

結果的には，DM のメカニズムである VI が日本語の経験的なデータから支持を得ることを記述したことにもなる．

第Ⅱ部：XP
−等位構造の統語的研究−

第 1 章
二節の接続
－連用形/テ形接続の等位構造と付加構造－

1. 問題の所在

等位構造に関する研究は Ross (1967) の「等位構造の島」の定式化による移動の制約に端を発し，Munn (1999), Johannessen (1996) 等に指摘される格に関わる問題等，多くの問題が提示されている．このような問題を解決するにあたって，第一に解決されるべき問題は「等位構造」とはどのような統語的な構造をもつのかという問題である．

本章では，「等位構造」とこれまでひとくくりにされて看過されてきた，英語の “and” のような，「要素と要素を接続する」タイプの文について構造を探ることを目的とする．

2. それは本当に等位構造？

本節では，等位構造に関するこれまでに提案されたアプローチを振り返る．「等位構造」という用語は，これまで多くの研究者によって，恣意的に用いられることが多く，“and” や “or” の様な，学校文法で「等位接続詞」と呼ばれる接続機能を持つ要素を介し

て節と節が接続する場合に「等位接続」と呼ばれてきた．だが，これまで考えられている，等位接続詞は必ずしも要素と要素を並列的 (SYMMETRIC) に，つまり，等位に関係づける訳ではなく，非並列的 (ASYMMETRIC) に，つまり，従属的に接続する場合があることは，周知の事実である．本章では，そのような等位接続詞によって接続される節に関して検討を行う．

以下の議論では，基本的には二節が接続された環境についての検討を中心に行うが，二つ以上の節が接続された場合でも，同様の振る舞いが見られる点に注意されたい．また，適宜必要がある場合には，二つ以上の節が接続された場合を例に挙げ議論する．

2.1. 等位構造の並列性

本 2.1.1 節では，二文が並列的に接続されていると考えられるデータの検討を行う．以下では，よく知られる抜き出しについての並列性を観察する．Ross (1967) では，(1) の様に，等位接続された等位項のうち単一の等位項の一部あるいは，全てに対して移動操作を適用すると，非文が導かれることが観察されている．

(1) a. *What$_i$ did you like [apples and t_i]?
b. *What$_i$ did you [drink wine and eat t_i]?

一方で (2) の様に，等位接続された等位項の両者から均等に要素に対して移動操作を適用すると，文法的な文が導かれる．

(2) a. What$_i$ did you like [t_i]?
b. What did you [drink t_i and eat t_i]?

(2) に見られる移動は，全ての等位項に対して「全域的に」移動の適用が行われているため，全域的移動 (ACROSS THE BOARD MOVEMENT: 以下 ATB-MOVEMENT) と呼ばれる．この移動に対する等位構造の並列性は，等位構造制約 (COORDINATE STRUCTURE CONSTRAINT: 以下 CSC) として， (3) に定式化される．また，ATB-movement に関しては，(4) として定式化される．

(3) In a coordinate structure no conjunct may be moved, nor may any element contained in a conjunct be moved out of that conjunct (Ross 1967: 89)

(4) [U]nless the same element is moved out of the conjuncts (Ross 1967: 89)

更に，Chomsky (1957)，Wiiliams (1978) では，等位構造を構成する二つの要素は統語的に同一の範疇である必要があると指摘されている (LAW OF COORDINATION OF LIKES).

(5) a. the scene [$_{PP}$ of the movie] and [$_{PP}$ of the play]
b. *the scene [$_{PP}$ of the movie] and [$_{CP}$ that I wrote]

従来から，ここまで見たような等位接続詞で並置された二つの要素は統語的に並行的な操作をうけ，かつ，範疇に関しても並行性が求められるという観察がされてきた．しかし，この並列性に関して問題となるデータが存在することが指摘されている．次節では，そのような並列性が保持されていない場合を見る．

2.2. 等位構造の非並列性

本 2.2 節では，等位接続詞で接続される二つの要素が並列的ではない場合を見る．範疇に関しての非並列性について振り返ると，Chomsky (1957), Williams (1987) で指摘された，等位接続した要素の間に並列性が存在するのかについては，非常に疑わしく，(6) の例が Sag et. al (1985) および，Zoerner (1995) によって指摘されている (範疇の提示および，括弧は筆者による).

(6) a. Pat has become [$_{N}$ a banker] and [$_{A}$ very conservative]. (Sag. et al 1985)
b. Robin is [$_{A}$ ugly], [$_{A}$ dolt] and [$_{P}$ of no help]. (Zoerner 1995)
c. [Robin's help] and that [(s)he gave it so willingly] delighted Kim (Zoerner 1995)

また， (3) の移動の制約でも，単一の等位項からの抜き出しであるように見える (7) の例が文法的である．この例は，単純に "and" 等の等位接続詞による二節の接続が等位接続を構築している訳ではないことを示している．

(7) How$_i$ much can you drink t_i and still stay sober?

このような CSC の適用を受けない等位構造は二節間に並行的な解釈が存在せず，(Ross 1967, Schmerling 1975, Lakoff 1986, Postal 1993, 1998, Sag et. al 1985, Culicuver and Jackendoff 1997 他) “and” に前接する節が，従属節的な機能を持ち，等位接続された A と B の間に，「A の後に B が起こる」あるいは「B は A の結果である」という意味が含意される場合である．更には，統語的な観点からも束縛関係 (BINDING) による代名詞の同一指示 (CO-REFERENTIALITY OF PRONOUN) ついて，等位接続詞によって導かれた節が従属節と同様の振る舞いをする場合がある[40].

(8) a. Another picture of himself$_i$ appears in the newspaper and Susan thinks John$_i$ will definitely go out and get a lawyer.
b. If another picture of himself$_i$ appears in the newspaper, Susan thinks John$_i$ will definitely go out and get a lawyer.
(Culicover and Jackendoff 1997: 201)

また，同一指示だけではなく，一般に， (9) の様に等位構造を持つ文では束縛変項 (BOUND VARIABLE) と，その先行詞 (ANTECEDENT) の間に c 統御関係が無く，認可されない． また，(10) のように， “and” に導かれる節が束縛変更の認可に関しても従属節的な振る舞いを示し，束縛変更を認可する例がある．

[40] ただし，(8)a) の例は時制の変換を行うと，文法性が下がることも同時に指摘されている．
(i) *Another picture of himself$_i$ has appeared in the newspaper, and Susan thinks John$_i$ will definitely go out and get a lawyer. (Culicover and Jackendoff 1997: 201)

(9) a. Every senator at the party thought that he would have no trouble getting elected.
b. *Every senator was at the party and he was worrying about getting elected.

(10) a. You give anyone$_i$ too much money and he$_i$ will go crazy.
b. If you give anyone$_i$ too much money, he$_i$ will go crazy.
c. You gave anyone$_i$ too much money and he$_i$ went crazy.
(Culicover and Jackendoff 1997: 204)

更に，Culicover and Jackendoff による重要な観察は，“and” によって接続された二節であるのにも関わらず，CSC によって，移動の制限が関わらない (11) の指摘である．

(11) a. ?This is the loot$_i$ that you just identify t_i and we arrest the thief on the spot.
b. ?This is the thief$_i$ that you just identify the loot and we arrested t_i on the spot.
(Culicover and Jackendoff 1997: 206)

(11) での要素の抜き出しは，完全に文法的ではないものの，一般的な等位構造からの移動による抜き出しと比較し非常に高い文法性を示す．(11) より顕著な例として，Culicover and Jackendoff は更に “both” を用いた等位構造との比較を (12) で挙げている．

(12) a. This is the senator that the Mafia pressured t_i and the senate voted for health care reform
b. *This is the senator that both the Mafia pressured t_i and the senate voted for health care reform.

(12) の例の存在は，等位構造である様に見える二つの節が，実際には，等位構造を為していない可能性を示唆している．

このように，等位接続の中には，一見すると等位構造を持っているかのように思われるが，実際には等位構造でははく，他の形式 (例えば，従属接続) で接続される二節が存在する．

3. 等位接続と付加：連用形

本節では，これまでの章で扱った接続関係を振り返り，連用形接続がある種の等位構造のような構造を持つと指摘する．以下では，連用形接続ついてその特徴を振り返り，連用形接続の類型を明らかにする

3.1. 連用形接続の類型

連用形接続には，第 I 部，第 1 章，第 2 章で指摘したように，下記の用法がある．

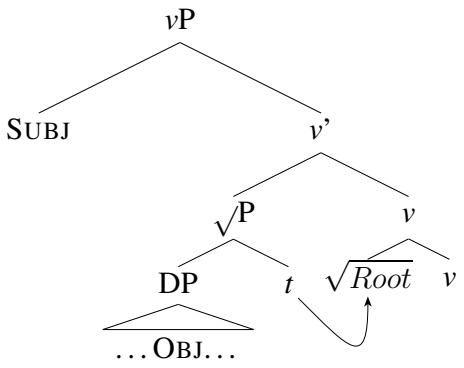
(13) a. [付帯状況]: コーヒーを飲み，編み物をした．
b. [時間的継起]: 駅前に先月スーパーができ，今月デパートができた．
c. [因果的継起]: 太郎は転び，膝を擦りむいた．
d. [並列関係]: この水槽には，鮪が居，あの水槽には烏賊が居る．

(13) のそれぞれの用法は，(13a) 「付帯状況」，(13b) 「時間的継起」 (13c) 「因果的継起」 (13c) 「並列関係」と呼ばれ．連用形節と文終止節の時間的依存関係が二つの節の接続の本質であった．ただし，(13d) の並列関係においては，例外的に時間的依存関係から解放される場合を指摘した．この場合，二節間の対照関係が成立している場合には，二節接続が文法的な接続として成り立つことに注意されたい (第 I 部，第 1 章も参照) .

3.2. 連用形の統語構造

本節では，連用形の統語構造について振り返る．連用形の構造は第 I 部第 2 章で既に議論した．よって議論の結論の要点だけを再掲する．連用形接続を詳しく検討すると節内では (i) 時間副詞の介在が可能，(ii) 主格主語の出現が可能，(iii) かき混ぜ操作が可能であるが主題を超えるようなかき混ぜは許さない，という三つの特徴を持つ．そして，これらの特徴を勘案すると連用形節は *v*P であることを示した．連用形の統語構造を (14) で再掲する．

(14) 連用形の構造



(14) のような構造を持つ連用形が文終止節と接続された場合にどのような構造を持つのであろうか，次節で検討する．

3.3. 連用形接続: 等位/付加

本節では，3.1 の連用形接続による複文構造の統語構造を探る．(13) の連用形節の示す四つの意味は狭義の統語論 (NARROW-SYNTAX) での併合操作の結果，形成されるものである．そこで，連用形節と文終止節の併合のタイプについて考える．ここでは，特定理論に依拠せず，併合のタイプを併合 (MERGE) /付加 (ADJUNCTION) の二つのタイプに分け[41]，単純に，併合は等位接続を形成するとし，付加は付加詞を形成すると仮定する．ここで，接続された二節が等位接続を形成するとすれば，2.1.1 で述べた等位構造制約の対象となるが，二節が付加詞節を形成するとすれば，日本語では一般にほとんどの場合には付加詞の島の形成はされないため，比較的自由な抜き出しが観察されることを予測する[42].

つまり，等位構造をなす連用形節と文終止節の場合，その両者は CSC の適用を受ける一方，付加構造をなす連用形節と文終止節の場合，連用形節が副詞的な付加詞を形成し，連用形節および文終止節からの抜き出しを許すことを予測する．ただし，ここでは，

[41] 併合に関しては多くの議論があり，どのようなメカニズムで併合が生じるのかについては，一致を見ていない．Chomsky (1995, 2001,2004, 2008, 2012)，Citko (2011a.b.)，藤田 (2012)，Fukui (2011)， Narita (2011, 2012)他等参照

[42] 付加詞の島 (ADJUNCT ISLAND)に関する議論は Boeckx (2008)，Chomsky (1995)，Lebaux (2009), Nishigauchi (1986, 1990, 1999), 三原 (1994), Richards (2001),他を参照.

連用形節からの抜き出しではなく，文終止節からの抜き出しを用いてテストを行なう．文終止節からの抜き出しを行なう理由は，第一に，日本語の付加詞の島の特性が明らかではないためであり，第二に，第 I 部第 2 章で議論したように，日本語の場合文の周縁部 (EDGE) を形成する要素が明らかでなく，連用形節からの抜き出しでは，移動された要素が連用形節から本当に抜き出されているのか否かが明らかではないためである[43]．では具体的に抜き出しの可否を見てみよう．

まず，付帯状況から観察する．連用形節の付帯状況では連用形で示される V_1 (以下では連用形動詞を V_1 と呼ぶ)，と文終止節の終止形で文を終える V_2 の時間幅 (TIME INTERVAL) が隣接するか，重なり合う必要性がある (第 I 部第 I 章参照) という原則があった．(15) では，学生が「息を切らす」事態と「山に登る」事態は同時並行的に生じていると考えられる．付帯状況の (15) で，文終止節からの抜き出しを観察すると，ニ格で標示される名詞句の抜き出しが文法的である．

(15) a. 学生たちが息を切らし，山に登った．
b. (?)山に $_i$，学生たちが息を切らし，t_i 登った．

併せて，V_1 事態と V_2 事態の時間が隣接している場合も確認する．

(16) a. その画家は川沿いに座り，画用紙に風景を描いた．
b. (?)画用紙に $_i$，その画家は，川沿いに座り，t_i 風景を描いた．

(16) が示すように，付帯状況を示す連用形節は，文終止節からの抜き出しを許す．

続いて，時間的継起および，起因的継起に関して観察する．これら二つの関係は，V_1 事態と V_2 事態の事態関係に関して「原因・理由」が読み込み易い場合には，起因的継起となるが，読み込みにくい場合には，時間的継起として解釈される．よって，二つの用法は語用論的な要因によって分化していると考えられ，同一の「継起」としてまとめて扱う．以下の (17) では V_1 事態が V_2 事態に先行して生じているものの，「電車に乗

[43] 連用形節での抜き出しの議論は Yoda (2009) でも行われている．Yoda (2009) では，本章で採用する構造とは異なる構造を仮定し，連用形節，テ形節，「終止形+そして」に導かれる節での抜き出し (EXTRACTION)，否定対極表現 (NEGATIVE POLARITY ITEMS)，主語尊敬化 (SUBJECT HONORIFICATION) に関する詳細な検討が行われており，本論文と同様，連用形節/テ形節が付加構造を取り得る事を指摘している．

り遅れた」ことが生じた後に「会議に遅刻した」という時間的前後関係と同時に，「電車に乗り遅れた」ことが理由で「会議に遅刻した」という起因関係も容易に読み込める．この場合も，付帯状況と同様に，ニ格標示される名詞句の抜き出しは文法的である．

(17) a. 新入社員が電車に乗り遅れ，会議に遅刻した．
b. (?) 会議に $_i$，新入社員が電車に乗り遅れ，t_i 遅刻した．

最後に，並列関係を観察する．並列関係は，V_1 事態，V_2 事態が時間的依存関係をなすことが文法的な文の要件であることを既に見たが，時間的依存関係を持たない場合においても，連用形節および文終止節の間に対照関係が読み込める際には，文法的な文を導くことを指摘した．(18) は V_1 事態，V_2 事態が同時に生じている可能性もあり，かつ，連用形節の「自宅」と文終止節の「下宿先」に対照解釈が生じている可能性があるが，そのいずれの解釈においても，二文は並列関係として読み込める．この場合に，文終止節からニ格で標示された名詞句を抜き出すと，付帯状況，継起とは異なり，顕著な文法性の低下を導く．

(18) a. 太郎は，自宅に文鳥を飼い，下宿先にネコを飼っている．
b. * 下宿先に $_i$，太郎は自宅に文鳥を飼い，t_i ネコを飼っている．

この用法間の抜き出しに関する文法性の違いは，先に述べたように，その構造が等位構造をなすのか或は付加詞をなすのかの違いに起因すると考えられる．つまり，連用形節では，付帯状況，(時間的/起因的) 継起用法は「付加詞」として一つの類型をなし，並列関係は「等位構造」としてもう一つの類型をなすと結論付けられる[44]．

[44] この主張は，一見すると本論文第 I 部第 1 章での連用形節の議論と矛盾を来すと思われるかもしれないが，第 I 部第 1 章で扱った連用形に関する議論は久野 (1973, 1976) であげられる連用形接続とテ形接続のみを射程とした物であり，そこで扱われる連用形接続は本章の「並列関係」に限られている．よって，本章の内容と第 I 部第 1 章の間の議論に矛盾は生じない事に注意されたい．

4. 等位接続と付加: テ形接続

本 4 節では，テ形接続に関して，前 3 節で行った議論と同様の観点の議論をテ形について行う．テ形節の構造の断定に関しては，以下と同様の分析が既に内丸 (2006), Yoda (2009)，三原 (2010)，吉永 (2012)，等によって行われおり，詳細はある程度明らかとなっていると言えよう．以下では，先攻研究での知見を踏襲しつつ，テ形接続の本質を明らかにする．

4.1. テ形接続の類型

テ形接続には，第 I 部，第 1 章で指摘したような下記の用法がある．ここで第 I 部第１章の議論を振り返る．

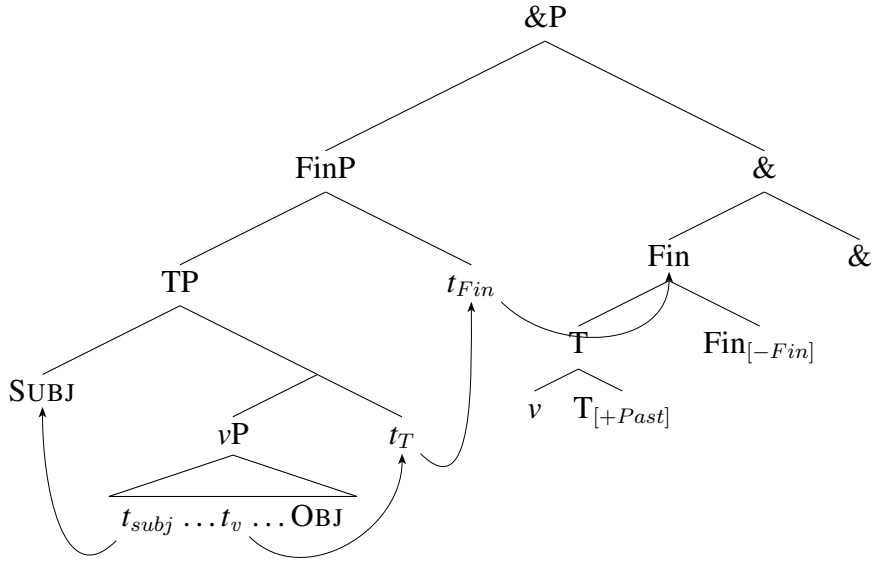
(19) a. [付帯状況]: 直人は腕を組んで，黙っていた．
b. [時間的継起]: 封を切って，手紙を読んだ．
c. [起因的継起]: 美穂はメモを忘れて，困った．
d. [並列関係]: 男子学生は奈良へ行って，女子学生は京都へ行った．

(19a) は「付帯状況」と呼ばれ，テ形節のテ形述語 V_1 (以下 V_1) の事態，文終止節の終止形述語 (以下 V_2) で示される事態の間には，「V_1 事態が V_2 事態以前に生じ，かつ V_1 は V_2 事態の付属的事態」であるという関係が見られる．(19b) は「時間的継起」と呼ばれ，V_1 事態は V_2 事態の前提となっており，V_1 事態，V_2 の事態は，時間的な前後関係によって接続されている．(19c) は「起因的継起」と呼ばれる，(19b) と同様に，V_1 事態が V_2 事態の前提となり，V_1 事態は，V_2 事態の原因として解釈される．ただし，ここでも連用形の場合と同様時間的な前後関係は「原因・理由」とも取れる場合があり，二つの用法の区別は語用論的に行われると考える．よって，この二つの用法を一括りに「継起」用法として議論する．続いて，(19d)は，「並列関係」と呼ばれる．この場合，V_1 事態が，V_2 事態と並行的に生じている．

4.2. テ形の統語構造

本節では，テ形の統語構造について振り返る．テ形の統語構造のあらましに関しては既に第 I 部第 3 章で議論した．ここでは，再度テ形の構造の議論はせず，要点だけを再掲する．第 I 部第 3 章では，テ形節の内部には，(i) 時間副詞，(ii) 主格主語の認可，(iii) かき混ぜ操作が可能であることを示した．この (i)-(iii) の特徴は連用形節と同様に見られる特徴である（ただし，テ形節では連用形で許されない主題要素を超えたかき混ぜを許す）．テ形節が連用形節と大きく異なる点は，第 I 部第 1 章で述べたように，「テ形節」の本質が，文終止節の事態よりも，以前に起きた事象を示すこと (三原 2011a, b) であった．よって，テ形節は連用形節よりもより大きな投射であり，時間関係を示す投射を含む (20) の構造を持つと考えられる[45].

(20) テ形の構造 : Tentative



次節では (20) の構造をもつテ形節が文終止節と接続された場合，どのような構造を持つのかについて検討する．

[45] ただし，第 I 部第 3 章では三つ又枝分かれ構造を採用した．本節でも，三つ又構造を仮定するが，三つ又枝分かれ構造は併合理論の理論的帰結を勘案すると採用する事ができない．この&P による接続は既に Yoda (2012) によって議論され，二股構造が提案されている．詳細に関しては本章 6 節で述べる事とし，ここでは，説明の便宜上三つ又構造を採用しておく．

4.3. テ形接続: 等位/付加

続いて本節ではテ形節と文終止節に関して，3.3 節と同様にテ形節からの移動が 2.1.1 節で挙げられる制約の適用を受けるか否かについて確認する．ここでの移動は，3.3 節で述べた理由から全て文終止節からの移動に限る[46].

まず，付帯状況から確認する．付帯状況では，V_2 事態に先行して V_1 事態が生じ，且つ V_1 事態は V_2 事態の付随的な事態を示す．(21) では，V_1 の「ゴミを拾う」事態は，V_2 の「行きつけの店に挨拶をする」事態より時間的に先行し，かつ V_1 が V_2 に付随的に生じている例である．

(21) a. ボランティアがゴミを拾って，行きつけの店に挨拶をした．
b. (?)行きつけの店に $_i$，ボランティアがゴミを拾って t_i 挨拶した．

(21) では，ニ格で標示される名詞句が文終止節から文頭に移動している．よって，CSC の適用を受けていないため，付帯状況が付加詞であることを示す．

---

[46] 内丸 (2006)および，吉永 (2012)では，移動に関して疑似分裂文の派生を用いているが，日本語の疑似分裂文が移動を伴って派生されるのかについては，議論の余地があるかと思われる．また，内丸/吉永ともに，移動に関して以下のような移動が前提にあるようである．

(i) [S ~~[XP …]~~ [XP …]] [XP …]だ．

(ここでは移動前の位置を−によって削除する形で示した)

ただし，このような移動が純粋に (3) の等位構造制約の適用による非文法性を示しているかは慎重な議論が必要である．その理由としては，等位構造制約は以下のような二つの下位部分から形成されている事が知られているためである (cf. Grosu 1973, 1981, Marchant 2001, Kato 2010).

(ii) a. 等位項の内部の要素の抜き出しを禁じる制約
b. 等位項自体の抜き出しを禁じる制約

(iib) に関しては，[A & B]という統語構造において，&が選択する A/B のうちの一つが欠けることにより，PF で&の選択が満たされていないことによる非文法性である可能性を排除できないためである．以下の例参照されたい．

(iii) a. *Which books did Bob read *t* and t?
b. *I wonder who you saw *t* and a picture of *t*
c. *I wonder who you saw a picture of *t* and *t*.

上記の例は全て等位項の抜き出しにより，PF レベルで等位接続詞による選択が満たされていないために生じており，(iv) の様な独立した原則により導かれる非文法性である可能性がある．

(iv) Null Conjunct Condition (Grosu 1981: 56)
Conjuncts may not be phonetically null.

よって，本論文では，等位項自体の抜き出しに関する議論はせず，等位項の内部からの抜き出し，特に，「が」や「を」以外の等提示機能 (ABOUTNESS:三原 1994) による焦点化が引き起こされにくい「に」のかき混ぜの例のみに言及する．

次に，継起のテ形節からの抜き出しを観察する．既に述べたように，継起のテ形節は，「時間的継起」と「因果的継起」に下位区分できるが，本論文では，その区別をしない (cf. 三原 2011a, b)．それでは抜き出しについて観察しよう．

(22) a. 多くの客がエスカレーターに乗って，二階に上がった．
b. (?)二階に $_i$，多くの客がエスカレーターに乗って，t_i 上がった．

継起のテ形接続に関しても，付帯状況のテ形と同様に，主節からの移動が可能である．(22) では V_1 の「エスカレーターに乗る」事態が生じた後に V_2 の「二階に上がる」事態が生じていると考えられ，二つの V_1, V_2 事態の間には時間的継起関係がある．併せて，因果的継起の例を (23) で確認するが，結果は同様で，継起解釈のテ形節からの抜き出しは顕著な文法性の低下を示さない．よって，継起用法も付加詞である．

(23) a. 選手は休養を告げられて，宿舎に戻った．
b. (?)宿舎に $_i$，選手は休養を告げられて，t_i 戻った．

最後に，並列関係のテ形節について移動の可否を考える．並列解釈では，V_1 事態は V_2 事態と同時並行的に生じる解釈が可能で且つ，二つの接続された節である種の対照的な解釈を生じる．

(24) a. 学生が講堂に集まって，教職員が会議室に集まった．
b. *会議室に $_i$，学生が講堂に集まって，教職員が t_i 集まった．

(24) に見られる様に，並列解釈のテ形接続では，文終止節からの移動による文法性の著しい低下が見られる．(21) − (24) の事実を勘案すると，テ形節が付加構造と等位構造の二つの構造をもち，意味の相違は構造が導きだしていると結論できる．

5. 更に日本語の等位構造と付加構造

2 節から 4 節までで，連用形接続とテ形接続が等位構造と付加詞の間で，曖昧であり付加構造と等位構造という構造的差異により，表出する意味の異なりが生じることを示した．連用形接続/テ形接続に共通して，付帯状況，継起を示す連用形節/テ形節は付加詞を構成し，並列関係は等位構造により構成されると一般化した．

また，この付加構造と等位構造の区別に関しては，接続される二つの節の事態関係の相互交替可能性 (INTERCHANGEABILITY) からも支持される．以下で見られるように，付加構造の付帯状況および継起用法では，連用形節/テ形節で述べられる事態と文終止節で述べられる事態の順序を交換した場合文法性の低下あるいは，意味の変化が生じる．しかし，等位接続の並列関係では，その関係性に変化が生じない (cf. 吉永 2012).

以下は付帯状況の例である．付帯状況では V_1 事態と V_2 事態を入れ替えた場合に，意味の違いが生じる．

(25) 連用形接続の付帯状況
a. 学生たちは息を切らし，山に登った．
b. 学生たちは山に登り，息を切らした．

(26) テ形接続の付帯状況
a. 学生たちは息を切らし，山に登った．
b. 学生たちは山に登って，息を切らした．

連用形節，テ形節ともに，前後入れ替えても非文法性は導かれないが，(25a) − (26a) の例では，連用形節/テ形節が山に登るを修飾する様態副詞として働く一方，(25b) − (26b) では連用形節/テ形節は継起解釈を生じさせる．

同様に，継起解釈についても V_1 事態と V_2 事態の入れ替えにより意味の変化が生じる．

(27) 連用形接続の時間的継起
a. 新入生は鞄を持ち，家を出た．
b. #新入生は家を出，鞄を持った．

(28) テ形接続の時間的継起
a. 新入生は鞄を持って，家を出た．
b. #新入生は家を出て，鞄を持った．

(27a)，(28a)と(27b)，(28b)をそれぞれ比較すると，b の文は談話上座りが悪くなる．これは，通例「鞄を持つ」事態は「家を出る」事態に先行して起こるべきで，家をでてから鞄を持つ事態が想定し難いことから生じると考えられる．

更に，(29) や (30) のような因果的継起の場合には，意味の違いはより顕著である．

(29) 連用形接続の因果的継起
a. 娘が転び，膝を擦りむいた．
b. #娘が膝を擦りむき，転んだ．

(30) テ形接続の因果的継起
a. 娘が転んで，膝を擦りむいた．
b. #娘が膝を擦りむいて，転んだ．

最後に，並列関係について観察する．並列関係は，二節が並列的に接続されており，二つの節の順序関係に関わらず，コンテクスト上も文法的な文となると予測する．(31) − (32) では，並列関係を読み込み易い様に状態動詞を用いて作例した．

(31) 連用形接続の並列関係
a. 男子生徒はプールの中に居，女子生徒はプールサイドに居た．
b. 女子生徒はプールサイドに居，男子生徒はプールの中に居た．

(32) テ形接続の並列関係
a. 男子生徒はプールの中に居て，女子生徒はプールサイドに居た．
b. 女子生徒はプールサイドに居て，男子生徒はプールの中に居た．

(31) − (32) は予測の通り，並列関係において等位項の順序の入れ替えが意味に関して何ら関与しないことを示しており，並列関係の接続が等位構造を持つことを更に支持している．

6. 等位接続を導く構造

ここまでで，連用形接続/テ形接続ともに，等位接続と付加が存在することが明らかになったが，どのように等位接続が文終止節と構造的な関係を持つのかについては，考

えて来なかった．本節では，等位構造に関わる統語的な諸制約を確認し，同時に 3 節から 5 節までの議論を踏まえ，連用形接続とテ形接続の文終止節との構造的関係を明らかにする．

6.1. 何と/で何を接続するのか

Haspelmath (2000) によれば，世界の諸言語を見ると，等位構造によって接続される等位項となる要素の選択には制限があり，無規則に二つ (ないし，それ以上) の要素の接続はできないという．既に，2.1 節で確認したように英語を始めとした諸言語では，同一の (文法) 範疇 (GRAMMATICAL CATEGORY) の接続に加え，(33) − (34)の様に異なる範疇の接続が可能である．

(33) English
a. Mr. Hasegawa is [$_{NP}$ a legal wizard] but [$_{AP}$ expensive to hire].
b. She left [$_{AP}$ quite happy] and [$_{PP}$ at ease] in her new office.
c. There will be typology conferences [$_{PP}$ in August] and [$_{NP}$ next April].
d. [$_{NP}$ His kindness] and [$_{S}$ that he was willing to write letters to me].
(Haspelmath 2000: 18)

(34) a. Maltese
harbu [$_{ADV}$malajr] [$_{PP}$bil-mohbi] u [$_{S}$malli setghu].
escape.PF. 3PL quickly with-stealth and when can.PF.3PL
“They escaped quickly, stealthily and as soon as they could.”
(Brog & Azzopardi-Alexander 1997: 81)

b. Italian
La situazione [$_{AP}$meteorologica] e [$_{PP}$del traffico] è buona.
the situation meteorological and of the traffic is good
“The weather and traffic condition is good” (Scorretti 1988: 246)

(33) − (34) の等位接続の例では，接続される要素は統語的範疇で一致していない．しかし，意味役割 (SEMANTIC ROLE) では一致が見られるという．英語では以下のように，範疇の一致にも関わらず，意味役割の不一致による等位接続の非文法性が観察される．

(35) a. *Ms. Poejosedarmo bought a book [$_{PP}$ in Penang] and [$_{PP}$ in the spring].
b. *I still smoked [$_{NP}$ last year] and [$_{NP}$ cigarettes].
c. *[$_{S}$ Go home] and [$_{S}$ are you hungry]?
(Haspelmath 2000: 18)

また，(36) − (37) の韓国語 (Korean) や，トルコ語 (Turkish) では等位接続される文法範疇によって，等位接続詞の音形 (VOCABULARY/(PHONOLOGICAL) EXPONENT) が異なる場合も報告されている．

(36) a. Korean NP-coordination
[$_{NP}$ yenphil] -kwa congo
pencil and paper
"pencil and paper"
b. Korean VP-coordination
Achim [$_{VP}$mek] -ko hakkyo ka ss eyyo
breakfast eat and school go past decl
"I ate breakfast and went to school."
(Haspelmath 2000: 19)

(37) a. Turkish NP-coordination
[$_{NP}$Hasan] -la Amine
Hassan and Amine
"Hasan and Amine"
b. Turkish VP-coordination
Čocuk bir Kasık čorba [$_{VP}$al] ıp ič-er
child one spoon soup take and eat
"The child takes a spoon of soup and eats."
(Haspelmath 2000:19)

日本語の等位構造では，韓国語 (Korean) やトルコ語 (Turkish) 等のように，等位接続される範疇により，等位接続詞の音形が異なる．日本語の名詞句の接続では「ト」が，動詞句の接続では連用形/テ形が用いられる．

(38) a. [$_{NP}$りんご]{と/*て/ø}[$_{NP}$みかん]
b. [$_{AP}$安く]{*と/て/ø}[$_{AP}$うまい]
c. [$_{VP}$食べ]{*と/て/ø}[$_{VP}$飲む]
d.* 大阪 [$_{PP}$から]{と/て/ø}[$_{PP}$まで]

ただし，日本語では，前置詞のみの等位接続は文法性の低下を示す．また，ここでは，第 I 部第 3 章で議論した様に，ト/テの間の交替は，(39) の様に前接する要素の文法範疇により引き起こされる．

(39) a. &↔ to / $X_{[+N]}$ ____
b. &↔ te / ____ (ELSEWHERE)

また，(40) の様に日本語は，等位接続される要素に対して，英語やイタリア語 (Italian) が持つ制限よりも厳しい制限が有り厳密に同一カテゴリー以外の等位接続は認められない．

(40) a. *[$_{NP}$ りんご]と[$_{AP}$ 大きい]
b. *[$_{NP}$ りんご]と[$_{VP}$ 走る]
c. *[$_{VP}$ 食べ]{て/ø}[$_{NP}$ 本]
d. *[$_{VP}$ 食べ] {て/ø} [$_{AP}$ 大きい]
e. *[$_{AP}$ 速く] {て/ø[47]} [$_{VP}$ 走る]
f. *[$_{AP}$ 大きく] {て/ø} [$_{NP}$ 学校]

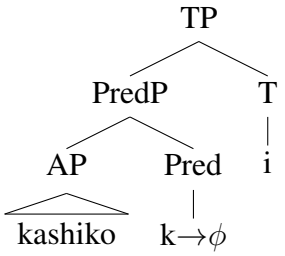
このように日本語では，異範疇の等位接続は不可能であり，範疇の一致 (CATEGORIAL ISOMORPHISM) が等位接続される要素に課される条件であると分かる．

ただし，(41) の様な例もあり，この例が範疇一致の例外と考えられる可能性もある．

(41) a. 太郎は[$_{NP}$ 学生]で[$_{AP}$ 賢い][48]

(41) の例では，一見すると，名詞句の「学生」と形容詞句の「賢い」が接続されている様に見えるが，この例は実際には例外にはならない．日本語の形容詞は Nishiyama (1998) らの分析によれば，内部構造は (42) のような構造を持つされ，内部に述語コピュラ (Copula) の/k/ が存在する．

(42)



(cf. Nishiyama 1998: 76)

[47] [$_{AP}$ 速く] ø[$_{VP}$ 走る]については，”He runs fast”の意味では文法的な文となるが，この意味では等位構造とは言えないだろう．なぜならば，「速い」と「走る」が等位構造をなしているのであれば，「太郎が速く走る」という文では「太郎が速い」事と「太郎が走る」事を意味する必要があるが，この場合には「走る」様態が「速い」と解釈される．

[48] (41) の例は，FAJL 6 の匿名査読者から頂いた．感謝申し上げたい．

また，(41) で名詞句に後接する「デ」は，音便現象で見られるテの異形態ではなく，「デ」はコピュラの「ダ」の連用形と考えられる．連用形であれば，後接要素に顕在的な接続詞の介在無しで接続できる．よって，ここでは (41) の例は VP の等位構造であると考える．このように，日本語の等位接続は同一範疇のみ等位接続が可能である．

名詞句の接続に関しては「ト」が，テ形節では「テ」が&主要部の音形であると主張した．それでは，連用形の接続の場合はどのようなメカニズムにより等位構造が導かれるのであろうか．この問いに関して，本論文では連用形接続に関しても，テ形接続と同様に&の主要部が介在すると主張する[49].

6.2. 日本語の等位構造

本節では，連用形接続とテ形接続が文終止節とどのような構造的関係を持つかを検討する．これまで，等位構造については大別して，(i) 等位接続詞が主要部をなさずに平板的に等位項を結合する，(ii) 等位接続詞が主要部を形成する &P を仮定する，そして，(iii) 幾つかの異なる等位項がそれぞれ異なる領域で形成され，それぞれの平面がある一点を共有することで，等位節を構成しているという三つの分析が提案されている (Goodall 1986, Munn 1993. Zoerner 1995, Johannssen 1996, 1998, Citko 2011a,b, Nunes 2001, 2011 他).

二つの等位項の間の構造関係としてまず問題になるのは，二項間の階層関係である．まず，英語の例を確認しよう．Collins (1988a, b) および，Munn (1993) によれば等位接続された名詞句において，束縛条件 (C) に関する (43) が提示されている．(43) のデータ

[49] Hapselmath (2000) および Stassen (2011) によれば，等位接続あるいは前置詞等の介在なく，要素を接続する言語は非常にまれであると述べられており，等位接続のマーカーを用いない多くの言語での等位接続は，イントネーションによって等位接続であることが示されるという．日本語の場合，顕在的な等位接続のマーカーを持たない連用形接続と，テ形接続の両方を持っている．連用形接続が等位接続マーカー無しで等位接続を導くのであれば，連用形接続がテ形接続と異なるイントネーションを採用する事を予測するがそのような事実はない．

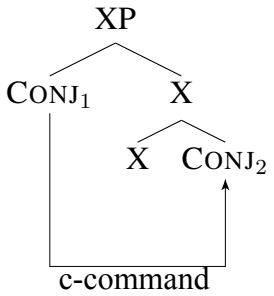
このような観点から，連用形接続は，&主要部を統語的に持っているが，その形態が表層に現れていないと本論文では考える．

が示すことは一つ目の等位項 ($Conj_1$) が二つの目の等位項 ($Conj_2$) に対して，階層上で，下の振る舞いをするということである．

(43) a. John'$_i$s dog and he$_i$/him$_i$ went for a walk.
b. * He$_i$/him$_i$ and John$_i$'s dog went for a walk.

(43a) の様に，指示表現 (R-EXPRESSION) の "John" が代名詞等に c 統御されていない場合には，文法的な文が導かれる．しかし，指示表現が，代名詞に c 統御された場合には，非文法的な文が導かれる (束縛条件 (C) 違反)．この文法性の違いによって，二つの等位項の間に $Conj_1$>$Conj_2$ の構造的支配関係があると言える．この束縛関係により，英語の等位構造 (44) が導かれる[50].

(44)



続いて，日本語の例を確認しよう．Kasai and Takahashi (2001) によれば，日本語では，(45a) に示されるように，第一等位項の指示表現が，第二等位項の代名詞を束縛している (束縛条件 (A))．よって，二つの等位項の間に $Conj_1$>$Conj_2$ の構造的支配関係があると言える．

[50] ただし，英語の等位接続された名詞句が束縛条件に合致するのか否かについては，Progovac (1998) からの反論がある．(44)の構造に従えば，$Conj_1$ は常に $Conj_2$ を c 統御する関係にある事になる．しかしながら，Progovac によれば，英語では以下の例が許容されるという．

(i) John and John's wife are certainly invited.

もしも，$Conj_2$ 内部の John が束縛条件に従う指示表現であるとすると，$Conj_1$ の指示表現によって束縛されており，(ii)と同様の非文法性を導くはずである (Progovac によれば，(ii)の容認度はかなり低いという)．

(ii) ?*John certainly likes John's wife.

この文法性判断の違いにより，(i)で $Conj_1$ が Conj2 を支配しているのかは詳細な検討が必要と述べている．しかし，この束縛条件 (C) に関しては再検討の必要がある事が，既に三原・平岩 (2006) によって指摘されている．よって，筆者には，ここでの Progovac の批判が当該現象に関してどれだけ重要な問題的となるかは現時点では判断できない．この問題は，今後の課題としたい．

(45) a. ジョン$_i$と彼自身$_i$の母親が学校に行った.
b. *彼自身$_i$の母親とジョン$_i$が学校に行った.
(Kasai and Takahashi 2001: 21)

ただし,「彼自身」が束縛条件 (C) に関わるのか否かに関しては,三原・平岩 (2006) において詳細な議論が展開されており,問題の解決を見ていない.よって,ここでは,Kasai and Takahashi の例を改変し,束縛変項の例を用いた等位接続の例を再掲する.

(46) a. 三社以上の会社$_i$とそこ$_i$の労働組合が賃金について争った.
b. *そこ$_i$の労働組合と三社以上の会社$_i$が賃金について争った.

(46) では,「三社以上の会社」が束縛変更の「そこ」を束縛している場合のみ,文法的な文であり,その逆は非文法的である.よって少なくとも日本語では $Conj_1$ が $Conj_2$ を支配し,構造上高い位置にあることが保障できる.

ここまでは,名詞句と名詞句の等位接続の構造について観察した.続いて,連用形接続および,テ形接続における等位接続の構造について観察する.

理論的な側面から考えた場合に,名詞句と名詞句の等位構造が,節と節の等位構造と異なる構造を取るとは考え難いが,念のため節と節の束縛に関するデータを考える.ここで節の構造を考える理由は,連用形接続/テ形接続が「並列関係」以外でつながれた場合には,束縛に関わらない可能性があるためである.この点に関しては既に,Culicover and Jackendoff (1997) において,英語に関するデータが提示されている (2.1.2 節参照).それでは,連用形節とテ形節に関して束縛条件に関するデータを観察しよう[51].

[51] 一般的に,束縛条件は文内に課される条件であり,文を超えた場合には,束縛条件の適用外とされる事が多い.しかしながら Hoji (1995) では,ソ系列の指示詞がいわゆる E-代名詞 (e-type pronoun: Evans 1980) と類似した Dem-binding を誘引することが指摘されている.例えば,ロバ文 (donkey-sentence) 等の例をみると,数量詞や,接続詞等によって導かれる節では,その節全体が間接的に後に現れる代名詞を束縛することが可能である場合がある (Haïk 1984).例えば,以下の (ia) では, “donkey”が関係節内に生起しており,階層的には “it” を適切に束縛することができない.しかしながら, “donkey”と “it” の間には同一指示解釈が得られる.この場合,a donkey that x owns (x=everyone).という意味解釈が成立しており,“everyone” が間接的に “it”を束縛 (indirect binding) 可能で,結果的に “everyone who owns donkey” と “it” との束縛関係を介し,“donkey”が “it” を束縛できるという.(ib) の場合も同様に, “if” によってまとめられる節が,束縛変項の “it”を間接束縛しており, “donkey”と “it”の間の束縛関係が成り立つという.

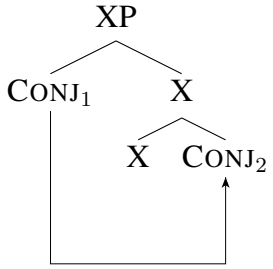
(i) a. Everyone who owns a donkey$_i$ beat it$_i$.
b. If Max owns a donkey$_i$, he hates it$_i$.

(47) a. 三つ以上の研究室の教授が学長を批判{し/して}，(それを聞いた)，そこの院生も研究科長を批判した．
b.*そこの院生が研究科長を批判{し/して}，(それを聞いた)三つ以上の研究室の教授が学長を訴えた．

(47a) では，一つ目の等位項に存在する「三つ以上の研究室」が二つ目の等位項に存在する「そこ」に対して間接束縛を介して束縛している解釈がある一方で (47b) では，「そこ」が「三つ以上の研究室」によって束縛される解釈が存在しない．よって，(47a, b) の二文の文法性の差異が $Conj_1$>$Conj_2$ を示すと言える．

この束縛関係から，日本語の等位構造も，英語の等位構造と同様に，(48) (= (44) の再掲) の構造を示すと言える．

(48)



6.3. 主要部後置型言語の等位構造

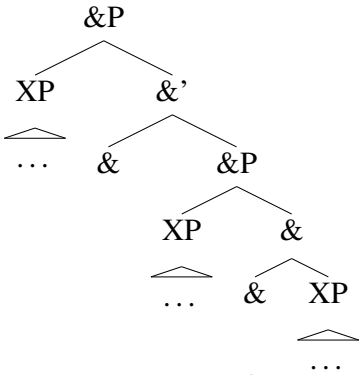
本節では，完全主要部後置型 (ABSOLUTE HEAD-FINAL LANGUAGE) である日本語の等位構造について観察する．これまでの標準的な分析では，日本語は主要部後置言語であり，主要部後置性は等位接続においても保持されると考えられている．そして，等位接続された二つ目の等位項に関しては，左側の指定部位置に生起する要素であると分析されてきた (Zoerner 1995, Johannessen 1996, 1998)．しかし，日本語では，これまでに右側の指定部を用いる統語操作は等位構造以外なく，等位構造にだけ特異な操作として右側の指定部を利用する構造を利用することは，極小理論 (MINIMALIST PROGRAM) の観点から問題のある仮定 (AD-HOC ASSUMPTION) である．よって，本節では，これまでに提案された

Hoji (1985) を示し，御教授くださった青柳宏先生に感謝申し上げる．

分析を振り返り，問題点を提示し，主要部後置型言語の等位構造について新たな構造を提案する．

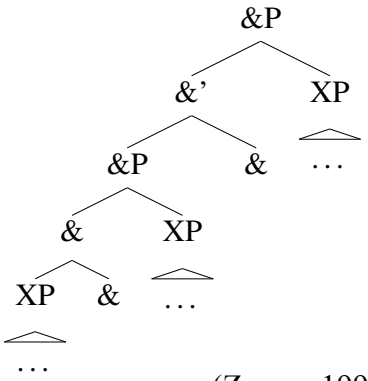
まず Zoerner (1995) での主要部後置型言語の等位構造の分析を検討する．Zoerner は (49) の構造を提案しており，等位構造にも Laroson (1988) の VP 殻 (VP-SHELL) 分析と同様，日本語の等位構造も &殻構造 (&-SHELL STRUCTURE) を持つ構造を提案している．

(49) a.主要部前置型言語



(Zoerner 1995: 24)

b. 主要部後置型言語



(Zoener 1995 :33)

Zoerner では (49) で挙げられる&殻構造は次の議論から支持されると述べている．(50) の様に，英語で等位項が複数回生じることができる．Zoerner の議論によると，等位項が二つ以上現れることを可能にするためには，統語構造上での位置が必要になると考え，それらの位置を確保するために，殻構造を提案する．

(50) English
a. Robin, Kim and Terry ate a turnip.
b. Robin and Kim and Terry ate a turnip.
c. Robin reads books, magazines, plays, and poems.
d. Robin reads books and magazines and plays and poems.
(Zoerner 1995: 23)

また，英語では顕在的な等位接続詞の欠落が非文法的な文を導くため，それぞれの等位項が&主要部を要求していると考えている．

(51) English
a. *Robin and Kim, Terry, ate turnip.
b. *Robin reads books and magazines, plays poems.
c. *Robin reads books and magazines, plays, poems.
d. *Robin reads books, magazines and plays, poems.
(Zoener 1995: 23)

(50) および，(51) の，英語では，複数回にわたり等位接続詞が生起することが可能であること，等位接続詞は最後の等位項の直前に出現する必要があることという二点から，英語の等位構造が (49a) の構造を持つと主張する．

更に，(52)の例で示される “and” の発音的省略形 “n” が “and” と混在して出現することが非文法性を導くことから，殻構造をもつ下の & 主要部と上の &主要部が同一の要素であることを主張する．

(52) English
a. Robin and Kim and Terry.
b. Robin ‘n’ Kim ‘n’ Terry.
c. *Robin and Kim ‘n’ Terry.
d. *Robin ‘n’ Kim and Terry.
(Zoerner 1995: 28)

Zoerner は日本語の等位構造にも言及する．日本語でも英語と同様に等位接続詞「ト」が名詞句と名詞句の間に現れ ((53a))，等位接続される最後の名詞句に後続する「ト」の出現が随意的であるを指摘している (53a, c) .

(53) Japanese
a. ロビンとキムとテリーが…
b. ?*ロビン，キムとテリーが…
c. ロビンとキムとテリーとが…
(Zoerner 1995: 32)

また、日本語の「『ト』が各名詞句の間に存在すること」が，&主要部の複数回生起を更に支持しているという．また，(53a) が示すように，最後の等位項にはトの出現が義務的でないことも，右側の指定部に最終等位項が生起している (49b) の構造を示す根拠であると主張する．

Zoener の主張する&殻の分析に関しては日本語および，英語の等位接続詞の出現に関する特性を表層的には捉えていると言えよう．しかしながら，Zoerner の仮定をそのまま採用することはできない．なぜなら，先に述べた様に，少なくとも日本語に右側指定部の存在を積極的に仮定する根拠が存在しないからである．

続いて，Johannessen (1996, 1998) の等位構造に関する主張を振り返る．等位接続された，名詞句が，通常の規範的な一致を伴わず，表層に出現する場合がある[52]．この事実は既に多くの研究によって指摘されている (McClosky and Hale 1984, McClosky 1986, 1989, van Oirsouw 1987, Munn 1993, 1996, Benmamoun 1992, Aoun, Benmamoun and Sportiche 1994, Johannessen 1996, 1998, 等)．Johannessen は，この特異な一致現象について 32 の言語の等位接続を調査し，等位接続された名詞句の格の具現化について (54) の様に類型論的結果をまとめている．

(54) Johannessen's Correlation

> "There is very strong correlation between, on the one hand, the order of verb+ object, and on the other, that of normal conjunct + deviant conjunct (usually the same as that between conjunction + deviant conjunction)"
>
> (Johannessen 1998: 55)

(54) に挙げた一般化から，主要部前置言語 (HEAD-INITIAL LANGUAGES) では，等位構造が (55a) の構造を持つと主張する．

(55a) の構造では，&P 指定部に生起する名詞句は，&P 補部の名詞句よりも，階層上上に存在している．そのため，&P より上位にある機能範疇 X からの格の照合に関して，局所性の観点から近距離にあると考えられる．よって指定部の名詞句が X から一致を

---

[52] 具体的には，Lebanease (レバノン語: アラビア語のレバノン方言) の以下の例が挙げられる．

(i) Arabic

a. ***Keeno*** Kariim w Marwaan ʕam yilʕabo.
were.**PL** Kareem & Marwaan ASP playing. PL.
"Kareem and Marwaan were plying."

b. ***Keen*** Kariim w Marwaan ʕam yilʕabo.
was.3M.**SG** Kareem & Marwaan ASP plying.PL.
"Lareem and Marwaan were plying."

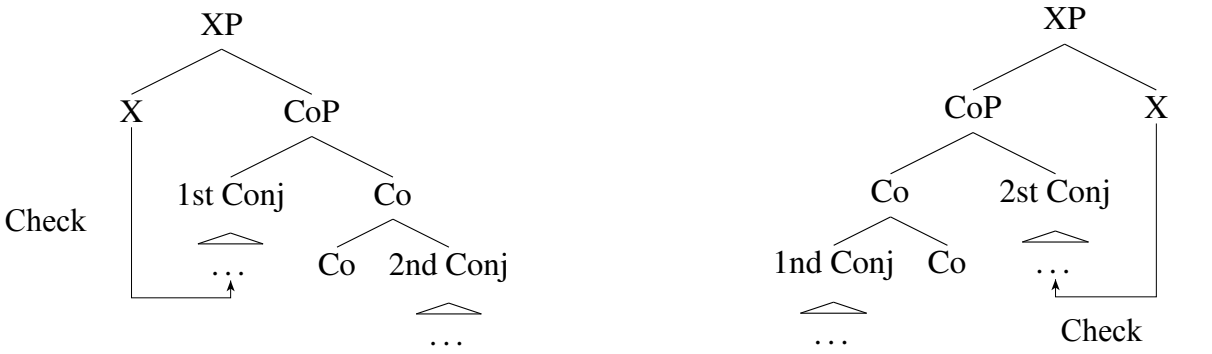
Aoun, Benmamoun and Sportiche (1994)

(i) では， "Kariim"と "Marwaan" が等位接続され複数主語を形成しているにもかかわらず，コピュラは 複数形"keeno", 単数形"Keen"のどちらで出現しても良い．(i) の現象で，通常要求される複数形のコピュラの形態を "normal", 通常と異なる形態を "deviant" と Johannessen (1994) は，呼称している．

受け，補部の名詞句は X からの一致を受けないため，(54) の一般化が生じると考えるためである．

一方，主要部後置言語では，等位構造が (55b) の構造を持つと主張する．この場合，右側指定部に生起する名詞句は，&P 補部の名詞句より X に対して近いため，右側指定部が格の一致を受け (54) の一般化が生じると考えるためである．

(55) a. 主要部前置型言語の等位構造　　b. 主要部後置型言語の等位構造



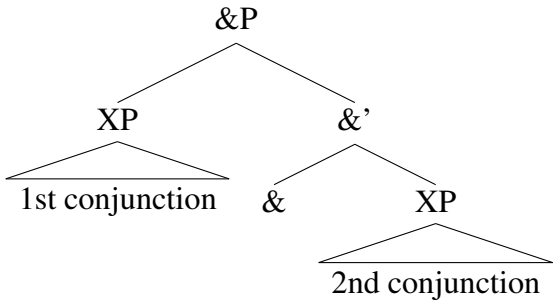
(Johannessen : 1996: 669)

Johannessen の提案する構造は，局所性の原理 (LOCALITY) の観点から適切に一般の格と特異な格の分布を説明できている様に見える．しかし，彼女の提案する指定部に生起する名詞句と，格の一致に関わる X の局所性は常に保たれる訳ではない．つまり，等位接続された名詞句は “normal and normal” として具現化する可能性もあり，この場合には， Johannessen の提案する (55a, b) では“normal and normal” 予測できない．この最も無標の形式の出現を保障する為には Johannessen には (55a, b) とは別個の構造が必要となる．

この問題点には， Johannessen 自身も気がついており， “normal and normal” の等位構造では Johannessen も通常の TP 等位構造を仮定している．だが，このメカニズムも問題である．もしも，Johannessen が述べるように，特異な格付与が出現する際 (つまり，等位項の内，いずれかに deviant が出現する場合) にのみ，(55a, b) の構造が出現すると仮定するのであれば，この様な一時的な構造の構築はやはり，極小理論の観点から避けられるべきであろう．

そこで論文では，等位接続の構造として， (56) の主要部前置型の構造が主要部後置型/主要部前置型言語を問わず出現すると考える．

(56) Universal Structure of Coorination



(Yoda 2012)

(56) の構造は，Zwart (2005) の調査からも支持される．Zwart (2005) の調査では，136 言語の名詞句の等位構造を調査し，12 言語で，等位接続詞の前置と後置が見られた．また，4 言語において等位接続詞の後置がみられ，119 言語において等位接続詞の前置が見られたという．この等位接続詞の後置が見られた言語はバラサノ語 (Barasano)，イカ語 (Ika)，ログバラ語 (Logbara)，パウマリ語 (Paumarí) であった．また，単一等位接続詞を前置，後置ともに用いる言語はバラム ケイアン語 (Baram Kayan), カネラ語 (Canela), フララパイ語 (Hulalapai), カラシャ–アラ語 (Kalasha-ala), ケト語 (Ket), カーム語 (Kham), コルヤマ語 (Kolyma), ユカギール語 (Yukaghir), ナバホ語 (Navaho), スラビエ語 (Slave), ツーブ語 (Tubu), ワリ語 (Wari') と 西部の砂漠の言語 (Western Desert Language) であったという．これらの言語の多くは，V あるいは P が後置される言語であり，バラム ケイアン語 (Baram Kayan)，ワリ語 (Wari') は，V あるいは P が前置される言語であった．これらの言語の等位接続詞の特徴を見ると，ほとんどの場合が summary/comitative の手法を取っていることが分かるという．そこで，問題となる バラム ケイアン語 (Baram Kyan)とワリ語 (Wari') のデータを見ると，両言語において，等位接続詞は summary strategy を示すという．この summary strategy は，羅列された要素をまとめる機能を持ち，等位接続詞とは機能が異なる．これらのデータは， (56) の構造が主要部後置型言語においても支持されることを示している．

7. 語順を導く形態規則

本節では，等位構造で (56) の統語構造を採用するに当たり生じる，音韻的な問題について検討する．

7.1. 英語の等位接続詞と要素間の形態音韻的関係

Ross (1967)は，英語の等位構造では，一つ目の等位項ではなく，二つ目の等位項と等位接続詞が一つの音韻的単位をなすと指摘する． (57a) では “left” と “and” の間のコンマが二つの要素の間にポーズがおけることを示している．(57b) では等位接続された二文を独立させた時に，“and” は後続する文の要素として現れることを示している．(57c) では， “and” は一つ目の等位項とは一つの音韻的構成素を形成しないことを示している．

(57) a. John left, and he didn’t even say good-bye.
b. John left. And he didn’t even say good-bye.
c. *John left and. He didn’t even say good-bye.
(Progovac 1998: 3)

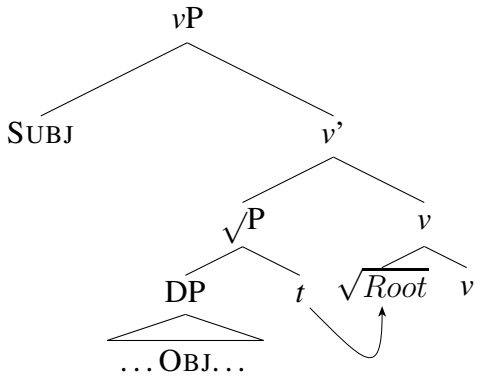
また， (58a, b) での項の外置を観察すると，二つ目の等位項と等位接続詞は外置が可能だが，一つ目の等位項と等位接続詞は外置ができない．この対比も一つ目の等位項と等位接続詞ではなく，二つ目の等位項と等位接続詞が一つのまとまりをなすことの経験的な証拠となる．

(58) a. John read a book yesterday, and the newspapers.
b. *John read the newspapers yesterday, the book and.
(Progovac 1998: 3)

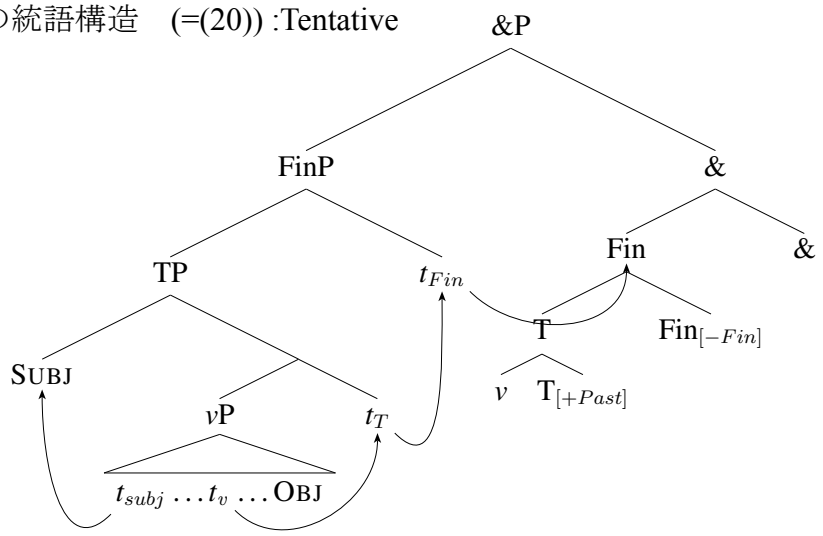
7.2. 日本語の要素間の形態音韻的関係のパズル

日本語では，ここまで，(59) に示す構造を連用形節，テ形節について仮定している．

(59) a. 連用形節の統語構造　(=(14))



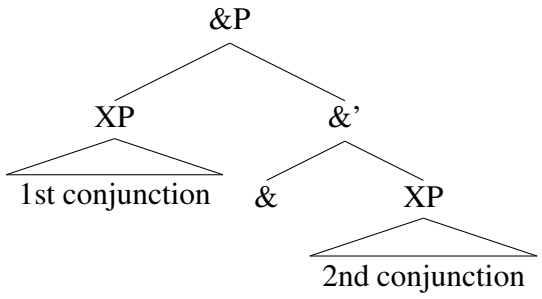
b. テ形節の統語構造　(=(20)) :Tentative



(59) のそれぞれの構造が (56) の規則に従って等位接続されるとすると，(59b) のテ形の構造では，T-Fin 主要部と，&主要部の構造的関係性で問題が生じる． (59b) の構造ではルート，*v*, T, Fin, &からなる複合主要部 (AMALGAM) を構成しており，&と複合主要部 ((59) の丸で囲んだ部分) が同一の投射の中に収まり，局所性 (LOCALITY) をなす．つまり，この構造では，第一等位項と&が音韻的まとまりをなす事を予測する．つまり，統語的には 1st Conj (=連用形節/テ形節) が，&に対して近い振る舞いを予測する．しかし，(60) の構造((56) の再掲) では，&主要部は二つ目の等位項を補部に取っており，構造的

な局所性は，&と二つ目の等位項の間で見られることとなる．言い換えれば，2nd Conj (=文終止節) の方が，&に対して近い振る舞いを見せることを予測してしまう．

(60)



ここで問題となる関係を模式的にまとめておこう．(61) に提示するように，テ形節では線形順序における局所性で (61a) のような要素間の区切り (SEGMENTATION) を示す一方，統語構造では，(61b) のような要素間の区切りを示すことが問題となる．

(61) a. [[1st conjunct * &] *2nd conjunct]
b. [1st conjunct * [& * 2nd conjunct]]

7.3. 局所性の再分析と形態統語的移動操作

(61) の局所性に関する矛盾は，線形化の後の連鎖関係の構築のレベルでは問題を生じない．なぜなら，統語構造における要素と要素の区切りが必ずしも線形化によって構築される音韻的区切りとは同一である必要がないためである．形態統語論では，テ形の具現化に関わる音韻的区切りは，狭義の統語論で構築された構造的階層性に線形化が適用された後，形態部門における要素と要素の連鎖関係によって独立して構築されると考える (→序も参照).

このような，統語論と表示レベルでの形態的な順序の再定義に関しては，Embick and Noyer (2001) で，英語の比較級や，ラテン語 (Latin) の等位接続で観察されている．このレベル間での要素の移動は形態的融合 (MOREPHOLOGICAL MERGER: Marantz 1988, Bobaljik 1995, Embick and Noyer 2000, 2001, 2008 他) と呼ばれる操作で再調整を受ける．

(62) Morphological Merger
At any level of syntactic analysis (D-structure, S-structure, phonological structure), a relation between X and Y may be replaced by (expressed by) the affixation of the lexical head of X to the lexical head of Y.
(Embick and Noyer 2001:561 下線部は筆者による)

(62) の仮定において重要な点は，分散形態論 (DISTRIBUTED MORPHOLOGY: DM) の仮定に従うと，統語的な操作が行われるレベルは，「狭義の統語論」「意味部門 (LF)」「形態部門 (MORPHOLOGY /MORPHOLOGICAL COMPONENT)」であり，形態部門は SO 後のレベルであると考える (序の分散形態論のモデルも参照) 点である．この仮定に従い，形態的融合は形態部門での操作であり，形態的な動機づけにより要素間の移動が行なわれると仮定する．

本章では，特に，要素間の区切りに関し，(63) の局所性による素性の順序変更 (LOCAL DISLOCATION) が重要となる．

(63) The Local Dislocation Hypothesis
If a movement operation is Vocabulary sensitive, it involves only string-adjacent items.
(Embick and Noyer 2001: 566)

(63) で定式化される LD は，特定の語彙に関し，隣接関係において語順の変更を許すという操作である．再び (61) の関係を振り返ってみよう．(61) について更に範疇等の詳細を記述したものを (64) として再掲する．狭義の統語論では，(64a) の構造を持ち，第一等位項 (1st Conj) ではなく，第二等位項(2nd Conj) と&が構成素をなしている．(64a) に対して SO が適用され，(64b-1) に統語的な区切りが継承される．続いて，SO された (64b-1) の区切り(BRACKETING) に対して LD を適用し，区切りの変更をする．その結果，(64b-1) は (64b-2) の構造に再解釈 (REANALYSIS) される．そして，構築された (64b-2) の区切りに従い， (64b-3) の連鎖関係の構築が生じる．ここで，一つ目の等位項の右端部に存在する複合主要部と&が構造的に一つの単位を作る．最後に，その形態的な構造に対して VI が生じ，日本語の等位接続である「連用形節/テ形節 + 文終止節」が導かれる．

(64) a. SYNTAX: [$_{\&P}$ 1st conjunct [$_{\&'}$ & 2nd conjunct]]
b-1. MORPHOLOGY: [1st conjunct*[&*2nd conjunct]]
b-2. MORPHOLOGY: [[1st conjunct*&] * 2nd conjunct]] (Local Dislocation)
b-3. MORPHOLOGY: [[1st conjunct⌒&]⌒2nd conjunct] (Concatenation)
b-4. MORPHOLOGY: VI of 1st conjunct [-te] VI of 2nd conjunct
(Vocabulary Insertion)

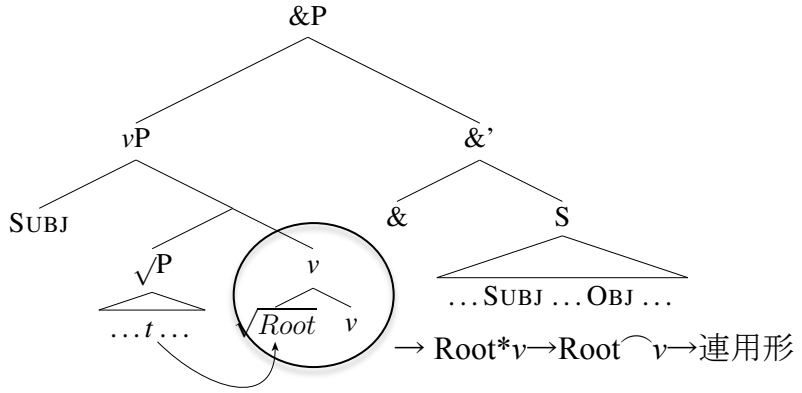
7.4. ケーススタディ

本節では，ここまでで議論した日本語の等位構造を構成する連用形接続および，テ形接続についての構造を検討する．ここで注意したいのは，連用形接続は T レベルの介在を持たない要素であり，T レベルの時制辞およびテとの交替現象には関わらない．つまり，*v*P 投射のみを持つ等位項であれば，テ形としては具現化できない．この T レベルの有無に関しては，既に第 I 部第 1 章で述べた通り，テ形がある種の時間的な前後関係を示す解釈が無標である一方で，連用形ではそうではない．結果として，連用形節が *v*P 投射であることから自然に帰結できる結果である．

7.4.1. 連用形接続の等位構造

まず，連用形接続から振り返る．連用形節は *v*P レベルの等位接続であるための等位構造は (65) となる．

(65)



(65) では，一つ目の等位項は *v*P レベル要素であるので，必然的に丸で囲まれた複合主要部は，連用形で具現化されることとなる．ただし，この場合には&主要部が音声的な

具現化を受けない．その理由は，T レベル要素の介在がなく，T レベルに出現する音声化の競合 (COMPETITION) の対象とならない為である．

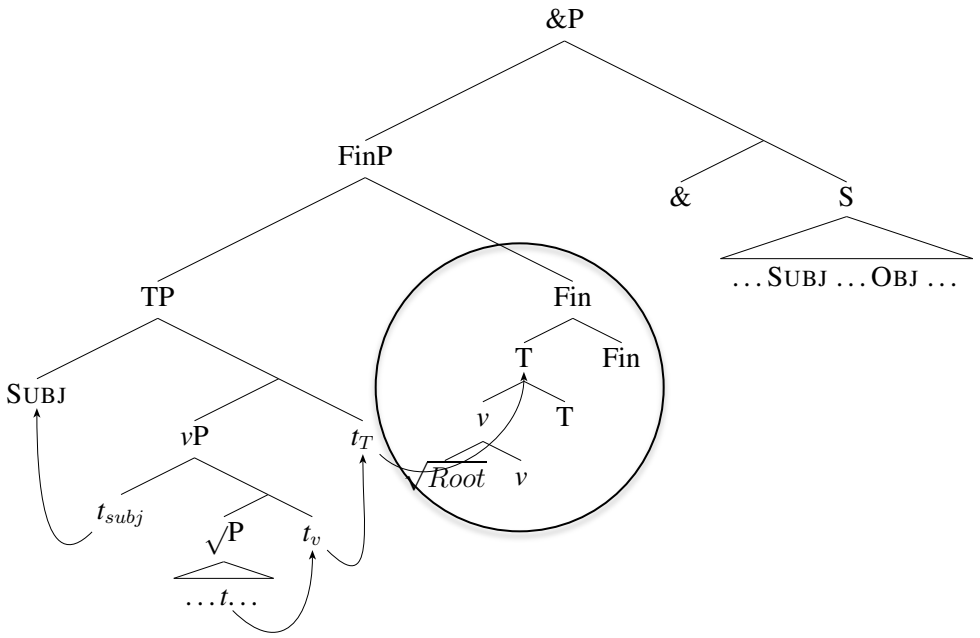
(66) C-T レベルの競合

a. Past form	$T_{[+Past]}$-$Fin_{[+Fin]}$↔ ta
b. Non past form	$T_{[-Past]}$-$Fin_{[+Fin]}$ ↔ (r)u
c.	& ↔ to / $X_{[+N]}$_____
d.	& ↔ te / _____ (elsewhere)

7.4.2. テ形の等位構造

続いて，テ形接続を振りかえる．テ形の統語構造は $Fin_{[-Fin]}$かつ $T_{[+Past]}$を持つ．また，並列関係をなすテ形接続は等位構造をもち，(60) (= (56))の構造により，接続される．その結果，(67) の構造が導かれる．

(67)



(67) の丸で囲われた要素が複合主要部をなし，テ形節の右端周縁部をなす．そして，SO 後に形態部門で線形化を受け， (68) の線形順序を持つ．

(68) [$_{\&P}$ [$_{FinP}$ …Subj …Obj [$_{Pred}$ Root-*v*-T-Fin]]*[&*2nd Conjunct]]

(68) の線形順序に対して，LD が課され，区切りの変更が生じる．この区切りの変更は，&主要部が持つ語彙特性によって動機づけられる．

(69) [[[$_{FinP}$ …Subj …Obj [Root-*v*-T-Fin]]*&]*[2nd Conjunct]

(69) に対して，連鎖関係の構築が行われ，(70) が構築される．

(70) [Subj … Obj .. [Root-v-T-Fin]⌒&]⌒[2nd Conjunct]

(70) に関し，四角に囲まれた部分が単一のまとまりをなし，語彙挿入 (Vocabulary Insertion) の適用をうける．この際には (71) に従い語彙挿入規則間の競合 (COMPETITION) の上，語彙の決定を行う．

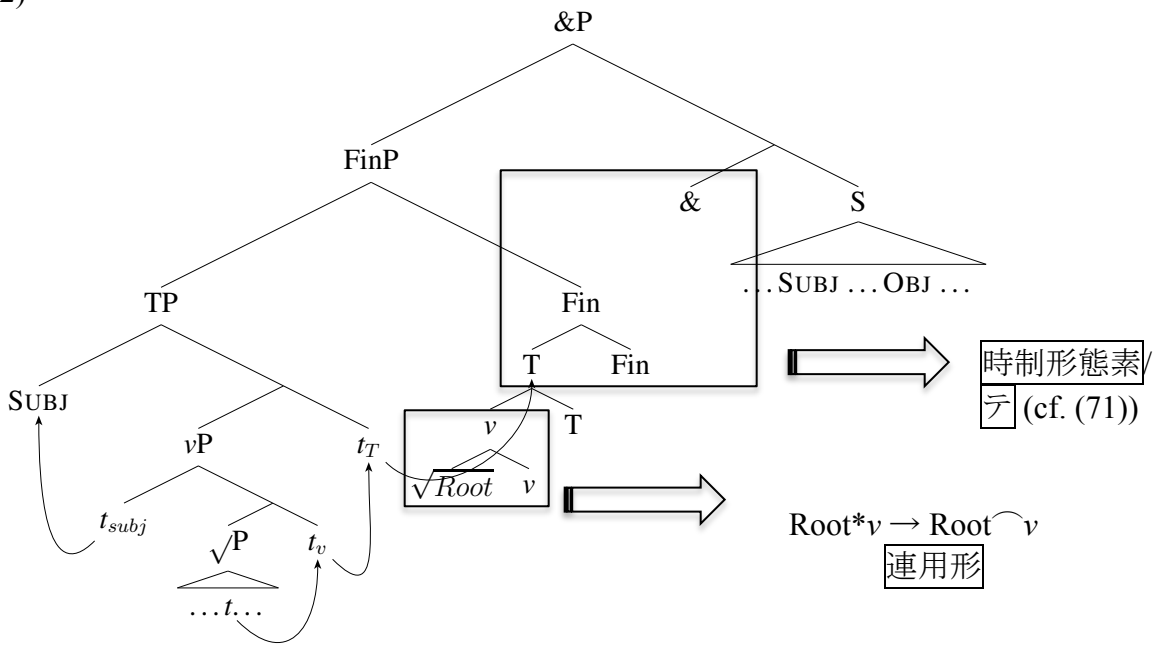
(71) (＝(66) の再掲) T レベルの競合

a. Past form	$T_{[+Past]}$-$Fin_{[+Fin]}$↔ ta
b. Non past form	$T_{[-Past]}$-$Fin_{[+Fin]}$ ↔ (r)u
c.	& ↔ to / $X_{[+N]}$_____
d.	& ↔ te / _____ (elsewhere)

テ形節では，Fin の素性は[-Fin]であることは既に第 I 部第 3 章で述べた通りである．よって，(71a,b) の競合には適合せず，(71c) 或は， (71d) の規則が適用される．しかし，(70) の構造を見ると，&に前置される要素は名詞ではない，よって，T レベルには，/te/ が挿入される．また，同時に，Root+*v* の複合に対しては，第 I 部第 2 章で述べた連用形の構造が適用される．よって，「連用形+テ」の表示形態が出現する．

つまり，厳密な意味でのテ形接続は以下に示す二つの統語操作のレベルが関与していると考える．

(72)



8. 連用形とテ形節の等位構造/付加構造

本章では，連用形節とテ形節により接続された複文が，表層では等位接続されているが，統語的には等位構造と付加構造の間で曖昧であることを Ross (1967) で指摘される等位構造制約を用いて示した．また，この曖昧性は，英語では既に Culicover and Jackendoff (1997) 等で指摘されてきたが，日本語に関して同様な指摘は少ない．

また，連用形接続とテ形接続の等位構造と付加構造を詳細に検討した結果，等位構造を持つ際のそれぞれの接続の意味関係は対比解釈を随意的に要求する並列関係に見られることを示した．

加えて，これまで多くの主要部前置型言語の等位構造に関して一般化を求めた研究は多いものの，主要部後置型言語に関する等位構造の研究は少なく，当然日本語の構造もこれまでほとんど議論されていなかった．そこで本章では，Johannessen, Munn, Zoerner らによる，等位構造を振り返り，日本語の等位構造がこれまでの研究成果とは異なり，主要部前置型言語のような特徴を示すことを明らかにした．

また，日本語の等位構造が主要部前置であるとするならば，音韻的に幾つかの問題が新たに生じると考えられるが，その問題も本論文で採用する分散形態論の理論的枠組みでは問題にならないことを示した.

第 2 章
併合/ラベル/ドメイン

1. 統語演算規則としての併合

Huser, Chomsky, and Fitch (2002) は，「狭義言語機構 (FACULTY OF LANGUAGE IN THE NARROW SENSE :FLN)」つまり，言語に固有である言語を構成する諸能力と，そうでない部分まで含めた「広義言語機構 (FACULTY OF LANGUAGE IN THE BROAD SENSE: FLB)」から個別言語能力が形作られると主張する．FLN が，狭義の統語論 (NARROW SYNTAX)と，インターフェイスへの写像に関わる回帰的演算機構のみから導かれるのであるとすると，統語演算に関わる操作として，極小主義の統語操作としては，併合 (MERGE) のみが仮定される．

もし，この仮定が正しいとするのであれば，Chomsky (2010: 52) が述べる様に言語は (1) と記述される (cf. 藤田 2012).

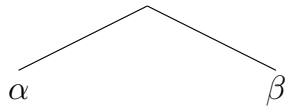
(1) Interfaces + Merge = Langauge (Chomsky 2010: 52)

本章では，このような背景を踏まえ，等位接続を併合のメカニズムから捉え直すことを目的とする．

2. 併合とラベルと投射

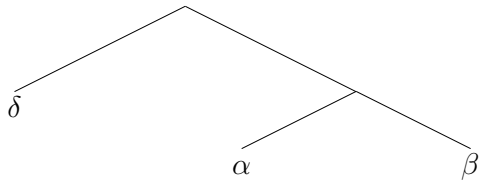
本節では，Chomsky (1995, 2000, 2001, 2004, 2008, 2012)，Fukui (2011), Narita (2011, 2012), Citko (2011a, b) 等で議論される，併合のメカニズムについて振り返る．1 節で述べた様に，併合は人間言語の統語演算に関わるメカニズムとして基本的な操作であり，そのアルゴリズムは Chomsky (1995) の裸句構造規則 (BARE PHRASE STRUCTURE: BPS) に従い，二つの要素を組み合わせ，一つの統語的な単位 (SYNTACTIC OBJECT: SO) を形成する操作として認識されてきた．BPS による定義から，併合は二股枝分かれ構造 (BINARY BRANCHING) を構築する．

(2) Merge (α, β) =
a. $\{\alpha, \beta\}$
b.



また，併合による要素と要素の組み合わせは回帰的 (RECURSIVE) に行われ，(2) の構造 (SO=$\{\alpha, \beta\}$)に対して，更に δ が組み合わせ，セット理論的 (SET THEORETIC) に大きな SO を構築する．

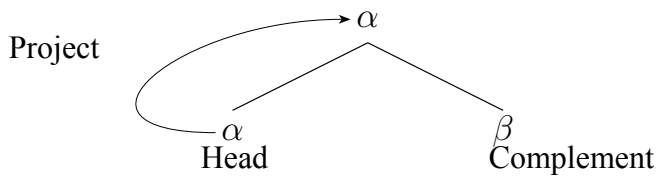
(3) Merge ($\delta, \{\alpha, \beta\}$) =
a. $\{\delta, \{\alpha, \beta\}\}$
b.



併合により組み合あげられる二つの統語的要素のうち一方が併合により構築された SO の主要部 (HEAD)を構成し，もう一方が非主要部/補部 (NON-HEAD/COMPLEMENT) とな

る．これにより，言語の内芯構造 (ENDOCENTRICITY) が保持される．また，主要部は，投射 (PROJECT) し，主要部のラベル (LABEL) が SO のラベルとして用いられる．

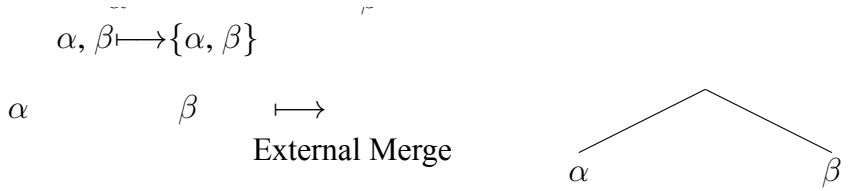
(4)



2.1. 二つの併合操作

Chomsky (2008) では，言語の回帰的演算機能である併合には二つの異なるタイプがあると仮定されている．二つのタイプとは，X と Y という要素が併合する場合に，Y が X の一部であるタイプの内的併合 (INTERNAL MERGE: IM) と Y が X の一部をなさない外的併合 (EXTERNAL MERGE: EM) である．両者の併合に関して，併合の産物は {X, Y} であり，EM では{X, Y} 集合の内部に Y のコピーが存在しないが，IM では{X, Y} 集合の内部に二つの Y のコピー (COPY) が作成され，二つのコピーのうち一つは X の内部に，もう一つは，X の外に作られる．

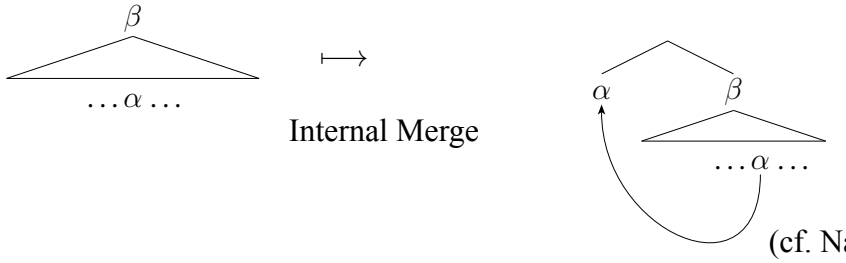
(5) External Merge: EM



(cf. Narita 2012: 28)

(6) Internal Merge: IM

$[_{\beta} \ldots \alpha \ldots] \longmapsto \{\, \alpha_i \, [_{\beta} \ldots \alpha \ldots] \,\}$



(cf. Narita 2012: 28)

この IM の操作は，コピー移動理論では (COPY THEORY OF MOVEMENT) の仮定の下では，移動として解釈される (Chomsky 2008, 2012).

2.2. ラベルのアルゴリズムと移動現象

2.2 節では Chomsky (2012) で提案されるラベルに関する計算について振り返る．ラベルの計算メカニズムは，これまで内芯構造から自然に導かれる操作，すなわち，主要部の存在によって導かれていた．だが，Chomsky (2012) では，このラベルに関するメカニズムに対してより精密化された議論がなされている．

Chomsky (2012) によれば，統語構造に導入される要素が，(7) の様に，X^0 レベル要素 ((7) では， H を主要部，XP は当然のことながら，既に内部に主要部を持ち投射した SO であるため，主要部ではないと定義される) が投射し，ラベルを形成する．例えば，(7) の構造では，H が主要部であるため SO のラベルは H となる．

(7) SO = {H, XP}

だが，(8) のような XP と YP が併合された場合には，X^0 レベルと XP レベルの併合ではないために，ラベルの選択で問題が生じる．より詳細には，(8) の SO に含まれる二つの XP，YP はそれぞれ主要部 X^0, Y^0 をもち，その両者が最短の検索 (MINIMAL SEARCH) のドメインに含まれるため，SO のラベルが XP, YP のどちらかであるかは．(7) の様には決定できない．

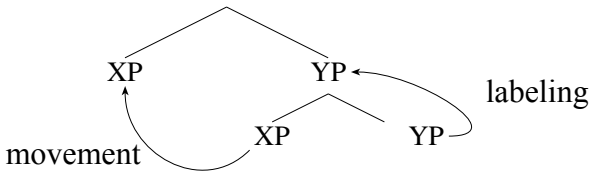
(8) SO = {XP, YP}

Chomsky (2012) によれば，このような場合には，二つのラベルに関する解決方法がある．

一つの方法は，XP と YP の一方の句 (PHRASE) を上昇させ，二つの SO 間に非対称的関係を構築する方法である (Moro 2000)．移動による XP，YP の非対称性を作るこの解決方法では，XP，YP の一方の移動により，(9) の様に，元位置の{XP, YP}構造のラベルは残存する要素のラベルが用いられる．例えば，(9) では，{XP, YP} 構造を持つ SO のうち，{XP, YP} 構造から XP がコピーされ，XP の上位のコピーが YP に再び IM した

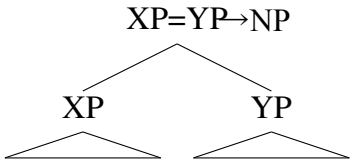
場合を示している．(9) の様に，{XP, YP} から XP がコピーされた場合には，{XP, YP} を持つ SO は，YP のラベルを受けることになる．

(9)



もう一つの解決方法では，X と Y が同一の統語範疇をなしている場合が想定されている．Chomsky (2012) によると，XP, YP がともに同一のラベルを共有していれば，{XP, YP} のラベルは問題にならず，{XP, YP} 構造が一つのラベルを利用することができるという．例えば，(10) では，XP, YP が同じ統語範疇であり，{XP, YP} の併合が生じた場合を示している．ここで，XP の範疇と YP の範疇が同一であるとすると，{XP, YP} 構造を持つ SO のラベルは XP, YP に共通のラベルとなる．具体的には，XP=NP, YP=NP であれば，{XP,YP} のラベルは NP ということとなり，SO=NP のラベルを受けることとなる．

(10)



{XP, YP} 構造の一例として，Chomsky はコピュラを介した (11) の小節構造の例を挙げる．

(11) [be {$_{\beta}$ [$_{XP}$ lightning], [$_{YP}$ the cause of the fire]}]

(cf. Chomsky 2012: 22)

(11) の小節構造 { β }部は{XP, YP} 構造を持ち，β のラベルに関しては，{XP, YP} 構造の段階では決定することができない．(11) で，XP のコピーが上昇し{XP, YP}を構成するが，この際に，XP の下側のコピー (LOWER COPY) は二つに分割された要素の一つであ

るために，ラベルの計算からは不可視的 (INVISIBLE) であるという．よって，β のラベルは YP となる．

(12) $[_{XP}$ *lightning*$]$ COPULA $\{_{\beta=YP}[_{XP}$ *lightning*$]$, $[_{YP}$ the cause of the fire$]\}$
(cf. Chomsky 2012: 22)

また，Chomsky (2012) では等位構造 (COORDINATION) でのラベルについては (13) のように説明される．等位構造は基底構造で [Z & W] の構造を持つ (ただし，日本語の連用形/テ形接続の場合には，[Z & W] は，Z と W が並列関係を持つ場合に限り存在する構造であることはⅡ部第 1 章で述べた)．つまり，等位構造は (13) の構造を持つが，β のラベルの決定のためには，(12) で示されたように，Z あるいは W が上昇する必要がある．ここで，Z のコピーを上昇させ，&と再び併合させると(13a, b) のような派生が得られる．

(13) a. $[_{\alpha}$ & $[_{\beta}$ Z W]]
b. $[_{\gamma}$ Z $[_{\alpha}$ & $[_{\beta}$ Z W]]]
(cf. Chomsky 2012: 22)

(13a) にラベル計算を適用すると，Z の低いコピーは (12) と同様に，ラベルとして認められず，β のラベルは W となり， &と Z が再び{XP, YP}の構造を持つ．ただし，この場合 Z のラベルは W のラベルと同様であり，(13b) の総体は，Z あるいは W のラベルと同様のラベルを持つ．したがって，γ のラベルは Z となる．

ここで，等位構造全体のラベルが Z となることで，更に上位の統語操作から，等位構造全体が Z として可視可能となり，統語的に単一の要素として統語操作の対象となる．

ここで提案するメカニズムの採用で，日本語の名詞句が等位接続された際に，格助詞が二つの等位接続された名詞句に後接する 「太郎と花子が」が可能で，「太郎がと花子が」が非文法的である理由が説明できる．

(14) $[_{NP}$ 太郎$]$ $[_{\&}$ と$]$ $[_{NP}$ 花子$]$-$[_{Nom}$ が$]$

(14) では，名詞句「太郎」と「花子」が等位接続されており，{XP, YP} 構造をもつ．(13) のラベル付けの計算を利用すると，(14) の構造は， (15) で示される．ここで，(15a)の様に，等位接続された「太郎」「花子」は {XP, YP} 構造をもち，「太郎」のコピーが，&と併合することで，(15b) の構造が得られる．また，β のラベルを決定する際には，低い NP のコピーのラベルが不可視的であるので，「花子」のラベルが用いられ，β は NP となる．続いて，(15c) の段階で，γ のラベルは，「太郎」のラベルが用いられ，名詞句となり，等位節全体のラベルは NP となる．この NP の等位項に対して，日本語では格の付値が行われ，表層で(15d) の「名詞句&名詞句–が」という表示が導かれる．

(15)
a. $[_{\alpha}$ & $\{_{\beta}$ $[_{NP}$太郎] $[_{NP}$花子]}]
b. $[_{\gamma}$ $\boxed{[_{NP}\text{太郎}]}$ $[_{\alpha}$ & $\{_{\beta\rightarrow NP}$ $[_{NP}$太郎] $[_{NP}$花子] }]]
c. $[_{\gamma\rightarrow NP}$太郎 [& $[_{NP}$花子]]
d. $[_{NP}$太郎 & 花子] が

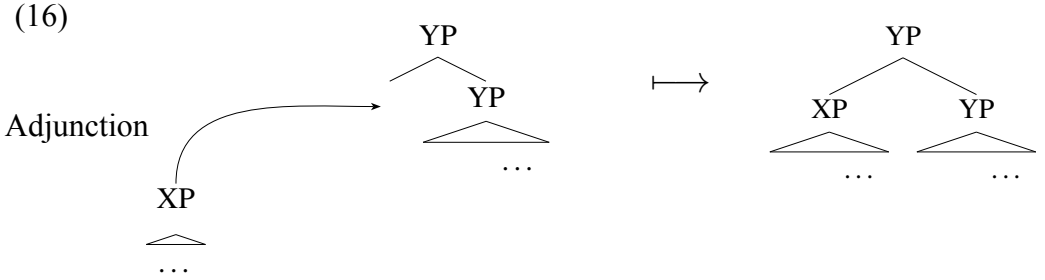
2.3. ラベルの計算と付加構造

本 2.3 節では，ラベルの計算と付加構造について振り返る．付加構造 (ADJUNCTION) は，通常の併合とは異なり，二つの要素を並行的に自由に併合する操作ではなく，$<\alpha, \beta>$ の順序集合 (ORDERED SET) を構築する操作であると指摘されている (Chomsky 2004). 付加構造が付加 (ADJUNCT) による結果であるとすると，付加という操作は α に対して，要素を追加する操作となる．つまり，付加によって作られる構造 (＝付加構造) は，通常の併合とは異なる操作により生じる構造となる．よって，付加構造は EM, IM ではないため，項構造に対する要求を満たすことや，周縁部の特性 (EDGE FEATURE) を満たすことができない．

上の点で付加が EM, IM とは異なるため，Chomsky (2004, 2008, 2012) では，付加構造を構築する併合を通常の併合とは異なるタイプの併合と述べている．本論文も Chomsky の主張に賛同し，付加構造は通常の項構造を満たす様な併合とは異なる併合，つまり，付加を構成する併合 (以下，本論文では付加: ADJUNCTION と呼ぶ，Chomsky 2004, 2008, 2009 では PAIR MERGE) によって導かれると仮定する．

上記の仮定に従うと，付加による構造は (16) の様に示される．

(16)



この付加のメカニズムに従えば，付加を受ける側の節，(ここでは主節 (ROOT-CLAUSE) と呼称する) と付加詞の間のラベルのメカニズムについては主節側のラベルが採用される．

しかし，この付加構造の構築に関しては，様々な議論がある．例えば，Stepanov (2001, 2007), Fox (2001) 他では，付加詞は狭義の統語論の派生が完了し，SO する前に (COUNTER-CYCLICALLY) 統語構造に挿入されることが可能であると述べている (後期併合分析: LATE-MERGE ANALYSIS)．また，Chomsky (1995, 2000, 2004, 2008, 2012) では、Stepanov, Fox らが提案する後期併合分析に対して，理論内の問題を含むために，異なる統語派生の領域 (DIFFERENT PLANE) で形成された付加詞 (ADJUNCT) が，SIMPL という操作で SO 後に解釈されると主張している．

本論文では，この二つのアプローチの詳細な議論は Chomsky (2004) に譲り，付加詞が主節と異なる領域で構築され，先ほどの項を導入するタイプの併合 (SUBSTITUTION: Emonds 1970 Set merge: Chomsky 2004, 2008, 2012) である EM, IM と異なるタイプの併合であるとのみしておこう．

3. 付加詞の併合と抜き出し

本章 2 節で議論したように，付加詞と通常の併合はそのラベル計算が異なる．更に，付加構造は，通常の併合メカニズムとは異なる併合 (=付加) によって，主節に付加されることを確認した．付加詞の特徴として，これまで付加詞は以降に示す様に，多くの言語において島を形成し，統語的な操作の適用を受けないことが観察されている．

しかし，詳細な検討 (Boeckx 2008, Trusell 2007a, b, Narita 2012) によると，全ての付加詞が統一的な振る舞いを見せる訳ではない．次節以降で，これまでの付加詞に関する一般化を振り返る．なお，以下では，「併合」は通常の併合を意味し，「付加」は付加詞を形成する併合を意図し呼び分ける．

3.1. 束縛条件と付加構造

まず付加による統語構造の構築について振り返る．Lebeaux (1988, 1991) は，英語の束縛条件 (C) (BINDING CONDITION C: Chomsky 1981, 1982, 1986) に関し，興味深い観察を提示している．(17a, c) では，Wh 句の内部に生起する同格の that-節内部に生起する “John”が，元位置で c 統御されることにより，“John”と “he”に間で束縛条件 (C) の違反が生じ，“John” と “he” の間の適正な束縛関係が成立しない．この結果，(17a, c)は非文法的な文となる．

一方で，(17a, c) の同格節を関係節に置き換えた (17b), (17d) を比較した場合，両者で異なる振る舞いが見られることが指摘されている．具体的には (17b) では，(17a)と異なり，付加された関係節の内部に生起する “John” に対して束縛条件を満たす振る舞いをしている．この事実は，“John”がの“he”による束縛が統語派生のどの段階においても，生じていないことを示している．更に(17b, d) の比較から，Wh 移動の適用されていない場合に関して，(17c) と同様，”John” と “he” の間に束縛条件の違反が見られる．

(17) a. *? Which argument that John$_i$ is a genius did he$_i$ believe?
b. Which argument that John$_i$ made did he believe?
c. * He$_i$ believed the argument that John$_i$ is a genius.
d. * He$_i$ believed the argument that John made.
(Stepanov: 2001)

(17) に示された文法性の差異に対して，Lebeaux は，英語では付加詞として分析される関係節が狭義の統語論で主節が完成した後に挿入 (LATE MERGE) されている可能性を指摘している．ここでは，Lebeaux が議論する，付加操作が統語派生のどの段階で生じ

ているかについては議論しないが，付加詞を構築する操作が，併合操作と異なる振る舞いを生じること一つの根拠となろう[53].

3.2. 付加詞からの抜き出し再考

これまで英語において付加詞が付加詞の島 (ADJUNCT ISLAND) を形成し，島からの抜き出しが非文法性を導くと一般化されてきた．まず，一般的な付加詞節として because 節をみる．

(18) The man criticized Mary [because she failed the exam].

(18) において，because 節は文中で副詞的に用いられており，それ自身は存在しなくても文としては成立する．よって，付加的要素であると考えられ，because 節や，それに類似する節からの抜き出しは非文法性を示すとされてきた．

(19) a. *This is the girl$_i$, that John failed the test [because he was thinking about t_i].
b. *I know what$_i$ the man criticized [Mary after she said t_i].
c. *It was this flaw$_i$, that the man criticized Mary [due to t_i].
(Narita 2012: 13)

しかしながら，付加詞からの抜き出しに関する詳細な検討 (Chomsky 1982, Boeckx 2003, Trusell 2007a, b, Narita 2012) によると，全ての付加詞が統一的な振る舞いを見せる訳ではない． (20) に示されるように，抜き出しを許す付加詞節も存在することが報告されている．

(20) a. Which book$_i$ did John design his garden [after reading t_i]?
b. What$_i$ did John arrive [whistling t_i]?
c. What$_i$ did John drive Mary crazy [trying to fix t_i]?
d. Who$_i$ did John travel to England [to make a sculpture of t_i]?
e. What$_i$ did Christ die [in order to save us from t_i]?
(Narita 2012: 13: adapted by Trusell 2007a, b)

[53] ただし，Lebeaux や，Stepanov が述べるような，後期併合が存在すると仮定した場合に，構造が完成した領域に対しての統語操作を許すメカニズムが必要となる．そのようなメカニズムは生成文法理論の局所性/循環的な操作適用に関わる領域等の点から，問題が生じる可能性がある．

この様な，付加詞のタイプ間の異なった振る舞いに対して，Narita (2012) は，抜き出しに関する文法性の差異は，付加詞の付加する構造的位置によって生じる，と主張している．Narita によれば，付加詞の中でも，主節 (ROOT-CLAUSE) で比較的高い位置，つまり TP レベルに付加される付加詞に関しては抜き出しを許容しないものの，比較的低い位置，つまり，*v*P レベルに付加される付加詞に関しては抜き出しを許容するとしている．

4. 日本語の付加構造

本節では 3 節までの議論に続き，日本語の付加について検討する．日本語の付加詞の島に関しては，三原 (1994), Nishigauchi (1986, 1990, 1999), Richards (2001), 等が指摘する様に，英語程の強い島の制限が見られない．

(21) の例を見られたい．

(21) a. 北海道から $_i$，太郎は[母親がわざわざ t_i 上京したのに]
会おうとしなかった．
b. 文学部に $_i$，太郎は[次郎が t_i 入学したので]驚いた．
c. その事件で $_i$，太郎は[花子が t_i 起訴されれば]解雇するつもりでいる．
(三原 1994: 55-56 一部改変)

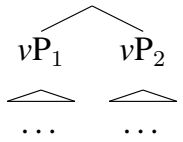
(21) では，「ノニ」節および，「ノデ」節 (英語では “although”と “because”節) からの抜き出しの例であるが，日本語では島の効果が顕現していない．付加詞の島からの抜き出しに関しては，英語の例では，構造上低い位置，つまり *v*P 付加位置からの抜き出しからが可能であるとされていた (Boeckx 2008)．また，三原 (1994) によれば，(21) の付加詞節は *v*P 付加構造を形成しているという．三原の議論に従って，日本語の付加構造が *v*P 付加位置に生起しているのであれば，これは，Narita らが導いた英語での一般化である，*v*P レベル付加詞が島を形成しないことと同様の振る舞いを見せていると言えよう．

ここで，連用形接続とテ形接続について振り返る．連用形接続，テ形接続ともに，等位構造と付加構造を持つことは既に第Ⅱ部第 1 章で述べた通りである．この連用形，テ形接続が構造上どの位置を占めるのかについて確認する．

4.1. 連用形接続の等位構造: 再考

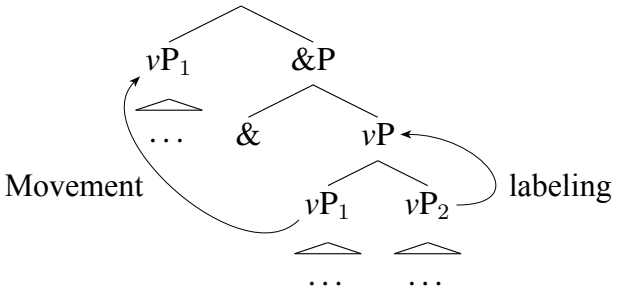
本節では，第Ⅱ部第 1 章で議論した連用形接続が付加構造を持つ場合について振り返り，その構造について議論する．本章第 2 節で既に議論したように，等位構造は併合によって導かれ，付加構造は付加によって導かれる構造であった．併合により構築された SO のラベルはその内部に含まれる要素のうちのどちらかのラベルを引き継ぐ．一方，付加により構築された SO のラベルは主節のラベルが用いられる．また，連用形接続は 2 つの *v*P の接続であることを既に第 I 部第 2 章で観察した．よって，この構造は{XP, YP} 構造を構築する．まず，等位構造として解釈される場合の併合，ラベルの計算を考える．

(22) 連用形接続 ①



ここで，{*v*P,*v*P} 構造を持つ SO が&と併合する．この併合により，vP_1 のコピーが上昇し，&と再び内的併合関係に入る．同時に，SO の {vP_1,vP_2} のラベルは *v* となる[54].

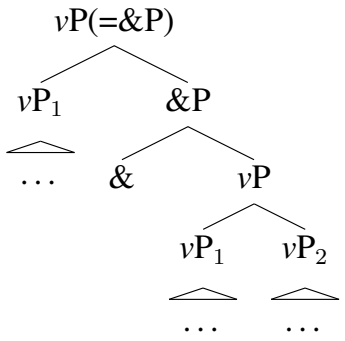
(23) 連用形接続 ②



[54] ここで，&主要部の介在により，意味部門 (LF) における Predicate Modification (以下，PM: Heim and Kratzer 1996) の適用が可能となる．Predicate Modification の詳しいメカニズムに関しては，第 I 部第 1 章を参照.

引き続いき，{*v*P, &P} の {XP, YP} 構造が生じるが，ここでは Chomsky (2012) に従い，ラベルは移動した *v*P のものが用いられると考える[55].

(24) 連用形接続 ③



(24) の構造では，二つの vP_1 のコピーが存在するが，この二つのコピーのうち発音されるのは，上位のコピーである[56].

4.2. 連用形の付加構造

4.2 節では付加構造をとる連用形について考察する．連用形節は *v*P 構造をとり，主節に付加される． 既に 4 節冒頭で述べたように，日本語の付加構造はその内部から要素の抜き出しを許すことから *v*P 位置に接続される．(25)の例は，付帯状況の連用形節である．

(25) a. 先生は太郎が酒さえ飲み，レポートを書いたと勘違いした．
b. 酒さえ，先生は太郎が $t_{酒さえ}$飲み，レポートを書いたと勘違いした．

[55] (24)の構造において，*v*P(=&P)部分に関しては，範疇としては，*v*P としてのラベルを受けることになるが，これまでの章において，&P としていたものである．

[56] 通常，多くの言語のコピーを伴う統語現象において，上位コピーが発音される事が報告されている．ただし，発音されるコピーが常に上のコピーである訳ではないことに注意されたい．コピーの発音に関する議論は Nunes (2004) が詳しい．また，Kudo (2013) によると，英語の “N after N construction”では，二つのコピーが両方とも発音されるとの報告がある．二つ以上のコピーのうちいずれのコピーを発音するコピーとして選択するかについては，今後の課題としたい．

(25b) が示す様に，かき混ぜられた「酒さえ」は，主節の主語，「先生」を超えて移動していることから，付帯状況の連用形節がかき混ぜによる抜き出しを許容することが分かる．

続いて，継起の連用形節を観察すると，付帯状況の (25) と同様に，かき混ぜによる抜き出しが可能なことが分かる．

(26) a. 太郎は鈴木先生が成績をつけ，単位をくれたと勘違いした．
b. 成績を，太郎は鈴木先生が *t* つけ，単位をくれたと勘違いした．

(27) a. 太郎は鈴木先生がお車をぶつけて，修理に出されたと勘違いした．
b. お車を，太郎は鈴木先生が *t* ぶつけて，修理に出されたと勘違いした．

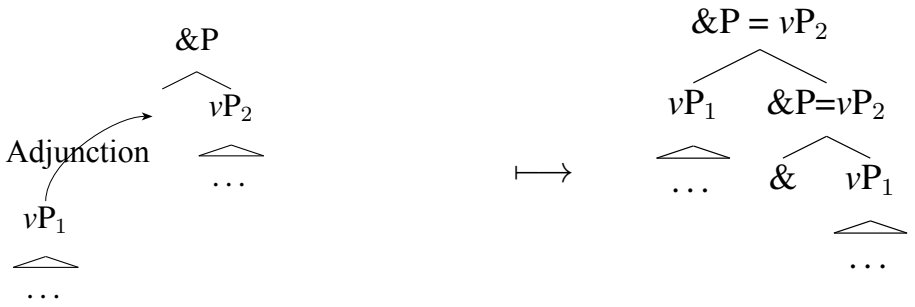
(26)，(27) が示す連用形付加詞節からの抜き出しが許容される事実は，連用形節が *v*P 付加であることを示していると言えよう．

これらの事実を考慮すると，付加構造を構成する連用形節は(28) − (29) の派生をたどる．まず，連用形節と主節が異なる平面 (PLANE cf. Chomsky 2004, 2008, 2012, Narita 2011, 2012, 他) で構築される．

(28) plane A vP_1 plane B vP_2

(28) で形成された二つの vP_1, vP_2 は，(29) の様に付加により接続される (ただし，ここでは，&P が介在も示している．&P の範疇指定は，実質上 vP_2 と同様である)．また，付加を受ける vP_2 は，主節を形成すると同時に，ラベルの計算によって，自身のラベルである *v*P をラベルとして用いる．

(29)

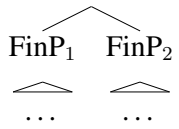


4.3. テ形の等位構造:再考

本節では，テ形の等位構造の派生について振り返る．テ形節による等位構造も，連用形節と同様に&の主要部が関係し，PM を受ける，二つの事象の同時性を保つことができる場合および，テ形節，主節がそれぞれ異なる時制を持つが，等位接続されることも可能である．

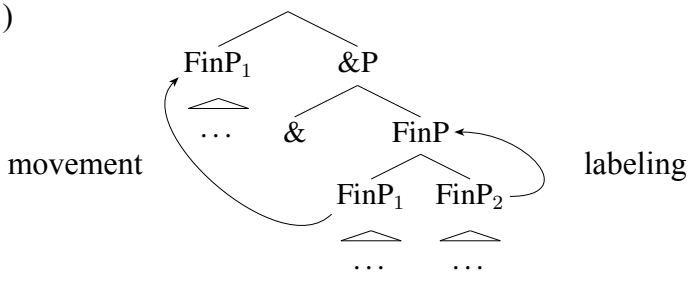
テ形節については既に第 I 部第 3 章，第 II 部第 5 章で詳細に議論したが，Fin $_{[-Fin]}$と，$T_{[+Past]}$, & 主要部が関係する構造である．ここでもやはり，テ形節と主節の接続も {XP, YP} 構造を持つ．以降では，等位接続の派生を考察する．まず，テ形節と主節が (30) の様に SO={FinP, FinP} を形成する．

(30)



そして，{$FinP_1$, $FinP_2$} 構造を持つ SO が&と併合する．この併合により，$FinP_1$ のコピーが上昇し，&と再び内的併合関係に入る．これにより，$FinP_2$ のラベルが{$FinP_1$, $FinP_2$}のラベルとして用いられる．

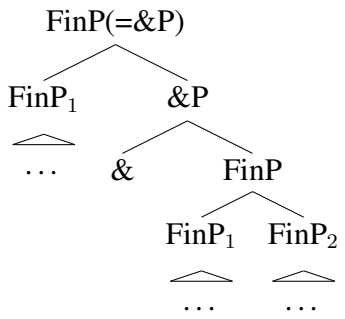
(31)



そして，連用形接続と同様に，$FinP_1$ と&が{XP, YP} 構造を持つが，Chomsky (2012) に従い，$FinP_2$ のラベルが用いられ， (32) の構造を構築する．第 I 部第 3 章では最上位の枝分かれ接点が&のラベルと仮定したが，&と同時に Fin のラベルを持つと考える[57].

[57] &は二節を接続する機能を持つため，Fin のラベルとは競合しない.

(32)



更に，FinP 右端部の複合主要部 ($T_{[+Past]}$, $Fin_{[-Fin]}$) と&の間で (33) の再解釈が働き，T⌒Fin⌒& の連鎖が第一等位項に構築され，当該連鎖に対し/te/が挿入される[58].

(33)
a. SYNTAX: [$_{\&P}$ 1st conjunct [$_{\&'}$ & 2nd conjunct]]
b-1. MORPHOLOGY: [1st conjunct*[&*2nd conjunct]]
b-2. MORPHOLOGY: [[1st conjunct*&] * 2nd conjunct]] (Local Dislocation)
b-3. MORPHOLOGY: [[1st conjunct⌒&]⌒2nd conjunct] (Concatenation)
b-4. MORPHOLOGY: VI of 1st conjunct [-te] VI of 2nd conjunct
(Vocabulary Insertion)

4.4. テ形の付加構造

4.4 節では，テ形の付加構造に関して見る．既に第Ⅱ部第 1 章で考察したが，テ形節は付加詞的に働き，その内部からの抜き出しを許す．まず，付帯状況のテ形節から抜き出しについて確認する． (34) は付帯状況のテ形節であるが，その内部からの抜き出しは文法的な文を導く．

(34)
a. 部長は部下が酒を飲んで，報告書を書いたと勘違いした．
b. 酒を，部長は部下が *t* 飲んで，報告書を書いたと勘違いした．

同様に，(35) − (36) の継起のテ形節に関してもテ形節からの抜き出しは文法的な文を導く．

(35)
a. 学生は先生が答案を採点して，単位を認定したと勘違いした．
b. 答案を，学生は先生が *t* 採点して，単位を認定したと勘違いした．

[58] 「テ」の語彙挿入に関する詳細は第 I 部第 1 章参照.

(36) a. 学生は先生が答案を採点ミスして，単位を落としたと勘違いした．
b. 答案を学生は先生が *t* 採点ミスして，単位を落としたと勘違いした．

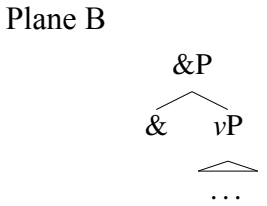
前述の通り，付加詞からの抜き出しは *v*P への付加による帰結であり，テ形の付加構造は (37) − (40) の様に進行する．

まず，二つの異なる領域で，FinP 構造および *v*P が構築される．

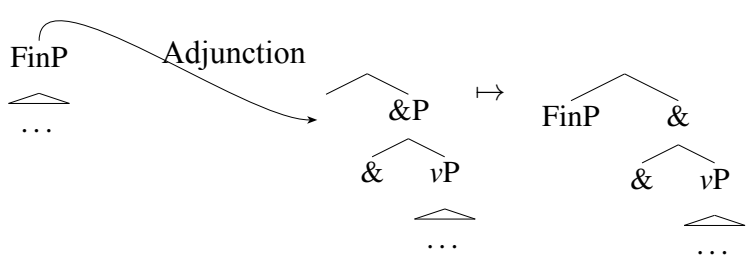
(37)

(37) で，plane B の *v*P は&によって選択され (38) の構造をとり，(39) に示される様に，&P に対して，FinP が付加される．

(38)



(39)



定義上，付加は狭義の統語論の操作であり，(39) に示す構造は，形態部門で線形化の適用を受ける．そして，FinP の右端部に生じる素性の集合 (Fin, T,) と&主要部の間で，LD が適用され，再解釈の後，T⌒Fin⌒&の連鎖が構築される．この連鎖に対して，(33) と同様のメカニズムを適用し，VI では/te/が挿入される．

(40) a. Morphology-1: [$_{FinP}$ …[$_{v}$P… Root*v] T*Fin] *[&*[$_{v}$P … Root * v]]
b. Morphology-2: [… […Root*v] *T*Fin*&] […Root*v] (Local Dislocation)
c. Morphology-3: [… [… Root⌒v]⌒T⌒Fin⌒& ⌒ [… Root⌒v]
連用形 /te/ 連用形

5. 併合/付加/ラベルと抜き出し:等位構造と付加

本節では，Chomsky (2012) のラベルと，併合のメカニズムに従い，併合/付加の二つの統語的な要素の構築のためのメカニズムから，等位構造と付加構造が区別されるべきであることを示した.

また，同時に，狭義の統語論の操作の併合/付加は，形態部門における隣接関係や，連鎖構築を下とした語彙挿入に対して影響を与えることも無く，等位構造と付加構造で同様の表示が得られることも理論的に解決した.

結論と展望

結論と展望

1. 結論

ここまで本論文では，日本語の等位構造を形成する動詞の活用形，そして，日本語の等位構造そのものに関わる議論を展開した．序で示した，本論文の目的を以下で再掲する．

(1) 日本語の連用形/テ形により導かれる複文を分析し，生成文法理論の種々のメカニズムに経験的な証拠を提示すること．

本論文の第Ⅰ部では，連用形/テ形それ自身の構造を分散形態論の枠組みから検討した．その結果として，分散形態論で仮定されるそれぞれの操作が日本語の言語事実を通しても，経験的に支持されることが提示されたと思われる．

本論文の第Ⅱ部では，連用形/テ形によって導かれる連用形節/テ形節の構造を考察し，更には，日本語の等位構造に関する網羅的な観察を行った．その結果，一見，表層的に等位接続された二つの節が，等位構造/付加構造の両者を取り得ることを見た．更には，等位構造/付加構造は人間言語のメカニズムに存在し得る最も確からしいメカニズムである併合のメカニズムのみから説明を与えられることが明らかになったと思われる．

第Ⅰ部，第Ⅱ部により，日本語の等位構造の形態論から統語論までの構造を考察し，極小主義理論の経験的妥当性，そして，その説明の体系に関する妥当性を提示できたかと思われる．

2. 今後の課題と展望

ただし，本論文が等位構造に関して全ての現象を網羅的に示したとは言えず，理論的な側面でも未だに説明が不十分な部分もある．三つの課題について示しておく．

第一に，形態論に関わる点では，本論文では連用形，テ形を扱うにとどまり，その他の活用形式については，ほとんど議論していない．分散形態論を用いた活用の議論を今後更に広い範囲に適用し，他の活用形式についてもまとめることを今後の課題としたい.

第二に，またしても形態論に関わる議論であるが，本論文では動詞そのものの形態論についての議論に終始し，態 (VOICE)や，相 (ASPECT)に関わる議論はされていない．今後の研究では，これまで日本語では動詞と考えられていた受動形態素の “(r)are”や，使役形態素 “(s)ase”，可能形態素 “eru”等の分析が今後の課題としてあげられる．

第三に，これは，形態論と統語論のインターフェイスの議論であるが，日本語の複合動詞の分析，および，他言語の serial verb construction 等も一部等位構造とよく似た構造を持っているように思われ，本論文の内容を更に深めることにより貢献できる部分も多いだろうと思われる．今後の課題としたい

最後に，本論文は，極小主義理論の仮定を用いて議論したが，極小主義理論の理論的仮定に対する生物的基盤に関する研究を進め，説明的妥当性を超えた言語理論の生物学的妥当性の検証も今後急務となるであろうと考える．

本論文は以上の四点の課題を提示し，議論を閉じる．

参考文献

Abush, Dorit. 1988. Sequence of tense, intentionality and scope. *Proceedings of WCCFL* 7. Stanford: CSLI publications, 1-14.

Alexiacou, Artemis. 2001. *Functional Structure in nominals*. John Benjamin.

Alfonso, Anthony. 1966. *Japanese language patterns.* Sophia University L.L. Center of Applied Linguistics.

Aoun, Joseph, Elabbas Benmamoun and Dominique Sportiche. 1994. Agreement, word order, and conjunction in some varieties of Arabic. *Linguistic Inquiry.* 25: 195-220.

Aoyagi, Hiroshi. 2004. Morphological case marking as phoneticalization. *Proceedings of the 2004 LSK International Conference*.1:59-71

青柳 宏. 2006. 『日本語の助詞と機能範疇』ひつじ書房.

Arad, Maya. 2003. Locality constraints on the interpretation of root: The case of Hebrew denominal verbs. *Natural Langauge and Linguistic Theory*21: 737-778.

Baker, Mark. 1988. *Incorporation*. University of Chicago Press.

Bloch, Bernard. 1946a. Studies in colloquial Japanese. Part I. Inflection. *Journal of the American Oriental Society* 66.

Bloch, Bernard. 1946b. Studies in colloquial Japanese. Part II. Syntax. *Language* 22.

Bobaljik, Jonathan. 1995. Morphosyntax. The syntax of verbal Inflection. Doctoral Dissertation. MIT.

Bobaljik, Jonathan. 2012. *Universals in comparative morphology*. Cambridge University Press.

Bobaljik, Jonathan. and Mark Baker. 2002-2008. Generative Morphology. Manuscript.

Bobaljik, Jonathan and Susi Wurmbrand. 2008. Case in GB/Minimalism. In *Handbook of Case*. ed. Andrej L. Malchukov and Andrew Spencer. 44-58. Oxford Unviersity Press.

Boeckx, Cedric. 2003. *Islands and Chains: Resumption as stranding*. John Benjamin.

Boeckx, Cedric. 2008. Islands. *Language and Linguistics Compass* 2. 151-167.

Brog, Albert, and Marie Azzopardi-Alexander. 1997. *Maltese (descriptive grammar).* Routledge.

Caha, Pavel. 2009. The nanosyntax of case. Doctoral Dissertation, University of Toromso.

Chomsky, Noam. 1957. *Syntactic Structures.* Mouton.

Chomsky, Noam. 1970. Remarks of Nominalization. In *Readings in English transformational grammar.* –ed. J. Jacobs and P. Rosenbum, 184-221.

Chomsky, Noam. 1982. *Some concepts and consequences of the theory of government and binding.* MIT Press.

Chomsky, Noam 1986. *Barriers*. MIT Press.

Chomsky, Noam 1995. *The minimalist program.* MIT Press.

Chomsky, Noam. 2000. Minimalist inquiries: The framework. In *Step by step:Essays on minimalist syntax in honor of Howard Lasnik.* ed. Roger Martin, David Michaels, and Juan Uriagereka. 89-156. MIT Press.

Chomsky, Noam. 2001. Derivation by phase. In *Kan Hale. A life in language,* ed. Michael Kenstwick. 1-52. MIT Press.

Chomsky, Noam. 2004. Beyond explanatory adequacy. In *Structure and beyond: The cartography of syntactic structures,*ed. Adriana Belletti, volume.3, 104-131. Oxford Unviersity Press.

Chomsky, Noam. 2008. On phases. In *foundational issues in linguistic theory: Essays in honor of Jean-Roger Vergnaud*, ed. Robert Freidin, Carlos Otero, and Maria Luisa Zubizarreta. 133-166. MIT Press.

Chomsky, Noam. 2010. Some simple evo devo thesis: How might they be for language? In *The evolution of human language: Biolinguistic perspectives* ed. Richard Larson. Vivian Déprez, and Hiroko Yamakido. Cambridge University Press.

Chomsky, Noam. 2012. Problems of projection. Manuscript.

Citko, Barbara. 2011a. *Symmetry in syntax: Merge, move, and labels.* Cambrdge University Press.

Citko, Barbara. 2011b. Multidominance. In *The oxford handbook in Linguistics minimalism.* ed. Cedric Boeckx. Oxford. Oxford University Press.

Collins, Chris. 1988a. Part 1. Conjunction adverbs. -ms, MIT.

Collins, Chris. 1988b. Part 2. Alternative analyses of conjunction. -ms. MIT

Comrie, Bernard. 1976. *Aspect.* Cambridge. Cambridge University Press.

Culicover, Peter W. and Ray Jackendoff. 1997. Semantic subordination despite syntactic coordination. *Linguistic Inquiry* 28: 195-217.

Davidson, Donald. 1967. The logical form of action sentences. In *The logic of decision and action.* ed. Nicholas Rescher, 81-95. Pittsburgh: Pittsburgh University Press.

Davis, Stuart, and Natsuko Tsujimura. 1991. An autosegmental account of Japanese verbal conjugation. *Journal of Japanese Linguistics* 13: 117-144.

de Vries. Mark 2005. Coordination and syntactic hierarchy. *Studia Linguistica*.59. 83-105.

den Dikken, Marcel. 1995. *Particles: On the syntax-particle, triadic, and causative constrctions.* Oxford Unviersity Press.

Dowty, David R. 1986. The effects of aspectual class on the temporal structure of discourse: Semantics or pragmatics? *Linguistics and Philosophy* 9: 37-61.

Embick, David. 2010. *Localism versus globalism in morphology and phonology.* MIT Press.

Embick, David and Rolf Noyer. 1999. Locality in post-syntactic operations. *MITWPL Papers in Morphology and Syntax. Circle Two*: 265-317.

Embick, David, and Rolf Noyer. 2001. Movement operations after syntax. *Linguistic Inquiry* 32: 555-595.

Embick, David and Rolf Noyer. 2008. Distributed morphology and the syntax/morphology interface. In *Oxford handbook in Linguistic Interface.* 289-317. Oxford University Press.

Enç, Mürvet. 1987. Anchoring conditions for tense. *Linguistic Inquiry* 18: 633-657

遠藤 裕子.1982. 「接続助詞テの用法」『音声・言語の研究 2』

Ernout, Alfred, and François Thomas. 1951. *Syntaxe latine*. Paris. klincksieck.

Evans, Gareth. 1980. Pronouns. *Linguistic Inquiry* 11: 337-362.

Fox. Danny. 2000. *Economy and semantic interpretation.* Cambridge. MIT Press.

Fox. Danny. 2001. Antecedent contained deletion and copy theory of movement. –ms. MIT.

藤田 耕司. 2011. 「統語演算能力と言語能力の進化」藤田耕司・岡ノ谷一夫編 『進化言語学の構築–新しい人間科学を目ざして』pp 55-75. ひつじ書房.

Fukui, Naoki. 1986. A theory of category projection and its application. Doctoral Dissertation, MIT.

Fukui, Naoki. 1993. Parameters and optionality. *Linguistic Inquiry* 24: 399-420.

Fukui, Naoki. 2011. Merge and bare phrase structure. In *Oxford handbook of linguistics minimalism.* ed. Cedric Boeckx. 73-95. Oxford University Press.

Fukui, Naoki and Margaret Speas. 1986. Specifiers and projection. In *MITWPL* 8, ed. Naoki Fukui, Tova R. Rapoportm and Elizabeth Sagey. 128-172.

Fukui, Naoki, and Taisuke Nishigauchi. 1992. Head movement and case-marking in Japanese. *Journal of Japanese Linguistics*14: 1-35.

Fukui, Naoki and Yuji Takano. 1998. Symmetry in syntax. Merge and demerge. *Journal of East Asian Linguistics* 7: 27-86.

Gallego. Ángel. 2007. Phase theory and parametric variation. Doctoral Dissertation, Universitat Autonoma de Barcelona, Barcelona.

言語学研究会・構文論グループ．1989a.「なかどめ – 動詞の第二なかどめの場合」言語学研究会編『ことばの科学 2』．むぎ書房.

言語学研究会・構文論グループ．1989b.「なかどめ – 動詞の第一なかどめの場合」言語学研究会編『ことばの科学 3』．むぎ書房

Golla, Victor. 1970. Hupa grammar. Doctoral Dissertation. University of California Berkeley.

Goodall, Grant. 1987. *Parallel structures in syntax.* Cambridge. Cambridge University Press.

Grey, Nerida. 1983. Clause linkage with the TE-form in Japanese. Manuscript.

Grice, Paul. 1989. Logic and conversation. In *Studies in the way of words.* 22-40. Harvard University Press.

Grosu, Alexander. 1973. On the nonunitary nature of the Coordinate Structure Constraint. *Linguistic Inquiry* 4. 88-92.

Grosu. Alexander. 1981. Should there be a (restricted) rule of conjunction reduction? *Linguistic Inquiry* 12: 149-150.

Grimshaw, Jane. 1990. *Argument Structure.* MIT Press.

芳賀 綏．1971.『日本語文法の教室』東京堂.

Haïk, Isabelle. 1984. Indirect binding. *Linguistic inquiry* 15: 273-313.

Halle, Morris. 1997. Distributed Morphology: Impoverish and fission. *MITWPL* 30: *Papers at the Interface*. 425-449.

Halle, Morris and Alec Marantz. 1993. Distributed morphology and the pieces of inflection. In *The view from building 20*, ed. Ken Hale and Samuel Jay Keyser. 111-176. MIT Press.

Halle, Morris and Alec Marantz. 1994. Some key features on Distributed morphology. *MITWPL* 21:275-288.

Harada, Kazuko-I. 1972. Constraints on WH-Q binding. *Studies in Descriptive and Applied Linguistics*5. 180-206.

Harada, Shin-Ichi, 1976. Ga-no conversion revisited. 『言語研究』70: 23-38.

Harada, Shin-Ichi. 1971. Ga-no conversion and idiolectal variation in Japanese. 『言語研究』60: 25-38.

Harley, Heidi. 1995. Abstracting away from abstract case. In *Proceedings of the North East Linguistic Society.* ed. Jill Beckman. Vol. 25: 207-232.

Harley, Heidi. 1996. If you have, you can give. In *Proceedings of WCCFL XV*, ed. Brian Agbayani and Sze-Wing Tang. 193-207.

Harley, Heidi, and Rolf Noyer. 1999. Distributed morphology. *GLOT International* 4:3-9.

Hasegawa, Yoko. 1996. *A study of Japanese clause linkage.-The connective TE in Japanese.* CSLI Publications.

橋本 進吉. 1934. 『国語学要説』明治書院.

Haspelmath, Martin. 2000. Coordination. In *Language and linguistic description. ed.* Timothy Shopen. 1-50. Cambridge University Press.

Heim, Irenen and Angelika Kratzer. 1996. *Semantics in generative grammar.* Blackwell.

Hinrichs, Edhard W. 1986. Temporal anaphora in discourses of English. *Linguistics and Philosophy* 9: 63-82.

Hiraiwa, Ken. 2001. On nominative-genitive conversion. *Japanese/Korean Linguistics* 10: 546-559.

Hiraiwa, Ken. 2005. Dimensions of symmetry in syntax: Agreement and clausal architecture. Doctoral Dissertation. MIT.

Hiraiwa, Ken. 2010. Scrambing to Edge. *Syntax* 13: 133-164.

Hirata, Ichiro. 2006. Coordination, subject raising, and AgrP in Japanese. *Linguistic Inquiry* 37: 318-329

Horiuchi, Hitoshi. 2006. Mixed categories in Japanese. Doctoral Dissertatin. University of Texas, Austin.

Horn, Lawrence. R. 1985. Metalingustic negation and pragmatic ambiguity. *Language* 61: 121-174.

Hornstein, Norbert. 1990. *As time goes by: Tense and universal grammar*. Cambridge University Press.

Huser, Mark, Noam Chomsky, and Tecumeseh Fitch. 2002. The faculty of language: What is it, who has it and how did it evolve? *Science* 198: 1569-1579

Ito, Junko, and Armin Mester. 2003. *Japanese morphphonemics*. MIT Press.

伊藤 たかね・杉岡洋子. 2002. 『語の仕組みと語形成』研究社.

Johannessen, Janne Bondi. 1996. Partial agreement and coordination. *Linguistic Inquiry* 27: 661-676.

Johannessen. Janne Bondi, 1998. *Coordination*. Oxford University Press.

Kabak, Baris. 2007. Trukish suspended affixation. *Linguistics* 45: 311-347.

影山 太郎. 1993. 『文法と語形成』 ひつじ書房.

Kasai, Hironobu and Shoichi Takahashi. 2001. Coordination in Japanese. *Proceedings of formal approaches to Japanese linguistics 3.* 19-32.

Kato, Takaomi. 2010. Symmetry in coordinations: The nature of CSC and its implication. Manuscript.

Kayne, Richard. 1994. *The antisymmetry in syntax.* MITPress.

岸本 秀樹. 2007. 「題目語優位言語としての日本語-題目と WH 疑問詞の階層位置」長谷川信子編『日本語の主文現象』25-72. ひつじ書房.

Kitagawa, Yoshihisa. 1986. Subjects in Japanese and English. Doctoral Dissertation. University of Massachusetts, Amherst.

Kornfilt, Jackline. 1996. On some copular clitics in Turkish. In *ZAS papers in linguistics 6*. 96-114. Zentrum für Allegemeine Eprachwissenschaft.

Kornfilt, Jackline. 2012. Revisiting “suspended affixation” and other coordinate mysteries. In *Functional Heads: The cartography of syntactic structures Vol. 7*. eds L. Bruge et. al. 181-196. Oxford Unviersity Press

Koopman, Hilda, and Dominique Sportiche. 1991. The position of subjects. *Lingua* 85:211-258.

Kratzer, Angelika. 1996. Serving the external argument from its verb. In *Phrase structure and the lexicon.* ed. Johan Rooryck and Lurie Zaring, 109-137. Kluwer Academic Press.

Kuno, Susumu. 1973. *The structure of the Japanese Language.* MIT Press.

久野 暲. 1973. 『日本文法研究』 大修館.

Kuroda, S-Y. 1965. Generative Grammatical Studies in the Japanese language. Doctoral Dissertation. MIT.

Kuroda, S-Y. 1988. Whether we agree or not. *Linguisticae Investigations*. 12:1-47.

Kwon, Song-Nim and Maria Polinsky. 2008. What does coordination look like in a head-final language? In *Assymetric events,* ed. Lewandowska-Tomaszczyk. B, 87-102. John Benjamin.

Lakoff, Geroge. 1986. Frame semantic control of the Coordinate Structure Constraint. In *Proceedings of the Chicago Linguistic Society* 22. 152-167.

Landman, Fred. 1992. The Progressive. *Natural Language Semantics* 1:1-32.

Larson, Richard. 1988. On the double object construction. *Linguistic Inquiry* 19: 335-392.

Lebeaux, David. 1988. Language acquision and the form of the grammar. Doctoral Dissertation, University of Massachusetts, Amharst.

Lebeaux, David. 2009. *Where does binding theory apply*? MIT Press.

Mahajan, Anoop. 1990. The A/A-bar distinction and movement theory. Doctoral Dissertation. MIT.

Marantz, Alec. 1988. Clitics, morphological merger, and the mapping to phonological structure. In *Theoretical morphology: Approaches in modern linguistics,* ed. Michael Hammond and Michael Noonan, 253, 270. Academic Press.

Marantz, Alec. 1994. A late note on late insertion. In *Explanation in generative grammar*. 396-437. Hunkuk Publishing.

Marantz, Alec. 1995. 'Cat' as a phrasal idiom: Consequences of Late Insertion in Distributed Morphology. Manuscript.

Marantz, Alec. 1997. No escape from syntax: Don't try morphological analysis in the privacy of your own lexicon. In *UPenn working paper in linguistics 4-2.* ed. Alexis Dimitriadis, Laura Siegel, Clarissa Surek-Clark, and Alexander Williams, 201-225.

Martin, Samuel. 1975. *A reference grammar of Japanese.* Yale University Press.

May, Robert. 1985. *Logical form: Its structure and derivation.* MITPress.

McCawley, James. D. 1968. *The phonological component of a grammar of Japanese.* Mouton.

McCloskey, James. 1986. Right node raising and preposition stranding. *Linguistic Inquiry* 17: 183-186.

McCloskey, James. 1989. A note on agreement and conjunction in Old Irish. In *A fetstcheft for William Shipley,* eds Sandra Chung and Jorge Hankeamer. 105-114. Syntax Research Center, University of California.

McCloskey, James and Ken, Hale. 1984. On the syntax of person-number inflection in Modern Irish. *Natural Language and Linguistic Theory* 1: 487-533.

Merchant, Jason. 2001. *The syntax of silence: slucing, islands and the theory of ellipsis.* Oxford University Press.

三原 健一. 1992. 『時制解釈と統語現象』 くろしお出版.

三原 健一. 1994. 『日本語の統語構造』松柏社.

三原 健一. 1997. 「連用形の時制指定について」『日本語科学』1: 25-36.

三原 健一. 2007. 「動詞移動と活用形」第 25 回日本英語学会口頭発表.

三原 健一. 2009. 「活用形と判断」講義ハンドアウト

三原 健一. 2010. 「テ形の統語構造と意味」. 未刊行論文

三原 健一. 2011a. 「活用形と句構造」『日本語文法』11: 71-87.

三原 健一. 2011b 「テ形の意味類型.」『日本語日本文化研究 21 号』: 1-12.

三原 健一・平岩 健. 2006.『新日本語の統語構造』 松柏社.

三原 健一・仁田 義雄. 2012.『活用論の前線』東京.くろしお出版

三上 章. 1953. 「現代語法序説」東京. 刀江書院.

Miyagawa, Shigeru. 1997.Against optional scrambling. *Linguistic Inquiry* 28:1-25.

Miyagawa, Shigeru. 1998. (S) ase as an elsewhere causative and the syntactic nature of words. *Journal of Japanese Linguistics* 18: 67-110.

Miyagawa, Shigeru. 2001. EPP, scrambling, and *wh*-in-situ. In *Ken Hale: A life in Language.* –ed Michael Kenstowicz., 293-338. MIT Press.

Miyagawa, Shigeru. 2008. Genitive subjects in Altaic. *Proceedings of the Workshop on Altaic Formal Linguistics. (WAFL) 4*, 181-198.

Miyara, Shinsho. 1982. Reordering in Japanese. *Linguistic Analysis* 9:307-340.

Moro, Andrea. 2000. *Dynamic antisymmetry.* MIT Press.

Munn, Alan. 1993. Topics in the syntax and semantics of coordinate structures. Doctoral Dissertation. The Unviersity of Maryland.

Munn, Alan. 1999. First conjunct agreement a clausal analysis. *Linguistic Inquiry* 30: 643-668.

Nakatani, Kentaro 2004. Predicate concatenation: A study of V-te V predicate in Japanese. Doctoral Dissertation. Harvard University.

Narita, Hiroki. 2011. Phasing in full interpretation. Doctoral Dissertation. Harvard University.

Narita, Hiroki. 2012. Remarks on the nature of headedness and compositionality in bare phrase structure. *Proceedings of Sophia University Linguistic Society* 26: 81-126.

Nemoto, Naoko. 1999. Scrambling. In *The handbook of Japanese linguistics.* ed. Natsuko Tsujimura, 121-153. Blackwell.

Nishigauchi, Taisuke. 1986. Quantification in Syntax. Doctoral Dissertation. University of Massachusetts at Amharst.

Nishigauchi, Taisuke. 1990. *Quantification in the theory of grammar.* Kluwer Academic Press.

Nishigauchi, Taisuke. 1999. Quantification and wh-constructions. In *The handbook of Japanese linguistics.* ed. Natsuko Tsujimura. 269-296. Blackwell.

Nishiyama, Kunio. 1998. The morphosyntax and morphophonology of Japanese predicates. Doctoral Dissertation, Cornell University.

西山 國雄．2012．「活用形の形態論，統語論，音韻論，通時」三原 健一・仁田 義雄 編『活用論の前線』．153-184．くろしお出版．

仁田 義雄． 1995．「シテ形接続をめぐって．」『複文の研究 (上)』仁田 義雄編. 87-126.くろしお出版．

Nunes, Jairo. 2001. Sideward Movement. *Linguistic Inquiry* 32: 303-344.

Nunes, Jairo, 2004. *Linearization of chains and sideward movement*. MIT Press.

Nunes. Jairo. 2011. The copy theory. In *The oxford handbook of linguistic minimalism.* ed. Cedric Boeckx. 143-172. Oxford University Press.

Ogihara, Toshiyuki. 1996. Tense, attitudes and scope. Kluwer Academic Press.

Ogihara, Toshiyuki. 1999. Tense and aspect. In *The handbook of Japanese linguistics*, ed. Natsuko Tsujimura, 126-348. Blackwell.

Oirsouw, Robert R. van. 1987. *The syntax of coordination.* Croom Helm.

Partee, Barbara. 1973. Some structural analogies between tenses and pronouns in English. *Journal of Philosophy* 70: 601-609.

Pesetsky, David. 1995. *Zero Syntax*. MIT Press.

Pesetsky, David. 1998. Some optimality principles of sentence pronounciation. In *Is the best good enough?,* ed. Pilar Barbosa, Danny Fox, Paul Hagstrom, Martha McGinnis, and David Pesetsky, 337-384. MIT Press.

Pesetsky, David and Esther Torrego. 2001. T-to-C movement: Causes and consequences. In *Ken Hale: A life in language.* ed. Michael Kenstowicz. 355-426. MIT Press.

Pollock, Jean-Yves. 1989. Verb movement, universal grammar and the structure of IP. *Linguistic Inquiry* 20: 365-424.

Poser, William J. 1984. The phonetics and phonology of tone and intonation in Japanese. Doctoral Dissertation. MIT.

Postal Paul. 1993. Parasitic gaps and the across-the-board phenomenon. *Linguistic Inquiry* 25: 63-117.

Postal Paul. 1998. Three Investigation of Extraction. MIT Press.

Progovac, Ljiljana. 1998. Structure for coordination part I and part II. *GLOT international* 3: 3-6, 3-9.

Pylkkänen, Liina. 2008. *Introducing arguments.* MIT Press.

Reichenbach, Hans. 1947. Elements of Symbolic logic. The Free Press.

Richards, Norvin. 1994. Additional –wh effect and the adjunction site theory. *Journal of East Asian Linguistics* 3. 195-240.

Rizzi, Luigi. 1997. The fine structure of the left periphery. *Elements of grammar: handbook in generative syntax,*ed Liliane Haegman, 287-337. Kluwer Academic Press.

Ross, John, 1967. Constraints on variables in syntax. Doctoral Dissertation. MIT.

Sag, Ivan, Gerald Gazdar, Thomas Wasow, and Steven Weisler 1985. Coordination and how to distinguish categories. *Natural language and linguistic theory.* 3: 117-172.

Saito, Mamoru, 1985. Some asymmetry in Japanese and their theoretical implications. Doctorial Dissertation. MIT.

Saito, Mamoru. 1989. Scrambling as semantically vacuous A'-movement. In *Alternative conceptions of phrase structure.* ed. Mark R. Baltin and Anthony S. Kroch. 192-200. University of Chicago Press.

Saito, Mamoru. 1992. Long distance scrambling in Japanese. *Journal of East Asian Linguistics* 1. 69-118.

佐久間 鼎. 1936. 『現代日本語の表現と語法』くろしお出版により 1983 に再版.

佐々木冠. 2005. 「日本語の動詞形態論における韻律的単一性」第 130 回日本言語学会発表資料.

Sawada, Tsuyoshi. 2007. Competition in Japanese inflection. -ms. UConn.

Schmerling, Susan. 1975. Imperative subject deletion and some related matters. *Linguistic Inquiry* 6: 501-511.

Scorretti, Maruo. 1988. Le strutture coordinate. *Grande grammatical italiama di cosultazione*. 1: 227-270.

新川 忠. 1990. 「なかどめ」言語学研究会編『ことばの科学 4』. むぎ書房.

Siddiqi, Daniel. 2006. Minimalize exponence: Economy effects on a model of the morphosyntactic component of the grammar. Doctoral Dissertation, University of Arizona.

Soga, Matsuo. 1983. *Tense and aspect in modern colloquial Japanese.* University of British Columbia Press.

Speas, Margaret. 1986. Adjunctions and projections in syntax. Doctoral Dissertation. MIT.

Stassen, Leon. 2011. Noun phrase conjunction. *The world atlas of language structures online.*

Stepanov, Arthur. 2011. Cyclic domains in syntactic theory. Doctoral Dissertation. UConn.

Stepanov, Arthur. 2007. The end of CED? Minimalism and extraction domains. *Syntax* 10: 80-126.

Tada, Hiroaki. 1993. A/A-bar partition in derivation. Doctoral Dissertation. MIT.

Tada, Hiroaki, and Mamoru Saito. 1991. VP-internal scrambling. Talk given at University of Massachusetts Amherst.

田川 拓海. 2009. 「分散形態論による動詞の活用と語形成の研究.」未刊行博士論文. 筑波大学.

田川 拓海. 2012.「分散形態論を用いた動詞活用の研究に向けて–連用形の形態統語論的問題」三原 健一，仁田 義雄編『活用論の前線』191-216. くろしお出版.

Takano, Yuji. 2004. Coordination of verbs and two types of verbal inflection. *Linguistic Inquiry* 35: 168-178.

Takezawa, Koichi. 1987. A configurational approach to Case-marking in Japanese. Doctoral Dissertation. University of Washington.

Tamori, Ikuhiro. 1967-1977. The semantics and syntax of the Japanese gerundive and infinitive conjunctions. *Paper in Japanese Linguistics* 5:307-360.

寺村 秀夫.1981. 『日本語の文法』東京. 国立国語研究所.

寺村 秀夫. 1984.『日本語のシンタクスと意味 II』くろしお出版.

Tomioka, Satoshi. 1993. Verb movement and tense specification in Japanese. In *WCCFL XI* 482-494. Stanford. CSLI.

Travis, Lisa. 1984. Parameters and effects of word order variation. Doctoral Dissertation. MIT.

Truswell, Robert. 2007a. Extraction from adjuncts ant the structure of events. *Linguia* 117: 1355-1377.

Truswell, Robert. 2007b. Locality of wh-movement and individuation of events. Doctoral Dissertation, UCL.

内丸 裕佳子 2006. 「形態と統語構造の相関-テ形節の統語構造を中心に-.」未刊行博士論文．筑波大学.

Ura, Hiroyuki. 2000. *Checking theory and grammatical functions in universal grammar.* Oxford University Press.

Volpe, Mark. 2005. Japanese morphology and its theoretical consequences: Derivational morphology in Distributed morphology. Doctoral Dissertation, SUNY.

Watanabe, Akira. 1996. Nominative-genitive conversion and agreement in Japanese: A cross-linguistic perspective. *Journal of East Asian Linguistics* 5: 373-410.

Webelhuth, Gert. 1989. Syntactic saturation phenomena and the modern Germanic langauges. Doctoral Dissertation. University of Massachusetts-Amharst.

Williams, Edwin. 1978. Across-the-board rule application. *Linguistic Inquiry* 9: 31-43.

Wurmbrand, Susi. 2012. Agree(ment): Look up or looking down? Lecture note in Agreement seminar. MIT.

山田 孝雄．1952.『日本文法論』宝文館.

依田 悠介．2007.「素性照合はいつ起こる」第 135 回日本言語学会発表資料.

Yoda, Yusuke. 2009. Coordination, Case, and operation after syntax. *Proceedings of SICOGG* 12. 439-459.

Yoda, Yusuke. 2012a. LF-symmetry in coordination. Talk given at 2012 6th ELSJ spring forum.

Yoda, Yusuke. 2012b. Nominative genitive conversion revisited: Strike back with feature transmission and cartography.『日本語日本文化研究』21:33-43.

Yoda, Yusuke. 2013. The structure of &P and contextual allomorphy. to appear in Formal Approaches to Japanese Lingusitics 6.

Yoda, Yusuke. to appear. Phasal or Phrasal Coordination? –from the evidences of Suspended Affixation.- to be presented at WAFL 9. Cornell University.

Yoda, Yusuke. and Satoshi Nambu. 2012. A cartographic approach to nominative/genitive conversion in Japanese. *On-line proceedings of GLOW in Asia workshop for young scholars*: 336-350.

吉永 尚 2008. 『心理動詞と動作動詞のインターフェイス.』和泉出版

吉永 尚 2012.『テ形節の意味と統語』三原健一・仁田義雄編『活用論の前線』. 79-114. くろしお出版.

Yuasa, Etsuyo and Jerrold M. Sadock. 2002. Pseudo-subordination: A mismatch between syntax and semantics. *Journal of Linguistics* 38:87-111.

Zoerner, Ed. 1995. Coordination: The syntax of &P. Doctoral Dissertation, University of California, Irvine.

Zwart, Jan Wouter. 2005. Some notes on coordination in head-final langauges. *The Linguistics in the Netherlands.* 232-241.